

国道11号高松東道路関連整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

太田下・須川遺跡

2009年3月

高松市教育委員会

例　　言

1. 本書は、国道11号高松東道路関連整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、太田下・須川遺跡の報告を収録した。

2. 発掘調査地及び調査期間、調査面積は、次のとおりである。

調査地　高松市太田下町　地内

調査期間　平成20年5月1日～6月17日

調査面積　1,080m²

3. 現地調査は、高松市教育委員会教育部文化財課文化財専門員小川賢ならびに高上拓があたり、非常勤嘱託中西克也と中村茂央がこれを補佐した。

4. 整理作業は小川、高上があたった。

5. 本報告書の執筆・編集は主に高上が行い、小川の補助を得た。

6. 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関ならびに方々からご教示及びご協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。

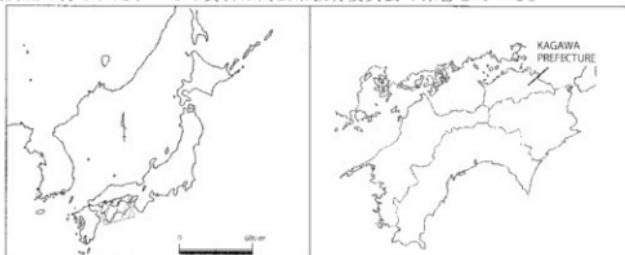
香川県教育委員会、魚島純一（徳島県立博物館）、大久保徹也（徳島文理大学）、北山健一郎・信里芳紀・森下英治（香川県教育委員会）、中山稔（香川大学）

7. 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中方位は座標北を指す。また、座標の数値は世界測地系第Ⅳ系にしたがつた。

8. 出土遺物の実測図は、土器やその他土製品等は1/4、石器1/2、造構の縮尺については図面ごとに示している。土器実測図中で、土師質土器は断面白抜き、須恵質土器は断面黒塗りで表す。また、石器実測図中で現代の折損は濃く黒で塗り潰している。

9. 出土土器に付着した赤色顔料の蛍光X線分析を徳島県立博物館　魚島純一氏に、噴礫検出地点の土壤分析を香川大学工学部准教授　中山稔氏に依頼した。また、プラントオバール分析および井戸埋土中の微細物分析を株式会社パリノ・サーヴェイに、遺物の写真撮影を西大寺フォトに委託した。

10. 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。



目 次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過	1
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 調査の方法	8
第2節 調査の概要と基本層序	8
第3節 A 調査区	13
第4節 B 調査区	35
第5節 C 調査区	38

第Ⅳ章 自然科学分析	
第1節 高松市太田下・須川遺跡出土土器に付着した赤色顔料の蛍光X線分析	48
第2節 太田下・須川遺跡における植物珪酸体(プラントオパール)分析及び微細物分析	50
第3節 調査地点の液状化について	61
第V章 まとめ	
第1節 遺構の変遷について	63
第2節 A 調査区井戸SE 2について	68

挿 図 目 次

Fig. 1 高松市地形図	4
Fig. 2 周辺遺跡分布図	6
Fig. 3 調査区配置図	9
Fig. 4 遺構配置図	11
Fig. 5 調査区の基本層序	12
Fig. 6 A 調査区 SK10 平・断面図	13
Fig. 7 A 調査区 SK11・12 平・断面図	13
Fig. 8 A 調査区平面図	14
Fig. 9 A 調査区 SK13 平・断面図	15
Fig.10 A 調査区 SD 1 平・断面図	15
Fig.11 A 調査区 SD 3 平・断面図	15
Fig.12 A 調査区 SE 1 平・断面図	16
Fig.13 A 調査区 SE 2 平・断面図および 遺物出土状況図	17
Fig.14 SE 2 第2層上位出土遺物①	19
Fig.15 SE 2 第2層上位出土遺物②	20
Fig.16 SE 2 第2層中位出土遺物①	22
Fig.17 SE 2 第2層中位出土遺物②	23
Fig.18 SE 2 第2層中位出土遺物③	24
Fig.19 SE 2 第2層中位出土遺物④	25
Fig.20 SE 2 第2層中位出土遺物⑤	27
Fig.21 SE 2 第2層中位出土遺物⑥	28
Fig.22 SE 2 第2層中位出土遺物⑦	29
Fig.23 SE 2 第2層下位出土遺物	30
Fig.24 SE 2 梱出面間接合遺物	32
Fig.25 SE 2 出土層位不明遺物	33
Fig.26 A 調査区噴礫および SK14・SD 4 平・断面図	34
Fig.27 B 調査区平面図	35
Fig.28 B 調査区 SD 4 平・断面図および 遺物出土位置図	36

Fig.29 B 調査区 SD 4 出土遺物	37
Fig.30 B 調査区 SR 1 平・断面図	37
Fig.31 C 調査区平面図	39
Fig.32 C 調査区 SK3・SD6・SP1 平・断面図	40
Fig.33 C 調査区 SK1・SD2 ~ 4 平・断面図	40
Fig.34 C 調査区 SD7 および足跡平・断面図	41
Fig.35 SD7 出土遺物	41
Fig.36 SD6 出土遺物	42
Fig.37 C 調査区 SR 1A・1B 平・断面図	43
Fig.38 SR 1 上層出土遺物	44
Fig.39 SR 1 下層出土遺物①	45
Fig.40 SR 1 下層出土遺物②	46
Fig.41 SRI 出土層位不明遺物	46
Fig.42 蛍光X線分析の一例 (遺物番号31)	49
Fig.43 蛍光X線分析の一例 (遺物番号243)	49
Fig.44 蛍光X線分析の一例 (遺物番号139)	49
Fig.45 調査地点の堆積層の累重状況	50
Fig.46 植物珪酸体含量の層位分布	52
Fig.47 粒度分布 (噴礫と粘性土層)	61
Fig.48 地質断面図 (A-A' 断面)	62
Fig.49 地質断面図と液状化危険度PL値	62
Fig.50 大溝出土遺物	63
Fig.51 太田下・須川遺跡構造配置図 (弥生時代後期)	65
Fig.52 太田下・須川遺跡構造配置図 (古墳時代中期~後期)	67
Fig.53 赤色顔料付着資料①	70
Fig.54 赤色顔料付着資料②	71
Fig.55 取手付広口皿推定復元図	73
Fig.56 A 調査区 SE2 出土土器種組成	74

挿 表 目 次

Tab.1 太田下・須川遺跡における既往の調査.....	1	Tab.6 粒度分布 (粒径区分における質量比)	61
Tab.2 整理作業工程表.....	2	Tab.7 PL 値による液状化危険度ランク	62
Tab.3 基準点座標一覧表.....	8	Tab.8 香川県内弥生時代井戸集成表.....	75
Tab.4 植物珪酸体含量.....	51	Tab.9 出土遺物觀察表.....	80
Tab.5 微細物分析結果.....	56		

図 版 目 次

PL. 1 A調査区 SE 2出土土器集合		7. A調査区中央東壁土層（北から）
PL. 2 1. A調査区 SE 2土器出土状況 (第2検出面)		8. A調査区南端部東壁土層（南から）
2. A調査区 SE 2土器出土状況 (第3検出面)		PL12 1. B調査区調査前状況（南から）
PL. 3 A調査区 SE 2器台・壺出土状況 (第4検出面)		2. B調査区北部遺構（北から）
PL. 4 1. A調査区 SE 2出土水銀朱付着 把手付広片LJ皿		3. B調査区 SD 4（北から）
2. A調査区 SE 2出土水銀朱付着鉢		PL13 1. B調査区 SD 4遺物出土状況①
PL. 5 1. A調査区 SE 2出土赤色顔料付着土器		2. B調査区 SD 4遺物出土状況②
2. A調査区 SE 2出土赤色顔料付着底部		3. B調査区 SD 4遺物出土状況③
PL. 6 1. A調査区調査前状況（北から）		4. B調査区 SD 4遺物出土状況④
2. A調査区北部遺構検出状況（南から）		5. B調査区 SD 4遺物出土状況⑤
3. A調査区中央部 遺構検出状況（南から）		6. B調査区 SD 4遺物出土状況⑥
PL. 7 1. A調査区 SE 2遺物出土状況①		7. B調査区 SD 4遺物出土状況⑦
2. A調査区 SE 2遺物出土状況②		8. B調査区 SD 4遺物出土状況⑧
3. A調査区 SE 2遺物出土状況③		PL14 1. B調査区 SD 4断面
PL. 8 1. A調査区 SE 2遺物出土状況④		2. B調査区南部東壁土層①
2. A調査区 SE 2遺物出土状況⑤		3. B調査区南部東壁土層②
3. A調査区 SE 2断面（西から）		4. B調査区南部遺構（北から）
PL. 9 1. A調査区中央遺構（南から）		PL15 1. C調査区北部遺構検出状況（南から）
2. A調査区噴縫・SR 1検出状況 (南から)		2. C調査区北部断削調査状況（南から）
3. A調査区噴縫断面		3. C調査区中央遺構検出状況（南から）
PL10 1. A調査区 SD 1（西から）		4. C調査区中央遺構（南から）
2. A調査区 SD 3（北から）		5. C調査区下層確認状況（南から）
3. A調査区 SD 3（東から）		6. C調査区 SD 2断面
4. A調査区 SD 3断面		7. C調査区 SD 1断面
5. A調査区 SE 1（西から）		8. C調査区中央東壁土層
6. A調査区 SE 1断面		PL16 1. C調査区 SD 6検出状況（西から）
7. A調査区 SK 5・6（東から）		2. C調査区 SD 6・SK 3（西から）
8. A調査区 SK 9断面		3. C調査区 SD 7・足跡検出状況 (南西から)
PL11 1. A調査区南部遺構（南から）		4. C調査区 SD 7・足跡（南西から）
2. A調査区南部下層確認状況（南から）		5. C調査区 SD 7・足跡（北東から）
3. A調査区 SK10・11（南から）		6. C調査区 SD 7・足跡断面
4. A調査区 SK11断面		7. C調査区 SR 1（北から）
5. A調査区 SK10（西から）		8. C調査区 SR 1（東壁）断面
6. A調査区 SK10断面		A調査区 SE 2出土土器①
		A調査区 SE 2出土土器②
		A調査区 SE 2出土土器③
		A調査区 SE 2出土土器④
		A調査区 SE 2出土土器⑤・石器
		B調査区 SD4・C調査区 SR 1出土土器
		PL17
		PL18
		PL19
		PL20
		PL21
		PL22

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

本調査地は高松琴平電気鉄道琴平線高架に伴う側道(市道太田下町 21号線)建設予定地である。国道11号高松東道路関連整備事業が高松市都市整備部都市計画課により計画されていた。当該地には周知の埋蔵文化財包蔵地である太田下・須川遺跡が確認されていたため、平成19年9月13日付けで文化財保護法第94条第1項に基づく発掘通知が都市計画課より提出され、本市教育委員会から県教育委員会へ達したところ、同月25日付けで「発掘調査」の行政指導があった。これを受けて都市計画課と協議を行い、道路建設前に発掘調査を実施し、記録保存を行うことで合意したため、本市教育委員会は平成20年5月1日から同年6月17日にかけて、発掘調査を実施した。本書はこの調査成果を報告するものである。

第2節 太田下・須川遺跡における既往の調査

昭和53年に一般国道11号「高松東道路」の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が香川県教育委員会によって実施された。その結果、高松市太田下町・三条町・伏石町地内で弥生時代中期～後期、古墳時代中期を中心として近世までの遺構と遺物が確認された。その後も香川県教育委員会が主体となり、高松琴平電気鉄道琴平線の連続立体交差事業などに伴う試掘調査ならびに工事立会が数次にわたって行われた。各調査の概要はTab.1・Fig.51を参照されたい。

Tab. 1 太田下・須川遺跡における既往の調査

調査主体	調査場所	調査期間	調査原因	調査面積	内容	報告書
香川県教委	太田下町・三条町・伏石町	平成6年6月20日～平成2年4月28日	高松東道路建設	約2500m ²	発掘	1
香川県教委	太田下町・三条町	平成12年8月7日～9日	琴電琴平線高架工事	約140m ²	試掘	2
香川県教委	太田下町	平成15年7月11日～25日	琴電琴平線高架工事	約18m ²	立会	未刊
香川県教委	太田下町	平成16年6月3日	琴電琴平線高架工事	約22m ²	立会	未刊
香川県教委	太田下町	平成16年8月9日	琴電琴平線高架工事	約150m ²	立会	未刊
香川県教委	太田下町	平成16年10月1日	琴電琴平線高架工事	約15m ²	立会	未刊
香川県教委	太田下町	平成17年5月26日～11月15日	琴電琴平線連続立体交差事業	約600m ²	立会	3
高松市教委	太田下町	平成20年5月1日～6月17日	国道11号高松東道路関連整備事業	約1080m ²	発掘	本書

(報告書)

1：北山健一郎・森下友子編 1995 「太田下・須川遺跡」 高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 香川

県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

2：古野聰久 2002 「コトデン高架建設」『埋蔵文化財試掘調査報告』XV 香川県内遺跡発掘調査 香川県教育委員会

3：伯里芳紀 2006 「太田下・須川遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』平成17年度 香川県教育委員会

第3節 調査日誌

調査は平成 20 年 5 月 1 日より開始した。調査予定地が極めて幅狭かつ長大なため、調査区を大きく 3 分割し、北側から順に調査・埋め戻しを行い順次南に移動するという工程を採用した。北から順に A 調査区・B 調査区・C 調査区と呼称する (Fig.3)。調査日程は以下のとおりである。

5月 1日	現地にて基準杭の打設および調査区の設定。
5月 7日	A 調査区調査開始。
5月 16日	B 調査区調査開始。
5月 27日	A 調査区調査完了。
6月 2日	B 調査区調査完了。 C 調査区調査開始。
6月 17日	C 調査区調査完了。
7月 1日	資料整理作業開始。

第4節 整理作業の体制と日程

整理作業は平成 20 年 7 月 1 日より開始し、平成 21 年 3 月に終了した。工程の詳細は以下のとおりである。

Tab. 2 整理作業工程表

	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
洗浄											
接合・復元											
遺物実測											
遺構図レイアウト											
遺構図トレース											
遺物レイアウト											
遺物トレース											
被縫衣作成											
遺物写真撮影											
写真レイアウト											
自然科学的分析(委託)											
原稿執筆											
編集											

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県の県都であり、面積約375 km²の市域に約42万人の人々が暮らす、四国地方有数の都市である。平成の大合併により近隣の庵治町・牛乳町・塩江町・香川町・香南町・国分寺町と合併したこと、阿讃山脈から瀬戸内海にまで及ぶ広大な市域を有することになった。これにより北は備讃瀬戸で岡山県と、南は阿讃山脈で徳島県とそれぞれ境を接している。

太田下・須川遺跡が立地する高松平野は南側を阿讃山脈（讃岐山脈）に、西側を五色台山塊に、東側を立石山塊に囲まれた東西約12km、南北約10kmの範囲に広がる扇状地性の堆積平野である。和泉層群からなる阿讃山脈は最高所で標高約1000mを測り、海岸に向けて階段状に標高が下がる。山脈北の前山部分では領家花崗岩から構成される丘陵性の山地となり、沿岸部付近では標高100～200m程度になる。また、阿讃山脈と平野部の間には三豊層群および焼山岬疊群が低い丘陵を形成し、瀬戸内海の海岸まで広がる。平野部は沖積低地および低位段丘から構成されており、領家花崗岩を基層として、三豊層群、沖積層が順に堆積する。この沖積層は完新世以降、平野を南北に貫く複数の河川の堆積作用により形成されたものである。平野には本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川などの河川が流れるが、中でも香東川の堆積作用が最も強く、春日川の西側付近まで香東川の堆積作用による平野が広がる。また、これらの河川はいずれも近世に大規模な改変を受けている。香東川は現在では石消尾山山塊の西側を流れているが、これは寛永年間（1624～1643）の付け替え工事によるもので、古絵図などには本来山塊の東側を流れていた事が記されている。

高松平野には、屋島や五色台など台形ないし円錐形を呈する標高20～300mほどの小山塊が多数点在する。これは高松平野をはじめとする讃岐平野の特徴的な地形として名高い。これらの山塊は侵食作用を受けやすい花崗岩が風化侵食に対する抵抗の強い讃岐岩類に覆われ、侵食から取り残されることによって形成されたもので、台地状のものはメサ、円錐状の孤立丘はピュートと呼ばれる。海浜部を見ると、花崗岩の風化殻であるマサがみられ、瀬戸内海の白く美しい砂浜を形成する。また、高松平野の景観を特徴付けるものに、平野中に多数点在する溜池がある。出水とよばれる湧水群とともに高松平野に特徴的な灌漑施設である。高松平野はいわゆる瀬戸内式気候と呼ばれる温暖少雨な気候環境にあり、年間平均降水量は平均で1000mm程度と日本列島中で最も寡雨な地域である。少ない降雨を効果的に活用するため、地形を利用した溜池や出水が多数築かれ、複雑な水利慣行とともに高松の農業を支えてきた。

太田下・須川遺跡は高松平野の中心部や北東よりの扇状地上に立地する。現在は国道11号線高松東バイパスと高松琴平電気鉄道琴平線が交差する地点が中心である。行政区画としては高松市太田下町、三条町、伏石町に属する。本調査の対象地域は、太田下町地内にあたる。

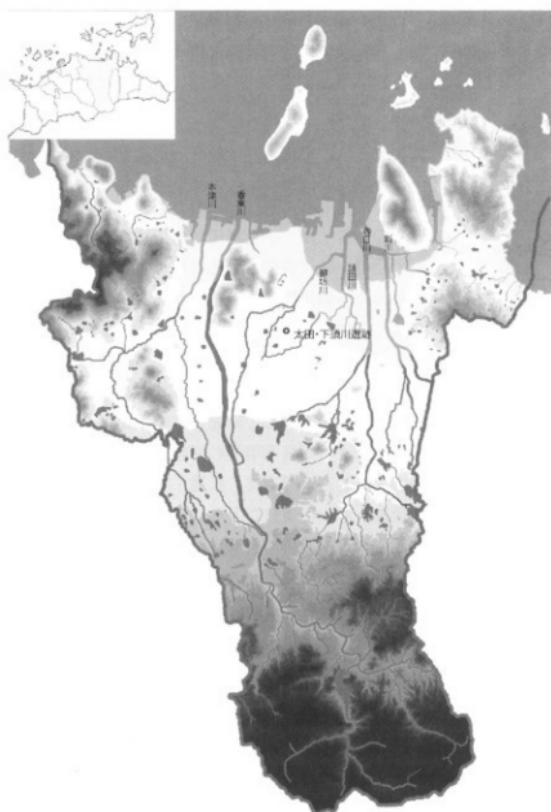


Fig. 1 高松市地形図

第2節 歴史的環境

旧石器時代～縄文時代 高松平野における旧石器時代の生活の痕跡は、久米池南遺跡、諏訪神社遺跡、雨山南遺跡、中間東井坪遺跡、香西南西打遺跡、西打遺跡などで確認されている。いずれもサスカイト製のナイフ形石器や翼状剥片などの散布が確認されている。また、中森遺跡、中間西井坪遺跡では石器の集中するブロックが検出されている。旧石器時代後期にあたるウルム氷期には、備讃瀬戸が完全に陸化しており、多くの湖沼が存在し大小の河川が流れる盆地であったことが指摘される（長谷川・齊藤 1989）。平野の大部分の堆積はこれ以後であるため、現在この時期の遺跡が検出されるのは平野縁辺部の丘陵上に集中する。

縄文時代の明瞭な遺構や遺物は極めて少ない。大池遺跡で草創期の有舌尖頭器などが認められるほかは、小山・南谷遺跡で落とし穴遺構、奥の坊奥池西遺跡、前田東・中村遺跡、本郷遺跡で後期の土坑などがわずかに認められるのみである。平野部での遺跡の増加が顕著に認められるのは晩期以降である。居石遺跡、松林遺跡、川岡遺跡、浴・長池遺跡、上天神遺跡、前田東・中村遺跡、林・坊城遺跡などで晩期の遺構・遺物が検出されている。

弥生時代 縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて、平野部での集落の形成が顕著に認められる。浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、井手東Ⅱ遺跡、上西原遺跡、東中筋遺跡、宗高坊城遺跡など、縄文晩期から継続するこれらの遺跡では、小規模区画水田跡など農耕に関する遺構が検出されている。また、林・坊城遺跡では縄文時代晩期の自然河川から多数の木製農耕具が検出されており注目される。高松平野でも稲作の伝播に伴う平野部の土地利用が盛んになったことがうかがわれる。また鬼無藤井遺跡、天満・宮西遺跡、汲仏遺跡では1重～2重の環濠が巡る環濠集落が形成されたことが確認されている。この後、前期末～中期前半に継続する集落は少ない。浴・長池遺跡、奥の坊遺跡で前期から中期前葉まで連続した居住が認められるのを除けば、新たに生活の痕跡が認められるのは中期中葉以降である。この時期には段丘化によって平野部の堆積が一気に進行することが指摘されており、こうした自然環境の変動も一因であったと考えられる。奥の坊現前遺跡、上天神遺跡、大空北遺跡、松林遺跡、松並・中所遺跡などで居住の痕跡が認められる一方、丘陵上には久米池南遺跡、中山田遺跡などのいわゆる高地性集落が形成される。中期後半～後期前半にかけては、太田下・須川遺跡、上天神遺跡など平野中央部と、前田東・中村遺跡、大空遺跡、小山南谷遺跡、奥の坊現前遺跡、久米山遺跡群など平野東部で集落跡が多く確認される。後期後半には、凹原遺跡、空港跡地遺跡、川岡遺跡、日暮・松林遺跡、一角遺跡、天満・宮西遺跡、宗高坊城遺跡などで再度集落が形成され、一部はその後終末期から古墳時代前期前半まで継続する様子が認められる。弥生時代の高松平野では集落の形成と解体が繰り返し認められ、長期間継続する集落が少ないという特徴が指摘されている。

古墳時代 集落域に関する資料は多くないが、前述のように古墳時代前期前半までは弥生時代終末期から継続する遺跡が認められる。また、本遺跡では中期の遺構・遺物が検出されており注目できる。他には空港跡地遺跡、六条・上所遺跡、浴・松ノ木遺跡などで集落跡が確認される。集落域の状況が明らかでない一方、平野縁辺部の丘陵上には数多くの古墳が築造される。前期から中期までの累代的な墓域が形成される石清尾山古墳群や、鍾形石をもつ高松市茶臼山古墳、阿蘇凝灰岩製の石棺が認められる長崎鼻古墳などが前期の有力な古墳として知られるほか、前期末～中期初頭には高松平野最大の古墳である三谷石舟古墳が築造される。前期古墳の盛行とは対照的に、中期古墳の例は極めて少ない。そのような状況の中で注目されるのは、平野西部に位置し、多くの埴輪や空心磚陶棺が出土した前方後円墳である今岡古墳である。中間西井坪遺跡ではほぼ同時期と考えられる埴輪焼成遺構や土製棺が認められ、今岡古墳との関連が注目される。ほかには女木島に埴円墳である女木丸山古墳などが知られる。後期から終末期にかけては、銅鏡が出土し、石室に石棚を持つ久本古墳、畿内型横穴式石室の可能性が指摘される横岡山古墳が有力な古墳として知られるほか、丘陵上には数多くの群集墳が築造され、淨願寺山古墳群、南山浦古墳群、



Fig. 2 周辺遺跡分布図

1. 太田下・須川遺跡
2. 高松城
3. 沢ノ町遺跡
4. 畠町一丁目遺跡
5. 二番町小学校遺跡
6. 高松城跡
7. 繩屋町遺跡
8. 右清尾山古墳群
9. 北山浦遺跡
10. 西ハゼ土居遺跡
11. 松並・中所遺跡
12. 東中筋遺跡
13. 天満・宮西遺跡
14. 佐藤城跡
15. キモンドー遺跡
16. 松繩下所遺跡
17. 境目・下西原遺跡
18. 上西原遺跡
19. 大池遺跡
20. 弘福寺領田園比定池北地区
21. 上天神遺跡
22. 鮎股遺跡
23. 居石遺跡
24. 井手東II遺跡
25. 井手東I遺跡
26. 沼・長池II遺跡
27. 沼・長池遺跡
28. 沼・松ノ木遺跡

城所山古墳群、奥の坊古墳群などが調査されている。高松平野では古墳時代を通して多くの古墳が造営されるが、一方でその造営主体となった集団の集落についての調査例は少なく、明らかでない部分が多い。今後の平野部での調査が期待される。

古代 古代の高松平野は大きく西部の香川郡、東部の山田郡に分割され、平野部のほぼ全面に条里地割が分布する。古代官道である南海道を基準に設定されたとされる当地域の条里地割は、南北線が東に約9°～11°傾くことが知られる。この条里地割に沿った溝や建物跡が正箱遺跡、松縄・下所遺跡、空港跡地遺跡、奥の坊遺跡、汲仏遺跡、西下遺跡などで検出されている。高松平野では古墳時代後期～古代の前半にかけて、それまで集落域の営まれていた微高地が埋没したとされ、それに伴い集落の断絶と形成が認められる。郡衙跡などの所在地は不明瞭であるが、前山東・中村遺跡では墨書き土器・帶金具が、新田本村遺跡では陶硯や綠釉陶器が出土しており、ともに公的施設の存在が推測されている。新田本村遺跡は小山・南谷遺跡とともに屋島城の後方支援的官衙の可能性を考えられる。また、発掘調査で全容の知られる例は無いが、下司廃寺、押師廃寺、前田廃寺、山下廃寺、多肥廃寺、百相廃寺、勝賀廃寺などが古代寺院として知られ、坂田廃寺に付属する瓦窯である片山池窯跡群について調査が行われている。

中・近世 中世高松の武士としては香西氏・十河氏・由佐氏が知られ、平地の居館である佐料城、詰め城である勝賀城などの様相が発掘調査によって明らかにされつつある。西打遺跡では香西氏との関連が示唆される居館跡が検出されたほか、八幡遺跡では平地式城館の回繞溝が確認され、キモンドー遺跡では佐藤城の堀が検出されている。居住城としては川南・西遺跡、東山崎・水田遺跡、山良南原遺跡、大空遺跡、百相坂遺跡、前山東・中村遺跡、林・坊城遺跡などで掘立柱建物を中心とした集落跡が見られる。特に空港跡地遺跡では古代～中世の集落の変遷が詳細に検討され、当該期の高松平野を考える上で重要な知見が得られている。

天文16（1588）年、農臣秀吉の家臣、牛駒親正により高松城が築城され、城下町が整備される。その後、牛駒家騒動により生駒家が出羽国に転封されると、寛永19（1642）年、松平頼重が東譲岐12万石を拝領し、高松城主として入封した。松平家は徳川将軍家の親藩として代々藩主をつとめ、明治維新を迎える。

（主要参考文献）

- 金田尊裕 1993 「諫岐国における条里プランの展開」『古代日本の景観 方格プランの生態と認識』 古川弘文館
- 柴田博・赤堀川淳二 1989 「瀬戸内海と古瀬戸内海」『アーバンクボク』28 株式会社クボタ
- 高橋学 1995 「平地の微地形変化と開発」『講座 文明と環境』6 歴史と気候 聰食書店
- 長谷川修・齊藤実 1989 「諫岐平野の生いたち－第一瀬戸内崇層群以降を中心として－」『アーバンクボク』28 株式会社クボタ
- 山本英之・中西克也編 1992 「諫岐国弘福寺前の調査」 弘福寺諫岐國山田郡川園調査報告書 高松市教育委員会
- 渡邊誠 2007 「地誌的・歴史的環境」『日暮・松林遺跡、共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 高松市教育委員会

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査予定地は既設の複数の道路により分断されている。道路によって区切られた調査区を北から順にA調査区、B調査区、C調査区と呼称する(Fig.3)。B調査区とC調査区は国道11号線によって分断されている。このため、国道11号線を境に北側と南側でそれぞれ調査区に沿った主軸を設定し、記録を行った。A・B調査区の基準杭をA1・A2、C調査区の基準杭をB1・B2と呼び、それそれをつなぐ線を主軸とする。世界測地系第IV系における各点の座標はTab. 3のとおりである。以下、本報告で地点を呼称する際には、図中に示した方位とは若干ずれるが、それぞれの調査主軸を南北方向、それに直行する方向を東西方向とみなし、南北方向の位置関係はA1から北あるいは南に○m、東西方向についてはA1-A2主軸より東あるいは西に○mと表記する。掘削は重機による遺構上面の検出、入力による遺構の調査を基本とした。遺構図及び平面図は縮尺1/20で作図し、遺物の出土状況などは1/10で記録した。

Tab. 3 基準点座標一覧表

	A1	A2	A3	A4
X	145579.451	145400.680	145356.582	145255.876
Y	50450.416	50425.657	50424.636	50410.544

(数値は世界測地系第IV系による)

第2節 調査の概要と基本層序 (Fig. 4)

現地表面の標高はA調査区北端でおよそ14.0 m、C調査区南端で16.6 mを測り、北に向かって下がる緩やかな傾斜を見せる。後述する第1遺構面の標高を見ると、A調査区北端では13.6 mであるのに対し、C調査区南端では15.1 mと約1.5 mの比高差が認められる。第2遺構面の標高も、A調査区北端で13.5 mであるのに対しC調査区南端では14.9 mを測る。現在の地表面の傾斜と同様に、調査範囲内の原地形も南から北に向かい、なだらかな傾斜をもち下降していたものと考えられる。これは第I章で述べた高松平野の地勢とも矛盾しない。

調査区内は大部分が現代の削平を受けている。調査区全域の地表面下30~50cmは削平に伴う花崗土に覆われており、一部の地点では地表面下2m以上も花崗土が認められた。削平の浅い地点では花崗土下で旧耕作土ならびに床垫土が検出され、これらの下層より遺構面を検出した。この遺構面は黒褐色系のシルトからなる層である。出土遺物が極めて少なく、時期を推定する材料に乏しいが、数少ない出土遺物と、本層を切り込む灰色系シルトを中心とした遺構理上から、近世の遺構面であると考えられる。以下第1遺構面と呼称する。

第1遺構面の下には黄褐色系粘質シルトからなる第2の遺構面が認められた。出土遺物から、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての遺構面であり、中心は弥生時代後期と古墳時代中期であると考えられる。以下第2遺構面と呼称する。部分的に断削り調査を行った地点では第2遺構

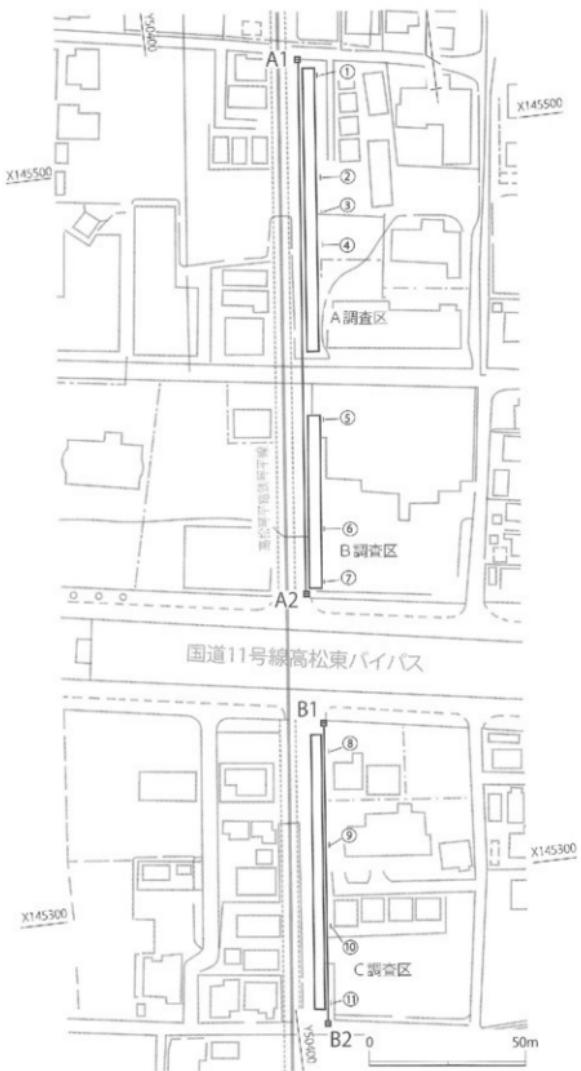
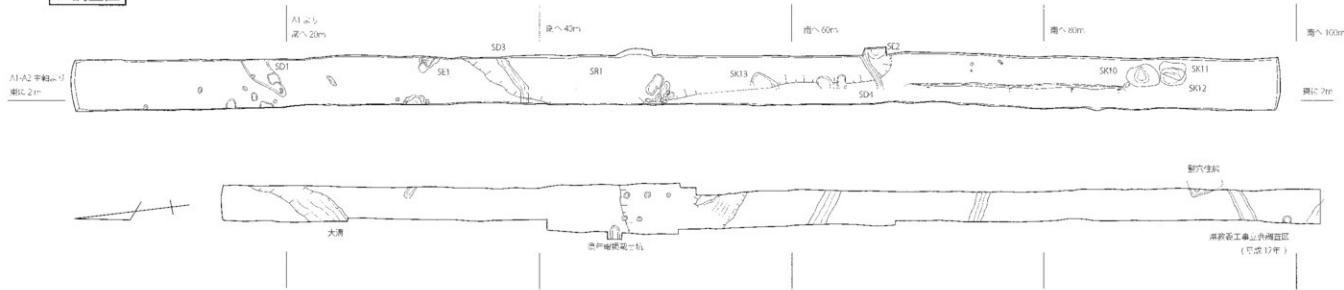
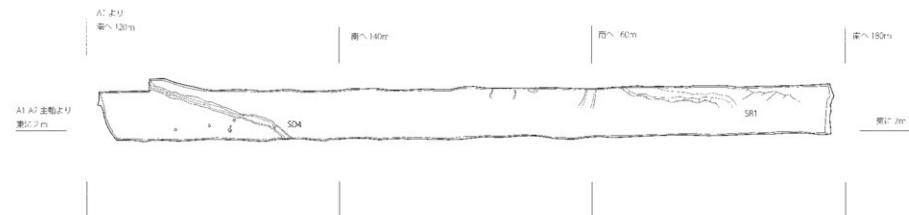


Fig. 3 調査区配置図（縮尺 1/600）※○の数字は Fig. 5 に対応

A 調査区



B 調査区



C 調査区

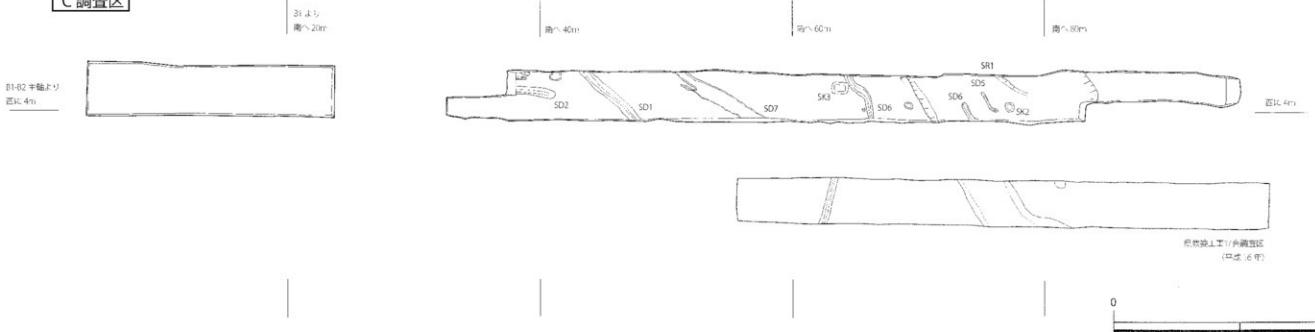


Fig. 4 遺構配置図 (縮尺 1/300)

面下から粒径の比較的大きな礫群からなる地山層を確認した。

なお、本調査においては遺物の出土した遺構が極端に少ない。このため、遺構を時期ごとに区別して記述することが困難であるので、調査区ごとに遺構および出土遺物の詳細を列記することとする。

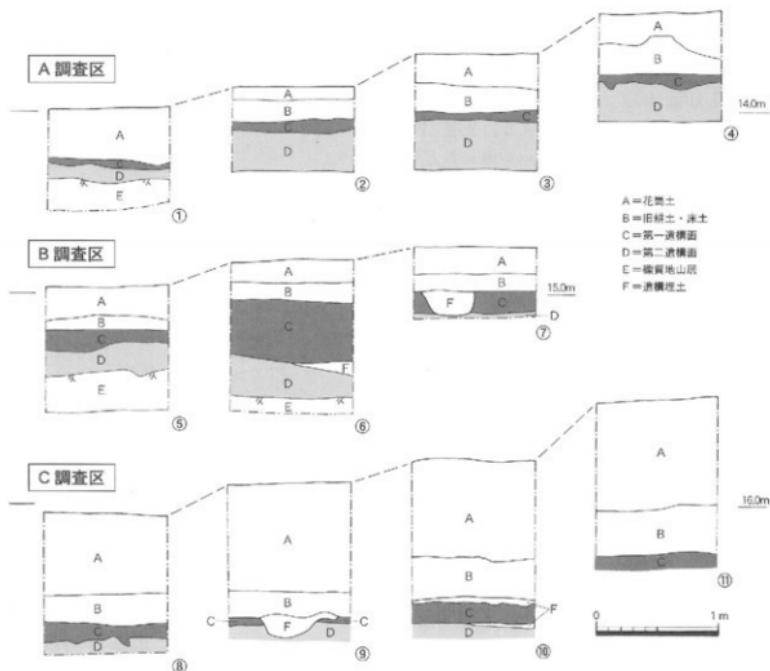


Fig. 5 調査区の基本層序

※○の数字は Fig. 3 に対応

第3節 A調査区 (Fig. 8)

A調査区は幅約4m、長さ約96mで南北方向に設定した調査区である。調査区北端の現地表面が標高14.0m、南端で標高14.8mを測る。地表面下は厚さ30~50cmほどの花崗土に覆われており、その下に旧耕作土と床土を挟んで第1遺構面、さらに下から第2遺構面を検出した。調査区の南西半部では特に花崗土が厚く認められ、断ち割り調査を行ったところ花崗土下では遺構面が既に削平されている様子が確認された。

従って調査区南側では搅乱の及ぶ範囲を避けて遺構の検出を行った。以下、特徴的な遺構の詳細を記す。

(1) 土坑

SK 10 (Fig. 6) A1より南へ88mの地点で検出した平面楕円形の土坑である。長径2.2m、短径1.8mを測る。第2遺構面を掘り込んで形成されており、土坑中央が漏斗状に深くなる。最深部の深さは0.6mを測る。埋土はまずにぶい黄橙色シルトが見られ、上に黒色シルトが堆積する。また堆積状況から、1・2層は重複する別遺構の埋土である可能性と、自然堆積による堆積状況の二つの可能性が考えられる。いずれの層からも遺物は出土していない。

SK 11 (Fig. 7) A1より南へ90mの地点で検出した平面隅丸形の土坑である。後述するSK 12を切って形成される。長辺2.1m、短辺1.3mを測り、断面は深さ0.4mのレンズ状を呈する。埋土はにぶい褐色シルトが堆積し、上層に黒色シルトが認められる。遺物が出土しておらず、時期は不明であるが遺構の切りあい関係からSK 12に後出して形成された遺構である。

SK 12 (Fig. 7) A1より南へ90mの地点で検出した平面楕円形の土坑である。SK 11に切られている。長径は2.1m、短径1.4m、深さ0.1mを測る。第2遺構面を掘り込んで形成されるが、遺物が出土せず詳細な時期は不明であるが、遺構の切りあい関係からSK 11に先行して形成された遺構である。

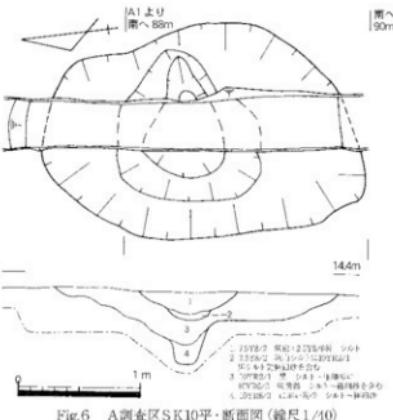


Fig. 6 A調査区SK10平・断面図 (縮尺1/10)

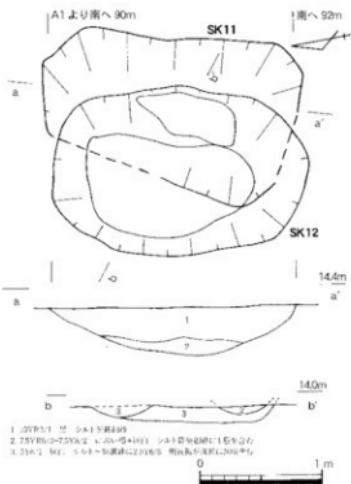


Fig. 7 A調査区SK11・12平・断面図 (縮尺1/40)

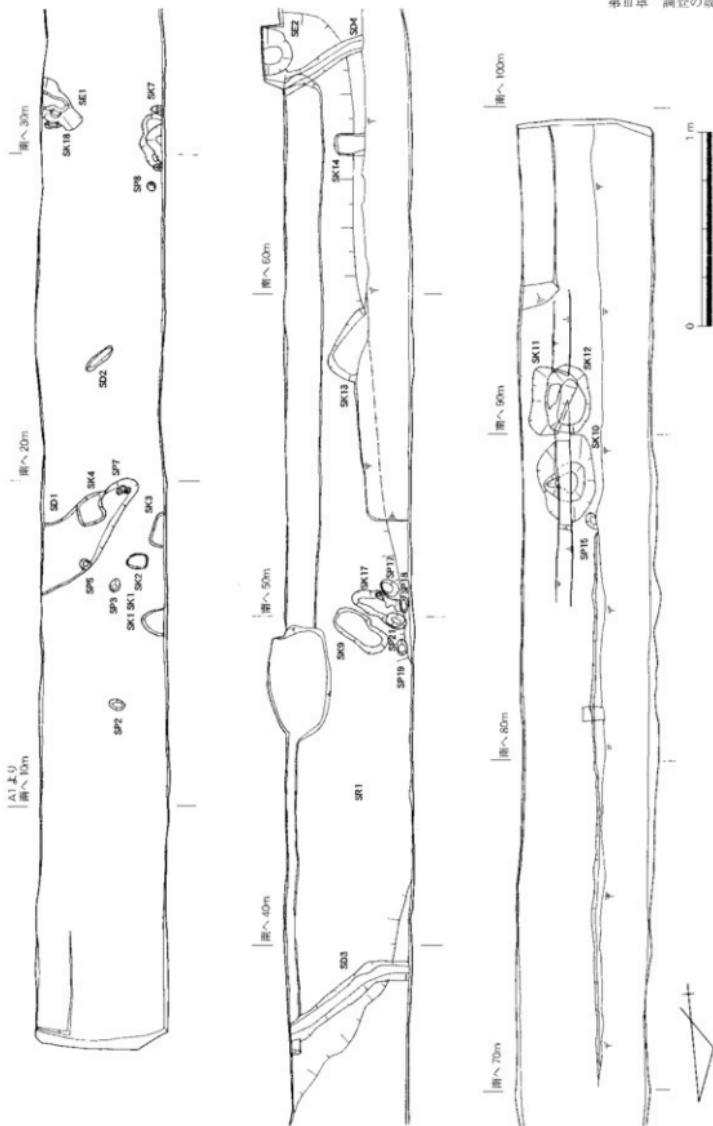


Fig. 8 A調査区平面図（縮尺 1/150）

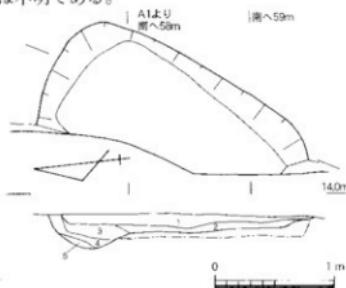
S K 13 (Fig. 9) A 1より南へ 58 m の地点で検出した土坑である。削平により西半が消失している。残存部分の長辺は 2.3 m、深さは最大で 0.3 m を測る。第2遺構面を掘り込んで形成されるが、遺物は出土しておらず、時期は不明である。

(2) 溝

S D 1 (Fig.10) A 1より南へ 18 m の地点で検出した溝である。南西から北東にのび、調査区外に続く。幅は最大で 21 m を測り、深さは約 0.1 m と浅い。第2遺構面を掘り込んで形成される。遺物が出土せず、時期は不明である。

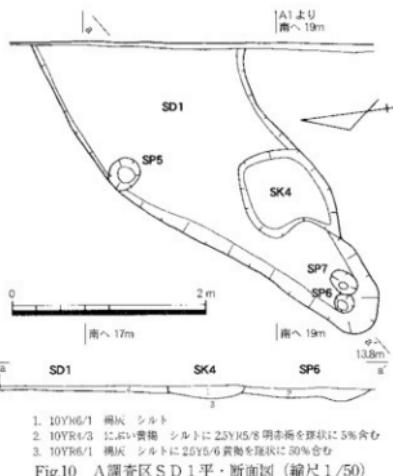
S D 3 (Fig.11) A 1より南へ 39 m の地点で検出した溝である。西側では調査区に直行し、角度を変えて北東方向へのびる。第2遺構面を基盤とし、幅は最大で 0.6 m、深さは 0.3 m を測る。土師質の上器片を 1 点検出した。土器は小片であり、磨耗が著しいため詳細は不明である。

S D 4 (Fig.26) A 1より南へ 67 m の地点で検出した溝である。南西から北東方向に直線的に伸び、両端とも調査区外へ続く。第2遺構面を基盤として形成されており、幅は最大で 0.5 m、深さは 0.5 m を測る。遺物は出土せず、時期は不明である。



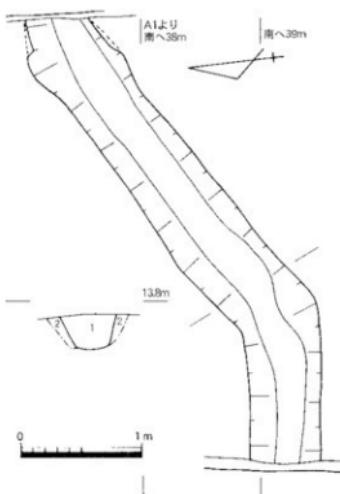
1. 10YR5/1 黄褐色 シルト Fe沈着薄
2. 10YR7/2 に赤褐色 シルト層削面に黒褐色シート現る
3. 10YR6/2 黄褐色 シルトに白色砂利を挟む
4. 10YR2/1 黒 シルトに灰白色砂質土混じる Fe沈着
5. 25Y3A/1 黄褐 腐葉シルト

Fig. 9 A調査区 S K 13 半・断面図 (縮尺 1/40)



1. 10YR6/1 黄褐色 シルト
2. 10YR6/3 に赤褐色 シルトに 25YR5/8 明赤褐色を斑状に 5% 含む
3. 10YR6/1 黄褐色 シルトに 25YR6/6 黄褐色を斑状に 30% 含む

Fig.10 A調査区 S D 1 半・断面図 (縮尺 1/50)



1. 10YR6/2 黄褐色 黏土シルト 層10mm灰褐色の縦と5cm程度の土器片を1片含む
2. 10YR5/14赤 黑色 シルトに 10YR6/6 明赤褐色を斑状に 10% 含む

Fig.11 A調査区 S D 3 半・断面図 (縮尺 1/40)

(3) 井戸

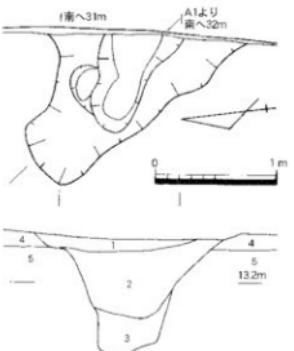
S E 1 (Fig.12) A1より南へ32mの地点で検出した井戸である。遺構の東端が調査区外へ続いているため、全容を確認することはできなかった。検出した範囲での最大幅は0.8m、深さは0.95mを測る。埋土はまず黒褐色シルト～極細粒砂が堆積し、その上層ににぶい黄褐色シルト～極細粒砂、さらに黄灰色シルト～極細粒砂が認められる。遺構底部付近からは多量の湧水が認められたため、井戸であると判断した。遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、第2遺構面を掘り込んでいることから、弥生時代から古墳時代にかけての遺構である可能性が考えられる。

S E 2 (Fig.13)

[遺構] A1より南へ68mの地点で東壁沿

いに検出した井戸である。遺構の東端が調査区外に広がっていたため、部分的に調査区を拡張して調査を行ったが、現代の側溝が隣接しており、全体を検出することはできなかった。検出した範囲では平面円形を呈し、長径約1.5m、深さ約1.3mを測る。底に近づくにつれて漏斗状に径が小さくなり、底部付近では直径が約0.4mである。第2遺構面を基盤とし、地山の礫層まで掘削が及ぶ。遺構底部付近では断削り調査を行い、堆積状況の確認を試みたが、調査中に崩落してしまったため、詳細な記録を行えなかった。底部付近の堆積は写真と調査時の所見から復元したものである。調査中、第1層からはすでに少量の湧水が見られ、第2層以下では多量の湧水が認められた。井戸枠・井戸側などの痕跡は認められず、素掘りの井戸である。第2遺構面を掘り込んで形成され、礫混の地山層まで掘りぬいている。黄灰シルトの第4層が堆積したのち、第3層、第2層と黒褐色系のシルト層が堆積する。第4層が遺構の壁沿いに垂直に見られるため、掘り返しが行われた可能性も考えられる。第2・3層は土質がほぼ均一で、土器と円碟の有無により二分したが同質の上層であると考えられる。出土遺物は第1・2層から多量の弥生土器片が認められた。

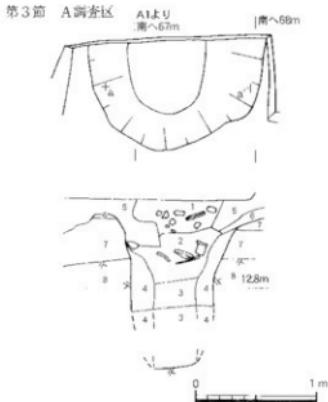
[遺物出土状況] 多量の弥生土器片が第1・2層より出土した。第1層最下部および第2層上位では比較的小さな土器片を多数検出した (Fig.13、第1検出面)。これらの遺物を取り上げたのち、平面的に遺物の検出を行い (第2検出面)、さらにそれらを取り上げ、遺物の検出を行った (第3検出面)。第2・3検出面からは比較的大きな破片を密集して検出しており、中には完形に近い資料も多く認められた。上位の遺物を取り上げたのち、第2層の最下部から器台 (142)、直口壺 (141) が認められた (第4検出面)。141は検出時縦半分に半裁されたような状態で出土した (PL. 3下段)。また、全ての検出面から、遺物と共に径5～10cmの円碟が多量に検出された。意図的に廃棄されたものと考えられる。



1. 25Y4/1 黄灰 シルト～極細粒
2. 10YR2/3 にぶい黄褐色 シルト～極細粒砂に径2cm以下の白色砂を3%以上含む
3. 10YR2/3 黒褐色 シルト～極細粒
4. 25Y4/2 稕褐色 シルト～極細粒砂
5. 25Y6/6 稕褐色 シルト～極細粒砂に10YR2/1褐色を斑状に30%含む

Fig.12 A調査区S E 1半・断面図(縮尺1/40)

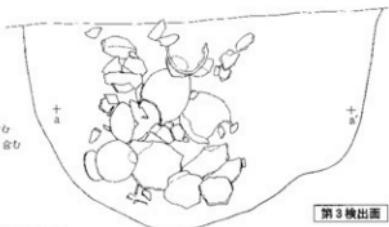
第3節 A調査区



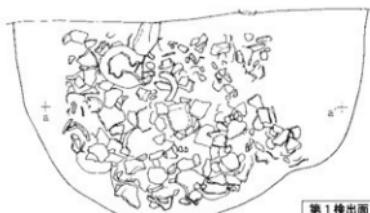
1. 25Y23/3 深井 磁化強度 15cm 低度の礫を30% (5~15cmの底面) 砂を多量に含む
2. 10Y22/2 四角 砂質ヘシキ層 厚さ5cm程度の礫を50%以上。完全に瓦い十層を多く含む
3. 10Y22/2 五 粘土 (0.5~1cm) 砂を30%含む
4. 25Y5/1 陶質合 シルトト・粘土に10Y8/8・8 浅質層を地盤に10%含む
5. 25Y5/1 陶質合 シルトト・粘土に10Y8/8・8 浅質層を地盤に20%含む
6. 10Y8/1 深井 磁化強度 10Y8/8・8 浅質層を地盤に10%含む
7. 25Y5/1 深井 シルトトに10Y8/8・8 浅質層を地盤に10%含む
8. 25Y5/1 黒褐色 砂が一層砂中に厚1~5cmの場所で50%以上含む 25Y7/6 黒褐色を夾むに20%含む



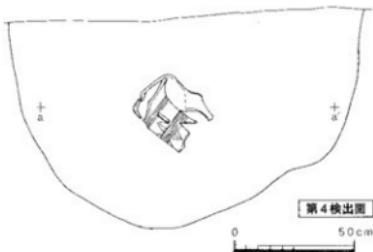
第2検出面



第3検出面



第1検出面



第4検出面

Fig.13 A調査区 S E 2平・断面図(縮尺1/40)および遺物出土状況(縮尺1/20)

〔遺物〕 多量の遺物が出土した第2層は検出状況で上から第1～第4検出面に分けて取り上げをおこなった。このうち第2～3検出面より検出した遺物を一括して第2層中位出土資料として扱い、第1検出面を第2層上位、第4検出面を第2層下位として報告する。なお胎土の詳細については遺物観察表 (Tab. 9) にまとめたが、本造構出土土器は9割以上が「角閃石細粒を稠密に含む特徴的な素地粘土を採用する」「香東川下流域産」(大久保2003)とされる土器である。以下では記述の煩雑さを避けるため、胎土については香東川下流域産以外と考えられる資料についてのみ個別に記述する。

〔参考文献〕

大久保徹也 2003「高松平野香東川下流域土器の生産と流通」|初期古墳と人和の考古学』学生社

第2層上位 (Fig.14・15)

〈壺〉(1～9) 1～3は広口壺である。1は直立する長い頸部をもち、2は短い頸部をもち口縁端部の肥厚が強い。3は頸部でくの字に屈曲し、口縁部が緩やかに外向する。ともに口縁端部が肥厚し、内上方にやや突出する。端面には2条の凹線が巡る。4～7は直口壺である。5・6は肩部に段を有し、頸部に6本の凹線を施す。8は小型壺である。最大径6.0cmを測り、内面には体部中位から上部までヘラケズリが及ぶ。9は中期的特徴を残す壺である。くの字に屈曲する肩部から口縁部につづく。

〈甕〉(10～18) 10は土師器甕の口縁部である。直線的で長い口縁部である。口縁部のみの出土であり、混入の可能性が考えられる。二次的に付着した可能性の高い赤色顔料が認められる。11は器厚が厚く、比較的長く外反する口縁部をもつ。口縁端部には明瞭な凹線が巡る。13は頸部の屈曲が弱く、短い口縁部がなだらかに外反する。口縁端部は肥厚せずそのまま収める。内面のケズリは体部上半まで及ぶ。14・16は頸部が強く屈曲し、口縁端部が肥厚し、上方へ突出する。口縁端部には2条の凹線が巡る。17は小型の甕である。口縁端部が弱く肥厚する。

〈底部〉(19～29) 19～22は屈曲と立ち上がり角度から壺・鉢の底部であると考えられる。外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリが認められる。23～29は甕の底部であろう。体部が強く屈曲し立ち上がる。内面のヘラケズリが顯著である。

〈鉢〉(30～32) 30は口縁部が湾曲し、正円に復元できないことから片口鉢であると考えられる。湾曲の形状から、片口部付近であろう。内面は口縁部付近までヘラミガキが及ぶ。31は大型の鉢である。口縁端部が水平に弱く肥厚し、明瞭な端面を有する。内面に赤色含量が付着し、分析の結果水銀朱であることが判明した（第Ⅳ章第1節）。

〈高杯〉(33～43) 口縁部は外反しながら丸く収めるもの（33）と水平に肥厚する端面をもつもの（35・37・39）が認められる。39は口縁部端面に凹線を巡らせる。40・41は脚部である。器壁が厚く、直立する。外面には入念なヘラミガキが認められ、内面はナデで仕上げられる。40は褐色を呈す胎土中に角閃石がほとんど認められず、搬入品の可能性が考えられる。脚端部は直線的にのびるもの（42）と端部が肥厚し、肥厚して下方へ突出するもの（43）が見られる。42には円孔が認められる。端面には1～2条の凹線が施される。

〈その他〉(44・45) 44は器種不明体部である。外面に樹脂波状文が見られる。文様から弥生時代中期にあたる時期の資料と考えられるが、小片でやや磨耗しているため、混入であると判断した。45は口縁部が直線的にのび、正円に復元できないこと、端面が鋭利な工具で平滑に削られ断面方形を見せることから、把手付広片口皿の側縁部であると考えられる。詳細は第V章第3節にて述べる。

〈石庖丁〉(S1) サスカイト製の打製石庖丁である。背部・刃部が供に弧を描いて湾曲する。側部の突出度合いはやや弱く、丸く収める。背部・刃部ともに細かな敲打によって仕上げられる。完形で出土し、長さ5.5cm、幅5.0cm、厚さ1.2cmを測る。

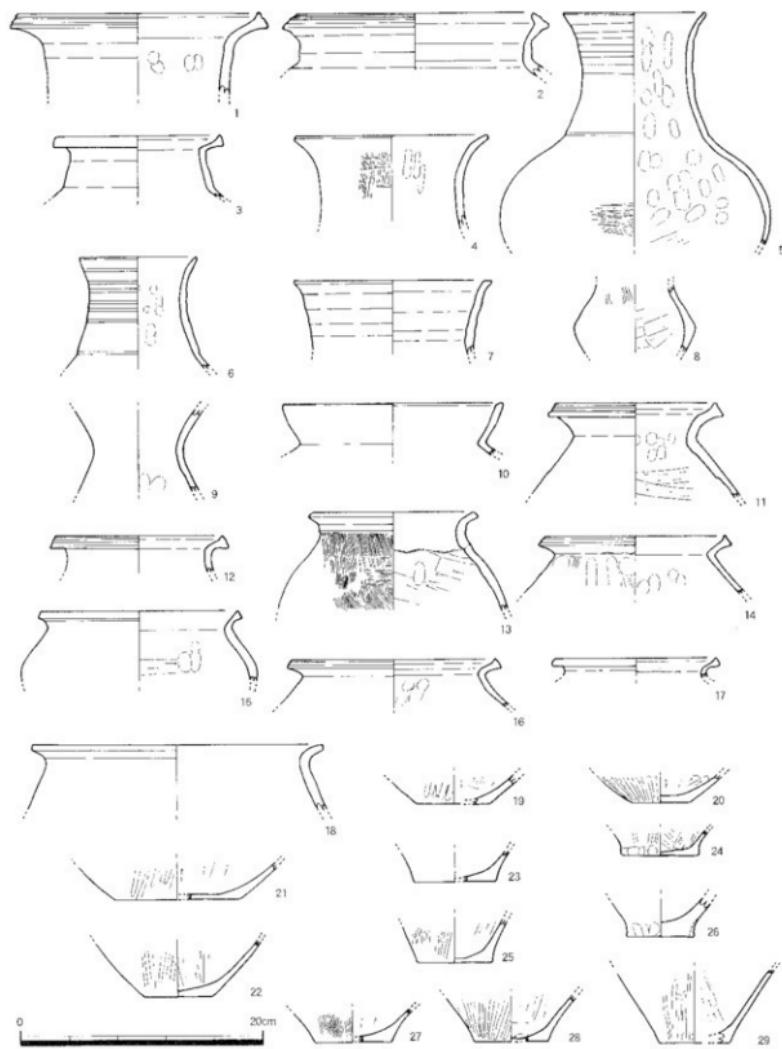


Fig.14 A調査区SE 2第2層上位出土遺物① (縮尺1/4)

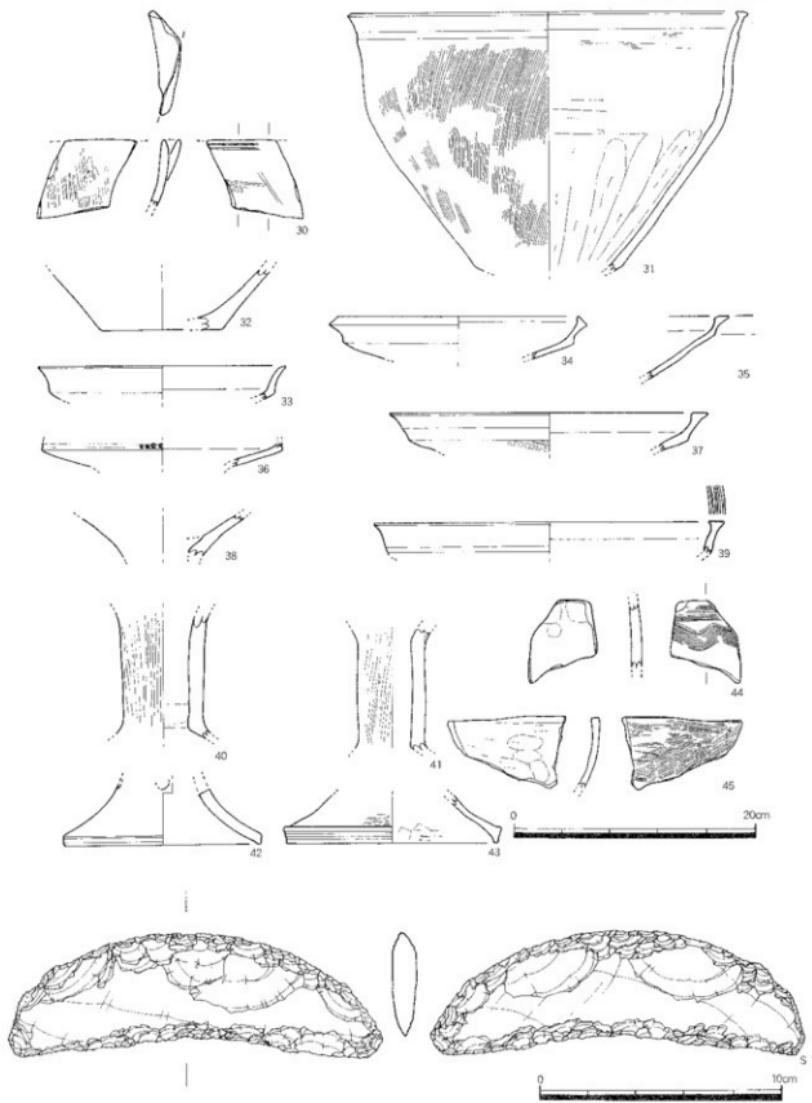


Fig.15 A調査区SE第2層上位出土遺物②(縮尺1/4, S1は1/2)

第2層中位 (Fig.16 ~ 22)

〈壺〉(46 ~ 68) 46 ~ 50・54は広口壺である。47・48は体部中位に櫛描刺突文がめぐり、47は口縁部と頸部に複数の凹線が認められる。49はラッパ状に外に大きく聞く長い口縁部をもつ。底部内面にはヘラケズリ後ヘラミガキが施される。50は直立する長い頸部から口縁部が強く屈曲し、外向する。54は端部が肥厚せず口縁部がラッパ状に強く外反する。51 ~ 53、55 ~ 59は直口壺である。52は底部に脚部の痕跡が認められる脚付の器種である。にぶい橙色を呈する胎土は角閃石を含まず、粒径の大きな白色粒の混入が目立つ。形態と胎土から、搬入品の可能性が考えられる。55・60・63は肩部に明瞭な段を有する。56は明赤褐色を呈する胎土に角閃石を含まず、粒径の大きい白色粒が目立つ。口縁部が直立し、口縁端部を四角く収める。外面には弱い段が2段巡るが、退化した凹線なのか、ナデ調整によるものかは不明である。形態と胎土から、搬入品である可能性が考えられる。57・58は頸部に5 ~ 11本の凹線を巡らす。59・60・63は頸部に櫛描斜線文が斜交して施される。61・65は無頸壺である。61は算盤玉形の体部に外反する短い口縁部をもつ。色調は全体的に赤色を呈するが胎土には角閃石も多く含む。64は短頸壺である。口縁部の折り返しはナデで仕上げられる。内外面ともハケ調整が施されるが、焼成は全体的に粗雑な印象を受ける。体部は球形に近く体部中位で最大径を測る。鈍い黄褐色を呈する胎土には角閃石の混和が認められず、粒径の大きな白色粒がめだつ。いわゆる白色系の胎土とされる資料である。胎土から搬入品であると考えられる。65は小型の無頸壺である。極めて短い口縁部に2孔×2箇所の計4孔が穿たれる。紐通し孔であろうか。体部内面中位までヘラケズリが及ぶ。66は細頸壺である。口縁部は欠損し不明であるが、肩部に極めて明瞭な段を持つ。体部は倒卵形を呈する。67・68は大型の壺体部である。体部中位に円形浮文が巡る。47・49・50・61・64・66には体部中位から下半に穿孔が認められる。破面の状態から焼成後に意図的に穿孔されたものと考えられる。

〈甕〉(69 ~ 96) 69は口縁部下に貼付突帯がめぐる。弥生時代前期に属する資料である。小片で磨耗が激しいため、混入であると判断した。70は短く外反する口縁部である。端面は肥厚せず先細りの形状を呈する。形状から高杯の口縁部である可能性も考えられる。71 ~ 78は口頸部が頸部状に直立し、強く屈曲して口縁部に続く。また71 ~ 80は口縁部端面に1 ~ 2条の凹線を巡らせる。凹線は基本的に弱く、極めて不明瞭である。81・82は体部外面上半にタタキ調整が認められる。81はタタキ後にハケで、82はナデでそれぞれタタキ痕を平滑にする意図の調整が認められる。また82は口頸部が強く屈曲し、頸部に明確な粘土接合痕が観察できる。83 ~ 92は口頸部の屈曲が明瞭でなく、また口縁部の肥厚具合も弱い。体部内面上半までヘラケズリが及ぶものが多い。83は小型の甕である。卵形の体部に、直線的に伸び丸く収める口縁部をもつ。87・90は口縁部が極めて短く、屈曲も弱い。90は口頸部内面の屈曲部にハケが施される。91は内面上半のヨコヘラケズリが口頸部まで及ぶ。角閃石も認められるが、粒径の大きな砂粒を多く含む。93 ~ 96は強く外反し、上方に突出する口縁部をもつ。93は内湾気味に延びる口頸部から、弱く上方に口縁部が突出する。94・95は水平に聞く口頸部から口縁部が垂直に立ち上がる。94はにぶい橙色を呈する胎土に角閃石が含まれず、搬入品の可能性が考えられる。96は口頸部が短く水平に開

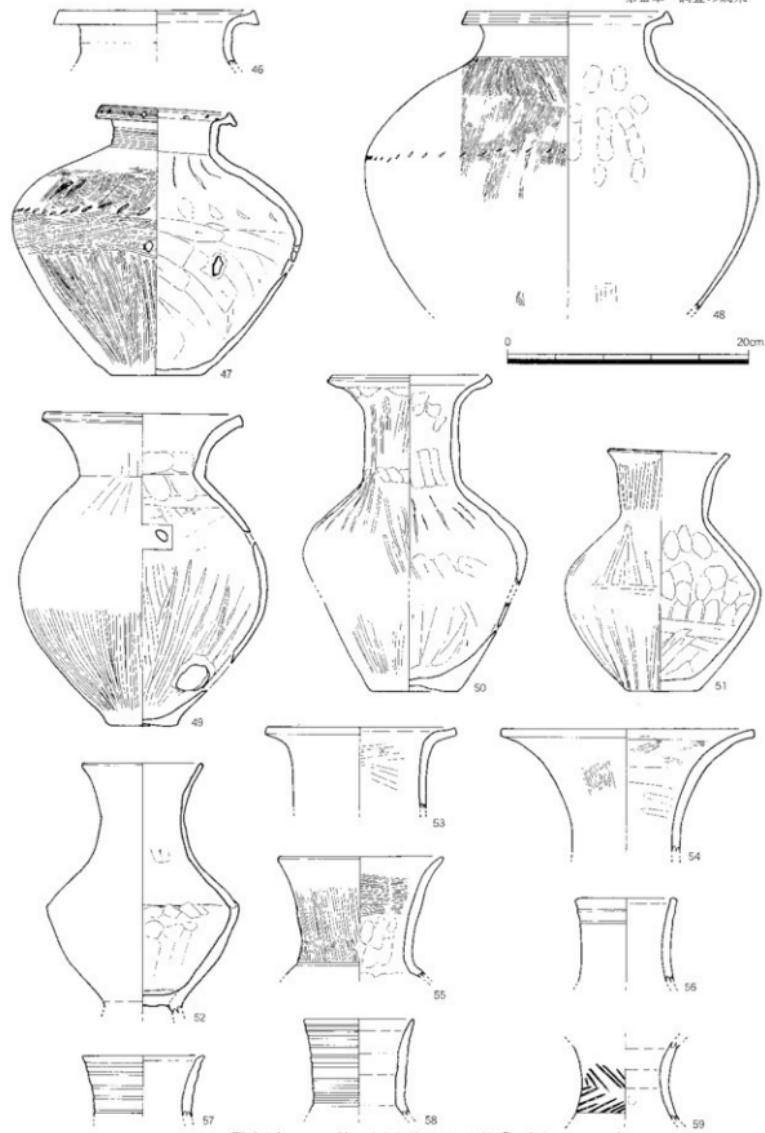


Fig.16 A調査区SE2第2層中位出土遺物①(縮尺1/4)

き、肥厚した口縁部が垂直にたちあがる。立ち上がり部は長く、明瞭な凹線が2条施される。

また、壺と同様に90・91・93には体部中位から下半に意図的な焼成後穿孔が認められる。

〈底部〉(97～112) 97は屈曲から壺の底部である可能性が考えられる。100～102は鉢の底部である可能性が考えられる。内面はヘラケズリが認められる。98・99・103～112は壺・甕の底部であると考えられる。内面にはケズリ調整が認められる。98は底部の粘土が剥離した下からハケ調整がのぞき、ハケ調整後に粘土が補充されたことがうかがえる。111は底面にもヘラミガキが施される。112は底面に棒状の植物の压痕が見られる。

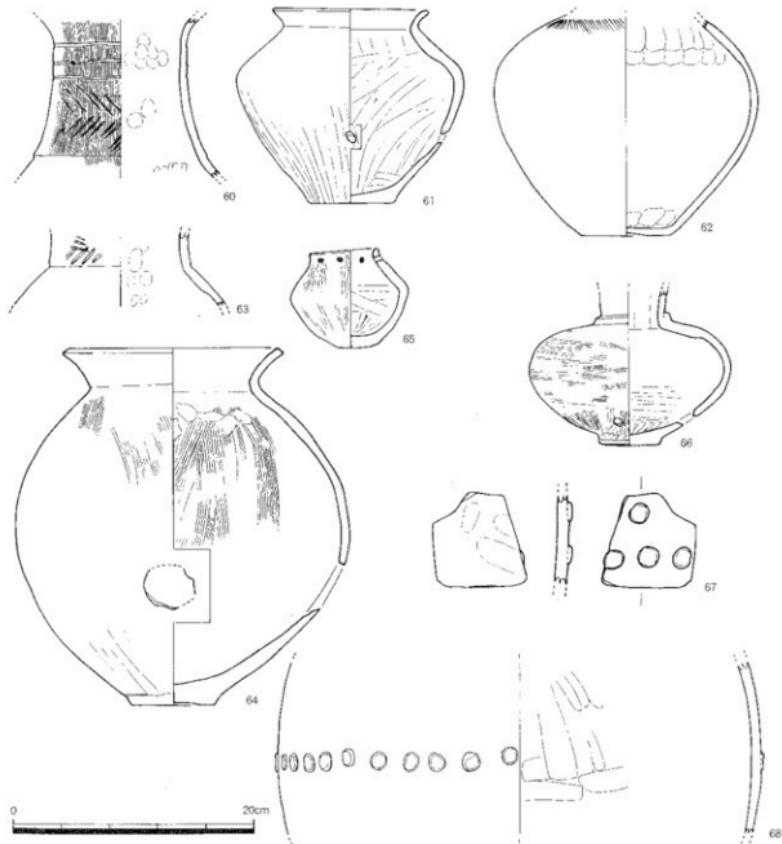


Fig.17 A調査区 S E 2 第2層中位出土遺物② (縮尺 1/4)

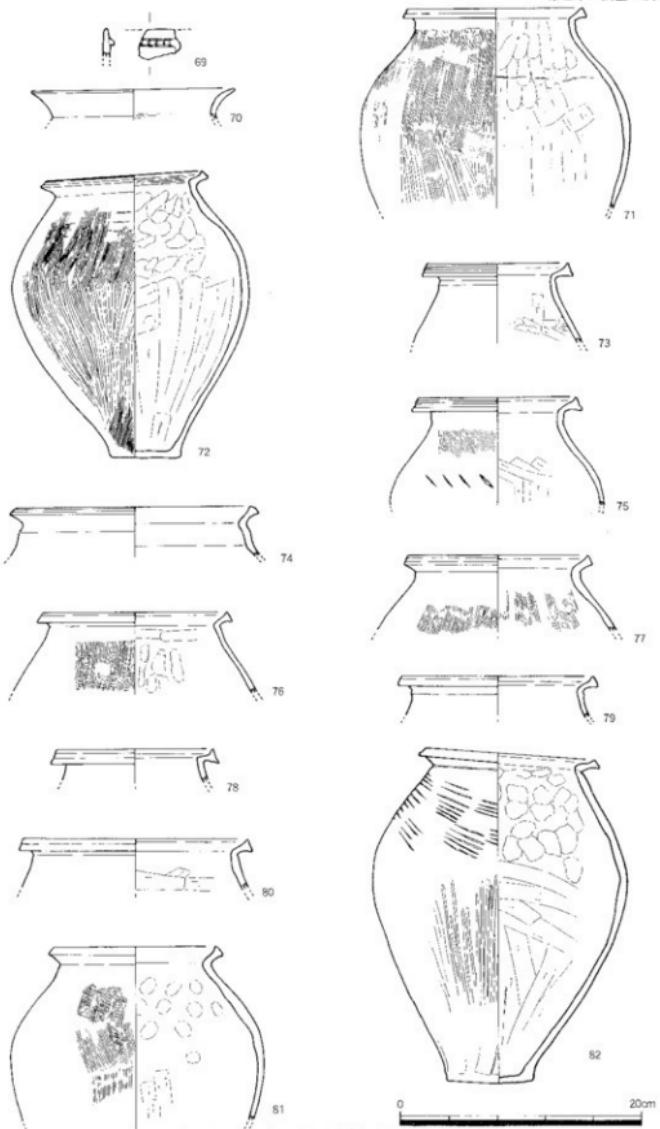


Fig.18 A調査区SE2第2層中位出土遺物③(縮尺1/4)

第3節 A調査区

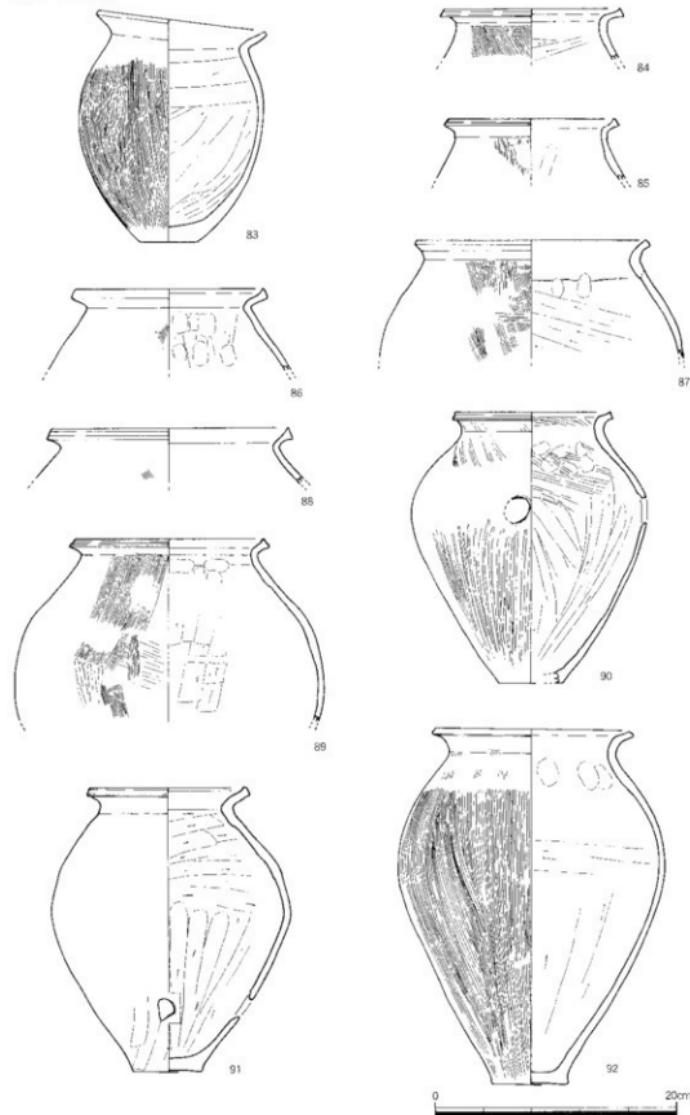


Fig.19 A調査区SE2第2層中位出土遺物④(縮尺1/4)

〈鉢〉(113～117) 113・114は大型の鉢である。口縁部はゆるやかに外反しながら次第に直立する。113は口縁部端面を肥厚させず、丸く収める。114は口縁部がやや肥厚し、明確な端面を有する。口縁部から体部にかけて強い凹線がめぐる。115・116は小型の鉢である。緩やかに外反する口縁部を持つ。116は口縁部が水平に肥厚し、端面に2条の凹線をめぐらせる。117は特異な器種である。口径 12.2cm と極めて小型で、口縁部が直線的に外反する。ユビオサエによりやや突出する部位が見られる。外面には粗いハケの後に細かいハケが施され、内面には上部までヘラケズリが及ぶ。

〈把手付広片口皿〉(118～120) 口縁部が直線的で正円に復元できず、口縁部端面が四角く収められる資料を少數確認し、形状から把手付広片口皿に分類した。把手部は出土していないが、当遺跡ではかつて香川県教育委員会の調査において本器種が確認されており、隣接する上天神遺跡からも多量に出土していることから、こうした分類名称を与えた。詳細は第V章第3節で述べる。118は片口部にあたると考えられる。端面は極めて平滑で砂粒の移動痕が見られることから、鋭利な工具で削り出され、成形されたことがわかる。119は側縁部にあたると考えられる。外面にハケ、内面にはヘラケズリ調整が認められる。内面に水銀朱の付着が認められる。120は内面に精緻なヘラミガキが施されるが、外面は磨耗している。側縁部端面は他と同様ヘラケズリ状の調整により平滑に仕上げられている。

〈高坏〉(121～140) 121はほぼ完形で出土した。口縁部は水平に肥厚し、端面には2条の凹線が施される。内面には分割ヘラミガキが施される。脚部中位に2孔1対と1孔の計3孔。脚部下間に2孔4対の円孔が穿たれる。内外面にベンガラの付着が認められた。122は水平に肥厚した口縁部端面に2条の凹線がめぐる。123は坏部から口縁部にかけての屈曲が弱く、端部の肥厚も明瞭でない。125は坏部底面に円弧状の線刻が認められる。脚部の接合状況からみて、坏部と脚部の接合時に目印として刻まれたものであろう。内外面ともに水平方向のヘラミガキが施される。126～140は脚部である。126・127は器厚が極めて厚く、直立する脚である。外面はタテヘラミガキ、内面はナデしないユビオサエ調整で仕上げられている。128は器厚が薄く、直立する脚である。内面ナデで仕上げられるが、中位に粘土接合痕が残る。にぶい橙色を呈する胎土には角閃石が含まれない。胎土と形状から搬入品である可能性が高い。129はスカート状に裾が広がる形状を呈する。坏底部との接合部直下にヨコヘラミガキを施す。130は脚部中位に円孔が認められる。131は小型で中空の脚部である。坏部との接合部直下では器厚が非常に厚く、中位から下間にかけて急速に厚みを減する。坏底部に脚との接合をよくするために付けられた突起部である可能性が考えられる。本米は131を覆うように脚部がつき、粘土が補充されて接合されたものと考えられる。132は脚部上位と下位にそれぞれ1孔3対の円孔を配する。脚端部は肥厚し上方へ突出する。133は上位に少なくとも1孔、下位に2孔2対の円孔が認められる。脚端部は肥厚し上方に弱く、下方に強く突出する。134は脚端部に強いナデ調整がおよび、凹線は認められない。135～140には脚端部の肥厚がほとんど認められない。136は脚部に5孔の穿孔が認められる。坏部との接合部には粘土の充填が見られる。137～140は脚部が強く外に広がる形状である。137・138は脚部が直線的に伸びるが、139・140は「ハ」の字形にやや屈曲して広がる。端面に巡る凹線はいずれも極めて弱く、痕跡的である。

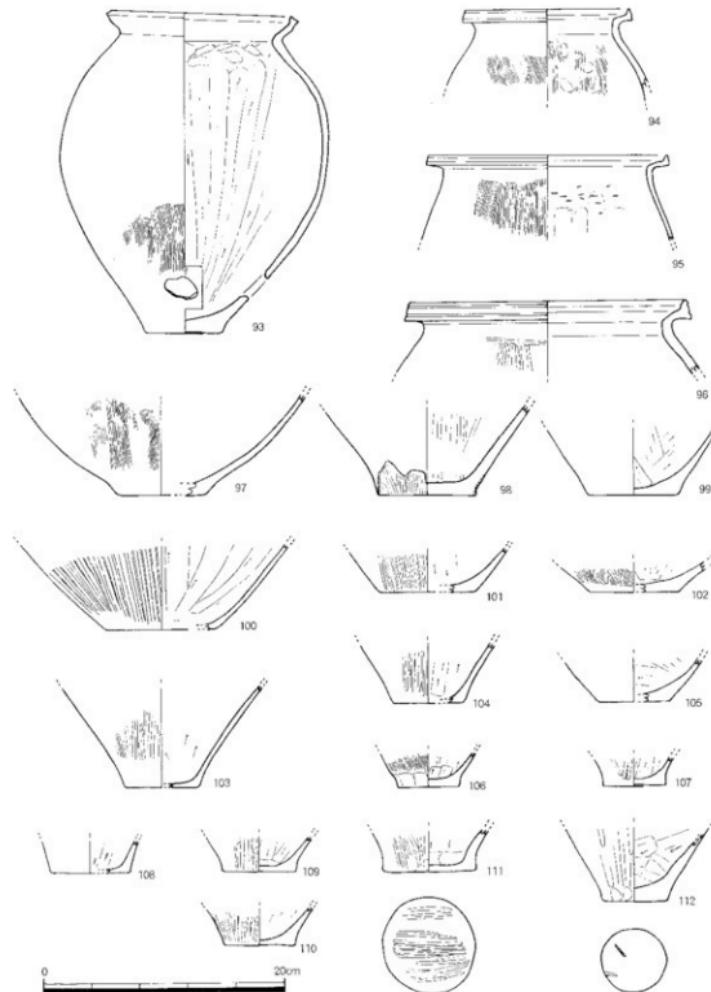


Fig.20 A調査区 SE 2 第2層中位出土遺物⑤（縮尺1/4）

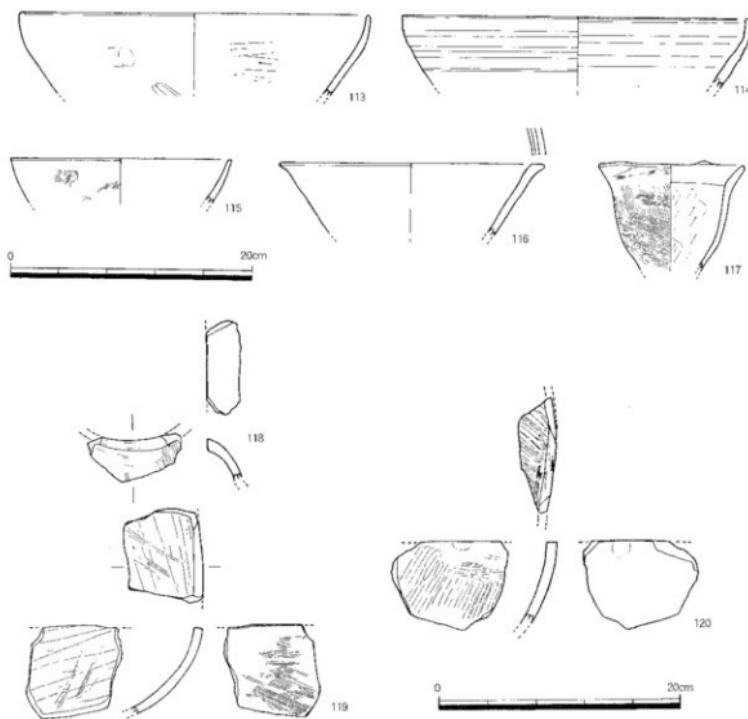


Fig.21 A調査区S E 2 第2層中位出土遺物⑥ (縮尺1/4)

第2層下位 (Fig.23)

〈壺〉(141) 口縁部が長くゆるやかに外反し、肩部には明瞭な段が認められる。頸部には斜線文がめぐる。体部内面下半までヘラケズリが及び、上半は指頭圧痕が見られる。縦半分に割れた状態で142の器台の下より出土した。

〈器台〉(142) 下半を欠くが、上半はほぼ完形の形で出土した。口径は32.5cm、残存高で22.8cmを測る。ゆるやかに外反する体部から、口縁部が強く水平方向に屈曲する。屈曲部では粘土接合痕も観察される。口縁端部は四角く收め、端面には鋸歯文と竹箒文が交互にめぐる。体部は6~11本の凹線からなる凹線帯により上下2段の文様帯に区画され、さらに上段の文様帯は4対の長方形透孔により4区画に分割される。以下ではFig.23の展開図を基準に、上段左から順に第1区画~第4区画と仮に呼称する。また、最も下の凹線帯には長方形透孔と円形透孔の痕跡が認められる。残存状況から配置を推定すると、下段の方形透孔は上段の方形透孔の延長線上に配され、円形透孔

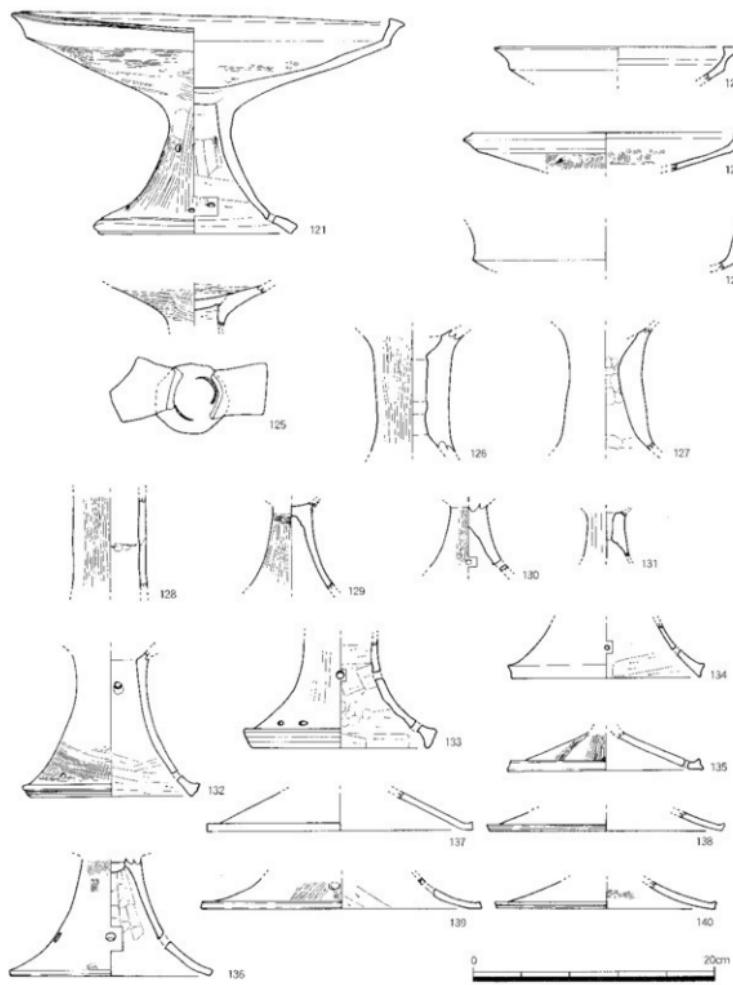


Fig.22 A調査区 S E 2 第2層中位出土遺物⑦（縮尺1/4）

は方形透孔の間に配置されるようである。上段の文様帶には鋸歯文が全周する。各区画にはそれぞれ15～25単位の鋸歯文が線刻される。この際長方形透孔と鋸歯文の外縁線との位置関係から、透孔の位置を基準に鋸歯文配置の設定がなされたと考えられる。ただ、各区画で鋸歯文の数が一致しないことからも稚拙な施文であるとの印象を受ける。鋸歯文の各単位内には斜線文・斜格子文・刺突文・無文などさまざまな文様が規則性なく充填される。下段の文様帶にも鋸歯文が全周する。下段は透孔によって分割されていないため、鋸歬文の配置に際しては下部の透孔と上段の透孔をもとに、上段と対応する位置に配置されたものと考えられる。鋸歬文の各単位内にはこちらも斜線文・斜格子文・不定形の線刻・刺突文が不規則に充填される。色調はぶい橙色を呈し、胎土中に角閃石をほとんど含まない。肉眼観察によると胎土中に結晶片岩が混和された可能性が高い。器形は本地域にも類例が認められるが、文様と胎土から搬入品である可能性が考えられる。

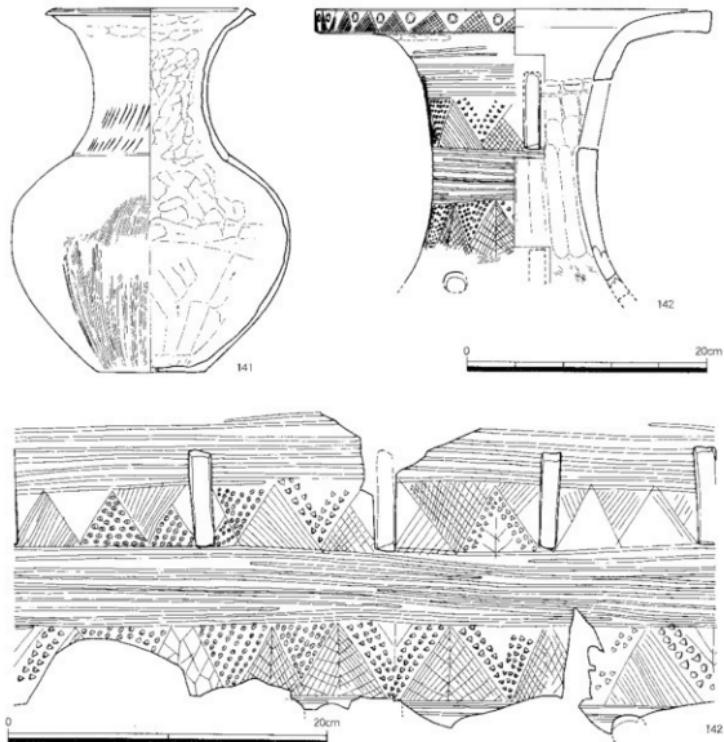


Fig.23 A調査区SE2第2層下位出土遺物（上段縮尺1/4, 下段1/3）

検出面間接合 (Fig.24)

ここでは上記の各検出面より出土した遺物のなかから、検出面間で接合関係の認められた資料について報告する。遺物出土状況で述べた通り、各検出面は出土層位の違いによる区分ではなく、あくまでも同一層中の、検出高による任意の区分である。

141は第2層下位出土遺物で先述した壺である。縦に半裁されたような形状の半身が第2層下位から出土し、それに接合する破片が第2層上位と中位からそれぞれ確認できた。

143～155は第2層上位と中位の間で接合関係の認められた資料である。143・144は広口壺の口縁部である。143は頸部からやや屈曲を変えて口縁部が伸びる。144は緩やかに外反する頸部から口縁部に続く。148は壺の体部である。体部中位に最大径をもち、胴張りの形状を呈す。外面の体部中位には櫛描列点文が巡る。145～147・149～153は壺である。145は口縁部が肩部から弱く屈曲し、短く折り曲げて仕上げる。胎土はにぶい黄橙色を呈し、角閃石を含まない。いわゆる白色系の胎土であり、搬入品の可能性が考えられる。146は大型の壺である。口径は20.4cmを測る。口縁部は「く」の字状に強く屈曲し、端部はそのまま丸く收める。内外面共にハケ調整が多用され、特に内面では口縁端部付近までハケ調整が及ぶ。147・149は口縁部が弱く屈曲し、短く外向する。端面は弱く肥厚し、痕跡的な弱い凹線を1条施す。150は器厚が薄く、直立する頸部上の部位を持つ。口縁部は強く屈曲し、直線的に外向する。端部は上下に弱く肥厚し、端面に2条の凹線が巡る。151・152は比較的長く厚い口縁部が若干内湾しつつ直線的に伸びる。内面は口頸部の屈曲までヘラケズリが及ぶ。胎土中には角閃石が含まれるが、口縁部形状から阿波地域の影響が考えられる。153はやや直立する頸部上の部位をもち、口縁部が緩やかに外反する。端部は上方に向いて弱く肥厚し、痕跡的な凹線が1条認められる。体部外面には櫛描列点文が巡り、これを境に下にはヘラミガキ、上にはハケ調整が見られる。内面は体部下半にヘラケズリがおよぶ。154・155は大型の鉢である。緩やかに外反する体部から直立する口縁部に続く。端部は肥厚せず、丸くおさめる。体部内面には赤色顔料の付着が確認され、分析の結果水銀朱であることが判明した。

層位不明 (Fig.25)

〈壺〉(156) 頸部に斜線文、体部上半に竹管文がめぐる。口縁部外面および内面にも数条の凹線がめぐる。にぶい橙色を呈する胎土には角閃石が認められず、粒径の大きな白色粒の混入が目立つ。胎土から搬入品の可能性が考えられる。

〈壺〉(157～162) 157・158は口頸部がやや弱く屈曲し、口縁部に続く。口縁端部は肥厚し、弱く上方に突出する。159は口縁端部が下方に弱く突出する。にぶい褐色を呈する胎土には角閃石が認められない。胎土から搬入品の可能性がある。160は口頸部の屈曲が強く、端部が肥厚し上方に強く突出する。端面には2条の凹線がめぐる。灰黄褐色の胎土には角閃石が認められず、搬入品の可能性が考えられる。

〈鉢〉(164) 小型の鉢である。口径19.8cmを測る。口縁部はやや外反しながら丸く取まる。外面にハケ、内面にはヘラミガキが認められる。

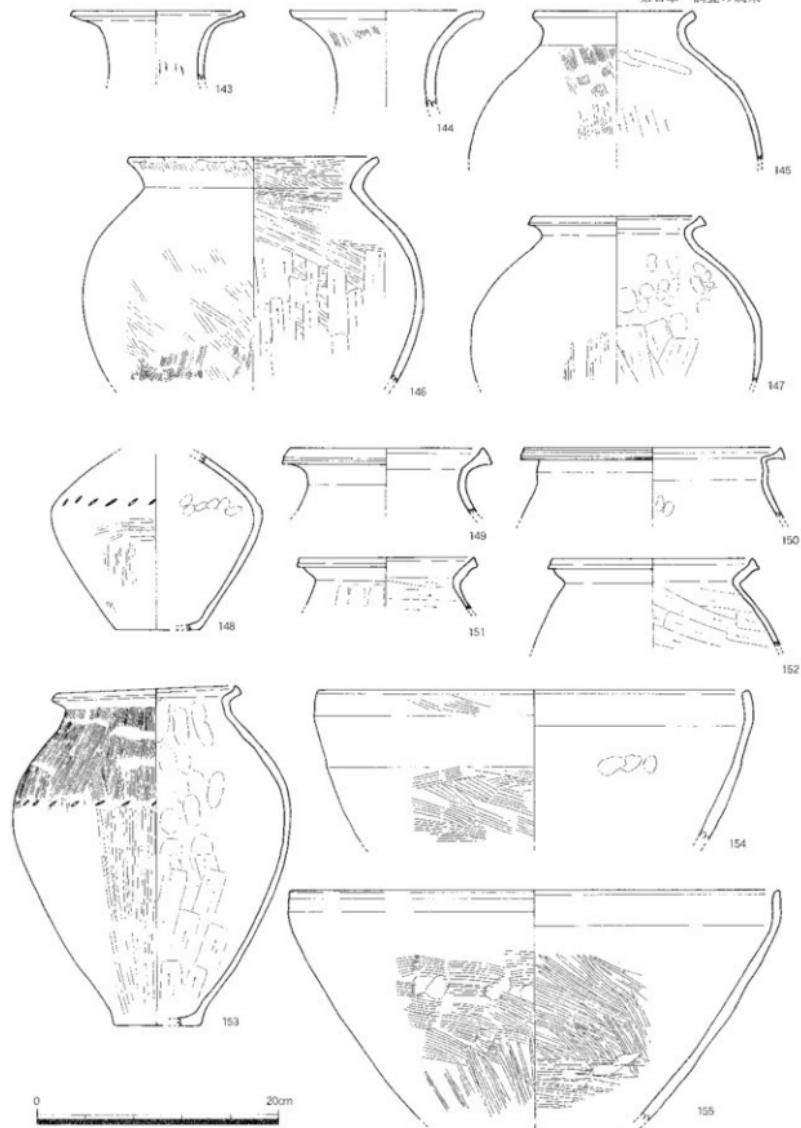


Fig.24 A調査区SE2検出面接合遺物(縮尺1/4)

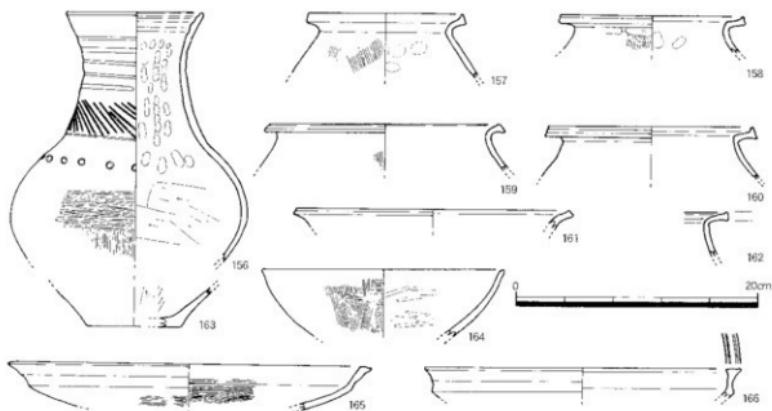


Fig.25 A調査区S E 2出土上層位不明遺物（縮尺1/4）

〈高坏〉(165・166) 口縁部が肥厚し水平に伸びる高坏の口縁部である。165は弱く外に肥厚する口縁部が弱く外傾する。166は水平に肥厚する端面に2条の凹線がめぐる。

出土した土器から、これらの資料は一定の時期幅を含みながらも、比較的一括性の高い土器群であると評価できる。第2層上位と中位、また上位と下位から出土した資料同士が接合する例が少なからず認められる点からも本資料の一括性の高さが傍証されるであろう。

少数の時期幅をもつ資料を混入とみてよければ、遺構の時期は弥生時代後期前葉であると考えられる。

(4) 自然河川 (Fig. 8)

SR 1 A 1より南へ34~66mの地点で検出した河川跡である。湧水が非常に多量であり、調査中に壁が崩落し埋没してしまったために堆積状況については詳細な記録を残すことができなかった。東に向かい「ハ」の字状に広がり、調査区外へ伸びる。隣接して行われた香川県教育委員会による工事立会でも対応する位置で河川跡が検出されており(Fig. 4)、連続するものと考えられる。遺物は1点も出土せず、所属時期は不明であるが、先述の県教委の検出した河川からは弥生時代後期初頭以前の遺物が検出されており、当河川の時期もそれに対応する可能性が高い。

(5) ピット (Fig. 8)

SP 11 A 1より南へ50mの地点で検出した平面円形のピットである。第2遺構面を掘り込んで形成され、直径は0.2mを測る。埋土は黒褐色シルトで、土器片を1点検出した。土器は土師質の小片で、磨耗が著しく詳細は不明である。

(6) 噴礫 (Fig.26)

A 1より南へ66mの地点で、第2遺構面上に多数の円礫を含む層（7層）が面的に広がる地点を確認した。円礫は径5～10cm程度と比較的の粒径が大きく、角のとれた川原石である。東壁断面図 (Fig.26・PL. 9-3)を見ると、7層が3～6層を切って、垂直方向に堆積する様相が確認できる。また、7層中の礫の長辺が、水平方向ではなく垂直方向に向いていることが確認できた。自然に礫がこのように堆積することは考え難く、地震の液状化現象に伴う噴礫である可能性が想定された。また、固化できていないが付近で断面調査を行ったところ、第2遺構面下で一定程度の粒径の礫を主体とする礫層が検出され、この層が円礫の供給源であると考えられた。以上の状況から、香川大学工学部准教授山中稔氏に現地でのサンプリング及び分析を依頼した。分析の詳細は第Ⅳ章第3節に詳しいが、結果をみると、弥生時代以降の内陸直下型地震による液状化で生じた噴脈・噴礫の痕跡であると推察された。高松平野では他にも松林遺跡、四原遺跡、一角遺跡、西ハゼ土居遺跡などで同様の痕跡が検出されている。

(7) 小結

住居跡などは検出できなかったが、土坑や溝・井戸などを検出した。遺物の出土した遺構が少なく、時期別の変遷は不明瞭だが、SE 2から弥生時代後期前葉の遺物が検出された。西に隣接して香川県教育委員会が行った工事立会では弥生時代後期初頭に属する竪穴住居の可能性がある遺構が検出されており (Fig. 4)。本調査区周辺が弥生時代後期前葉に集落域として利用されたことが推定できる。また、調査区の北端付近では遺構の密度が低く、集落域の北端を反映する可能性がある。検出した溝は南西→北東方向にのびるものが多い。後述するがB調査区、C調査区では同方向にのびる自然河川跡を検出しており、付近の自然河川に沿った遺構の配置であると言える。また、自然化学分析により SE 2周辺に水湿地の存在が推定されており、集落の中でも低湿地と、その周辺にあたる地区であると考えられる。

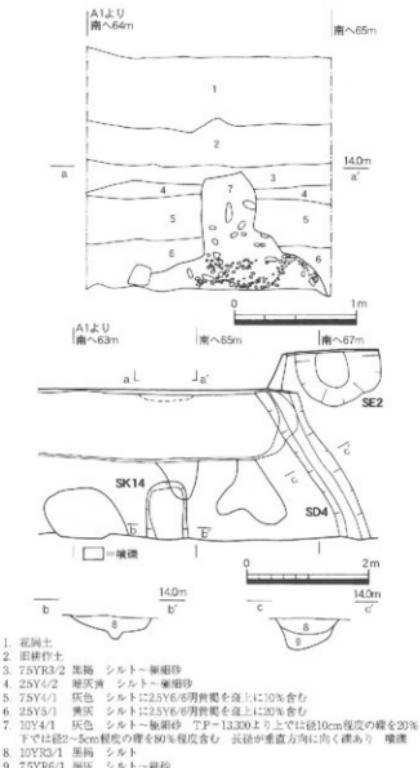


Fig.26 A調査区噴礫およびSK14・SD4平・断面図
(縮尺: 平面1/80, 断面1/40)

第4節 B調査区 (Fig.27)

B調査区は幅4.5m、長さ58mで南北方向に設定した調査区である。調査区北端の現地表面は標高15.0m、南端では15.1mを測る。地表面下0.3~0.5mは花崗土に覆われ、その下に旧耕作土および床土を挟んで黒色系シルトからなる第1遺構面、さらに黄灰色系シルトからなる第2遺構面を検出した。調査区の北東部から南西端にわたって、調査区を斜めに継続する範囲では花崗土が特に厚く認められた。断ち割り調査の結果、花崗土下で遺構面が削平されていることが明らかとなった。このため、花崗土を伴う著しい搅乱が及ぶ範囲を避け、遺構面の残存状況のよい範囲で遺構検出を行った。

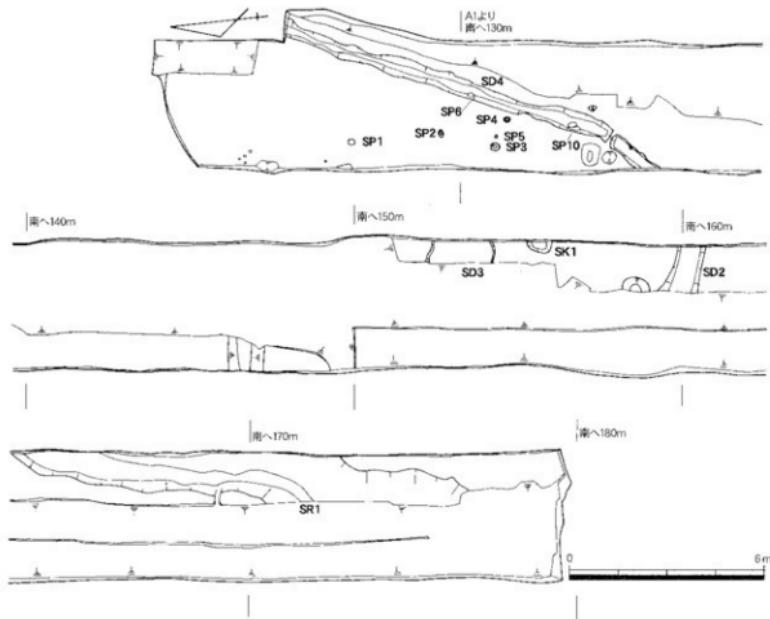


Fig.27 B調査区平面図 (縮尺1/150)

(1) 溝

SD2 (Fig.27) △1より南へ160mの地点で検出した溝である。西半部は擾乱を受けており、規模などは不明である。残存した部分では東西方向に直線的に伸び、最大幅で1.2m、深さ0.1mを測る。埋土は黒色の砂混シルトである。第2遺構面を掘り込んで形成されているが、遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明である。

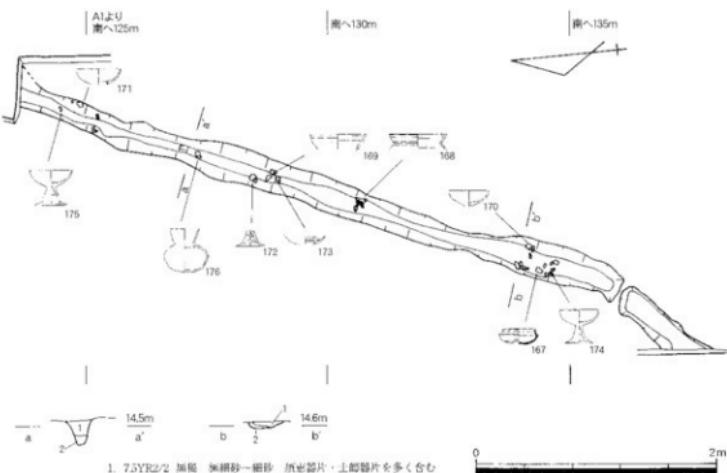


Fig.28 B調査区SD 4平・断面図および遺物出土位置図 (縮尺1/400)

SD 4 (Fig.28) A 1より南へ125～135mの地点で検出した溝である。西端付近でやや屈曲をえるが、南西から北東方向に直線的にのび、両端が調査区外へ続く。幅は最大で0.6m、深さは0.4mを測る。第2遺構面を基盤とし、黒褐色のシルト～極細粒砂が堆積する。

167は須恵器の坏身である。口径10.6cm、器高5.0cmを測る。口縁部がやや内傾しながら立ち上がり、口縁端部には明瞭な段を有する。比較的底部は平坦で、ケズリが底部から体部下半の1/2程度の範囲に及ぶ。これらの特徴から陶邑編年のTK23～TK47型式期に相当すると考えられる。168は土師器壺の口縁部である。肩部からくの字に屈曲し、直線的に外向する。口径は19.6cmを測り、入念なヨコナデ調整が見られる。169は大型の土師器壺の口縁部である。口縁端部に平坦面をもつ。口縁端部から3cmほどは直線的にやや外向きに開き、強く屈曲する。屈曲部以下はゆるやかに内反し、頸部へ続く。170～175は土師器の高坏である。坏部は緩やかに内反する椀形を呈する。口径は170で12.9cm、171で14.4cm、174で13.0cm、175で14.0cmを測り、坏部の深さは170で39cm、171・174・175で40cmを測る。磨耗が激しく、調整は全体に不明瞭である。172～174に見られるように粘土粧の痕跡が明瞭に観察できる個体が目立つ。175の断面を見ると坏部と脚部の接合痕が観察できる。176は土師器の直口壺である。肩部から直線的に外向する口縁部と、横長椭円形を呈する体部を有する。内外面ともにナデで整形されている。口径9.4cm、器高13.4cmを測る。

出土土師器の大半は高坏である。ここでは片桐孝浩の論考を参考に編年の位置づけを行う(片桐2002)。本遺構出土高坏は坏部の形状から、椀形高坏で坏部に稜の無い、片桐分類B 2類にあたる。また、組成がB 2類のみで占められ、口径が12.9～14.0cmとやや小型で、坏部深が3.9

~4.0cmと浅いことから、片桐編年V期ないしVI期に比定できる。これは陶邑編年のTK23型式期に相当するとされるため、共伴する167の型式とも離齟がない。従って、本遺構の所属時期は陶邑編年のTK23型式期に相当すると考えられる。

(参考文献)

片桐孝浩 2002「須恵器出現前後の土師器について」『埴輪遺跡』 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第43回 香川県教育委員会ほか

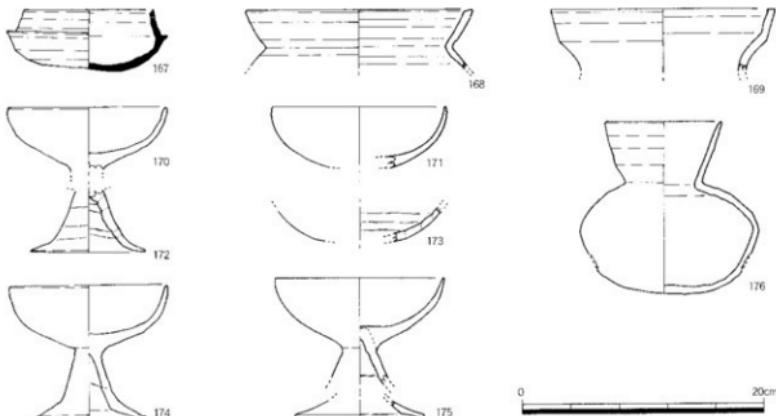


Fig.29 B調査区SD 4出土遺物(縮尺1/4)

(2) 自然河川

S R 1 (Fig.30) A 1より南へ162~177mの地点で検出した自然河川である。東半は調査区外に続き、西半は現代の搅乱によって削平される。本来は南西-北東方向にのびていたものと考えられる。第2造構面を基盤とし、黒褐~褐灰色のシルト層が互層をなし堆積する。出土遺物は認められず、所属時期は不明である。

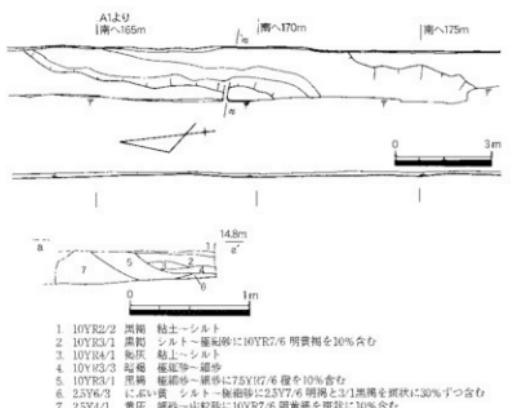


Fig.30 B調査区SR1平・断面図(縮尺:上段1/150, 下段1/40)

(3) ピット

S P 1 (Fig.27) A 1 より南へ 126 m の地点で検出した平面円形のピットである。第 2 遺構面を基盤に掘削され、長径は 0.2 m を測る。埋土は黒褐色シルトで炭化物を少量含む。埋土中より土師質の土器片を 3 点検出したが、いずれも磨耗が著しく、詳細は不明である。

S P 3 (Fig.27) A 1 より南へ 132 m の地点で検出した平面円形のピットである。直径は 0.25 m を測り、第 2 遺構面を基盤とし、底付近で径 10cm 程度の礫を複数検出した。遺物は土師質の土器の小片が 1 点出土しているが、磨耗が著しく詳細は不明である。

(4) 小結

B 調査区でも住居跡や掘立柱建物跡などの居住の痕跡は認められなかったが、北半において古墳時代中期（陶邑編年 T K 23 型式期）の溝 S D 4 を検出した。また南半では S R 1 が見られる。S R 1 の所属時期は不明だが、これらは A 調査区で検出された自然河川跡や溝と同様、南西-北東方向にのびている。古墳時代中期には、自然地形に沿って溝が掘削され、機能していたものと考えられる。

第5節 C調査区 (Fig.31)

C 調査区は幅 4 m、長さ 88 m で南北方向に設定した調査区である。現地表面は調査区北端で標高 15.9 m、南端で 16.9 m を測る。基本層序は厚い花崗土の下に旧耕作土及び部分的に床土が認められ、その下に灰白色系シルトからなる層が堆積する。この層を基盤とする遺構が極少数だが認められたため、遺構面として理解した。ただし遺物は出土しておらず、時期は不明である。この下に黒褐色系シルトからなる第 1 遺構面が認められ、さらに下には黄灰色系シルトからなる第 2 遺構面が見られる点は他の調査区とも共通する。

現地では、B 1 から南へ 24 ~ 34 m の地点で、調査区東側に隣接して出水および水路が確認できる。水路はコンクリートで舗装され現在も水を湛えている。水路の舗装が調査予定区間に及んだため、部分的に調査区を縮小して調査を行った。その結果、水路に隣接する区間は特に花崗土の堆積が厚く、地表面から 2 m 近くも花崗土に覆われていることが判明した。一部断ち割り調査を行ったところ、花崗土下では遺構面が削平されていることが分かったため、水路に隣接する部分を境に調査区を二つに分割することとした。また、花崗土で覆われた搅乱は調査区北半の大部分にも及んでおり、遺構面の削平が確認された。そのため、この範囲ではわずかに残った遺構面を検出し、遺構の確認を行ったが、遺構を確認することはできなかった。以下では調査区南半で検出した遺構について記述を行う。

(1) 土坑

S K 2 (Fig.37) B 1 から南へ 76 m の地点で、S R 1 A の底から検出した平面隅丸正方形の土坑である。一辺 0.9 m を測り、深さは 0.1 m と浅い。第 2 遺構面を基盤層としており、埋土には黒褐色シルトが堆積していた。遺物は出土していないが、切り合い関係から S R 1 A に先行することが明らかかなため、弥生時代後期後半以前の遺構であると考えられる。

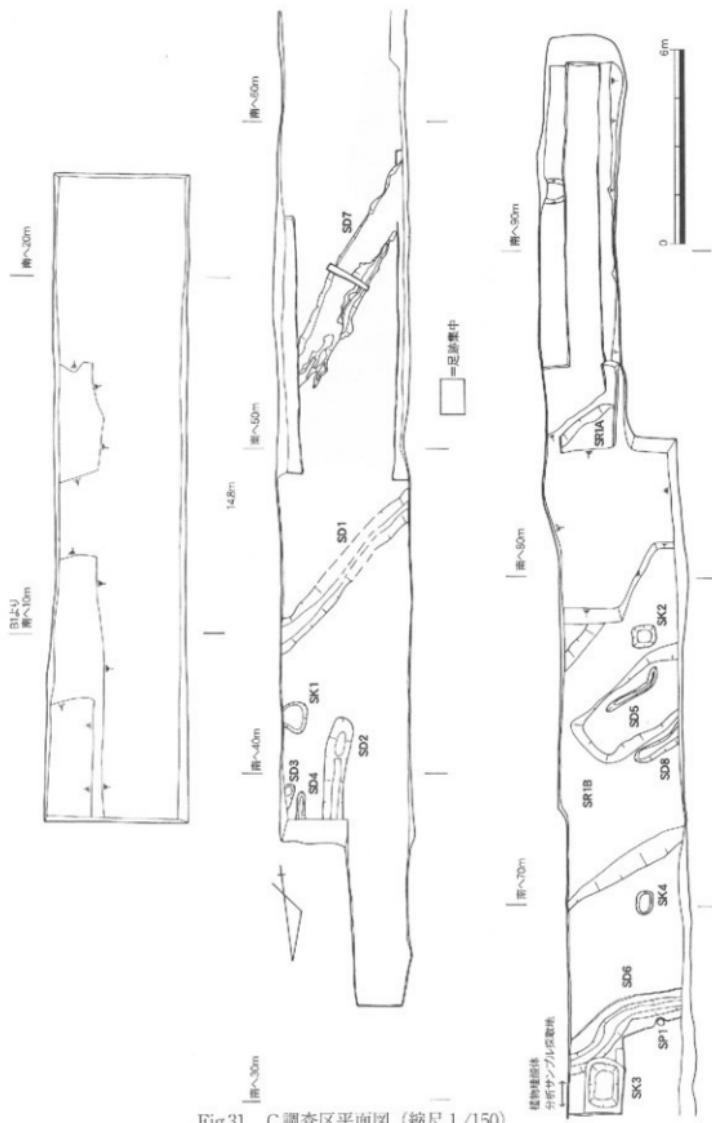


Fig.31 C調査区平面図（縮尺 1 / 150）

SK3 (Fig.32) B1より南へ64mの地点で検出した平面長方形の土坑である。長辺1.3m、深さ0.2mを測る。埋土は灰白色シルトである。遺物は埋土中より須恵器及び唐津焼と考えられる土器の小片が出土した。第1造構面を掘り込んで形成されており、出土遺物から所属時期は近世の可能性が高い。

(2) 溝

SD1 (Fig.31) B1から南へ45～49mの地点で検出した溝である。南西→北東方向へのび、両端は調査区外へ続く。最大幅は0.8m、深さは0.4mを測る。灰黄色細粒砂層から土器片が数点出土したが、磨耗が激しく詳細は不明である。

SD2 (Fig.33) B1より南へ40mの地点で検出した溝である。南北方向にのび、北端は搅乱を受ける。幅は0.75m、深さは0.35mを測る。第1造構面を基盤とし、埋土は下層から順に黄灰色砂混シルト、褐灰色シルトが堆積していた。遺物は埋土中より須恵器片が一点出土しているが、磨耗が激しく、詳細は不明である。遺物から造構の所属時期は古墳時代中期以降と考えられる。

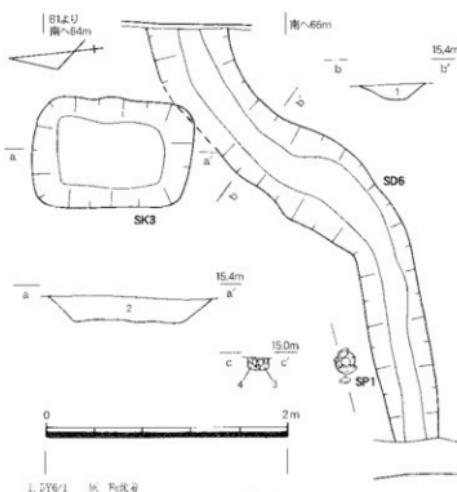


Fig.32 C調査区 SK3・SD6・SP1 平・断面図 (縮尺1/40)

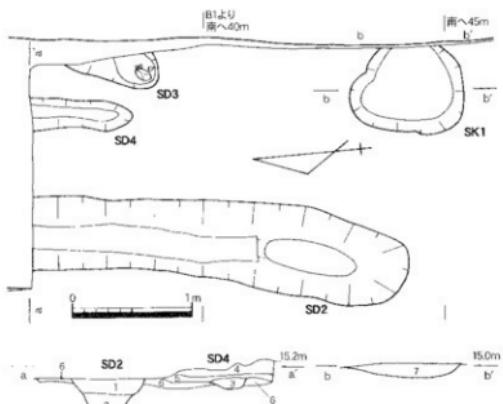
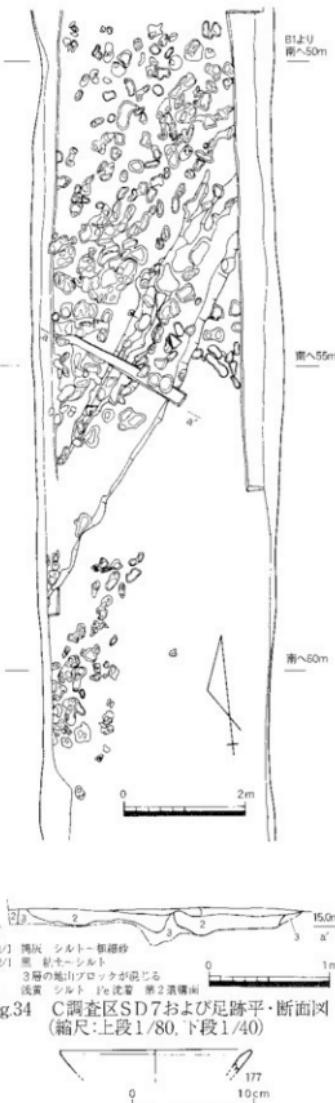


Fig.33 C調査区 SK1・SD2～4 平・断面図 (縮尺1/40)

S D 7 および足跡 (Fig.34) S D 7 は B 1 から南へ 52 ~ 59 m の範囲で検出した溝跡である。南西 - 北東方向に直線的に伸び、両端が調査区外へ続く。検出範囲での最大幅は 1.2 m、深さは 0.15 m を測る。埋土は黒褐色シルトで、第2遺構面を掘り込んで形成されている。遺物は土器片を検出していいる。177は器種不明土器の口縁部である。小片であり、時期は不明である。

また、S D 7 を挟んで南北 13 m ほどの範囲で足跡の密集を検出した。第2遺構面を基盤とし、黒褐色シルトが堆積している。足跡同士が重複し、一つ一つが不明瞭になっていたが、比較的残存状況のよい部分では足の大きさや方向などを観察することができた。足跡は大きいもので長辺約 30 cm、幅約 12 cm、小さいものでは長辺約 20 cm、幅 7 ~ 8 cm を測る。泥中にめり込んだ足の痕跡があるので、本米の足の大きさは遺構の大きさよりも一回り小さかったものと考えられる。この想定が妥当であれば、ここで検出した足跡のうち、大きなものは大人、小さなものは子供の足跡である可能性が考えられる。また、足跡は S D 7 の底から検出したものも含めて、ほぼ全ての長辺が S D 7 に平行する。S D 7 が機能していた時期に、溝に平行して当時の人々が移動したことが推測される。足跡より遺物は出土しなかつたが、同じ基盤層と埋土であるため、S D 7 と同時期であると考えられる。

S D 8 (Fig.37) B 1 より南へ 75 m の地点で後述する S R 1 B の底から検出した溝である。南西 - 北東方向に伸び、南西端は調査区外へ続く。検出した範囲での最大幅は 0.45 m を測る。埋土は黒褐色極細粒砂～細粒砂であり、第2遺構面を掘り込んで形

Fig.34 C調査区SD7および足跡平・断面図
(縮尺:上段1/80、下段1/40)

成される。S R 1 B の埋没とともに S R 1 A の下層に埋もれたものと考えられる。遺物は出土していないが、上記の堆積状況より S R 1 A の堆積に先行する時期が想定できる。

S D 5 (Fig.37) B 1 より南へ 76 m の地点で、後述する S R 1 A の底より検出した溝である。南西 - 北東方向に直線的に伸び、長さ 2.0 m、幅 0.2 m、深さ 0.12 m を測る。第 2 遺構面を基盤に形成され、埋土は灰色の細粒砂である。S R 1 B と同時期に機能し、第 1 遺構面の堆積により埋没したものと考えられる。遺物は出土していないが、遺構の切りあいから時期は弥生時代後期後半以前であると考えられる。

S D 6 (Fig.32) B 1 より南へ 65 m の地点で検出した溝である。

西から東に向かって直線的に伸び、中央で傾斜を変え、北東方向へと続く。両端が調査区外へ続くために全長は不明である。幅は最大で 0.8 m、深さは 0.15 m を測る。埋土は灰黄褐色の細粒砂であり、埋土中よりタタキ目を持つ弥生土器片とサヌカイトの剥片を検出した。

178 号は弥生土器片である。壺の体部であろう。外面には明瞭なタタキの痕跡が認められる。肉眼観察による限り、胎土中には多量の角閃石が含まれており、在地産の土器と推定できる。所属時期は弥生時代後期である可能性が考えられる。

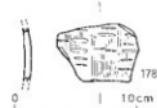


Fig.36 SD 6出土土器 (縮尺1/4)

(3) 自然河川

S R 1 (Fig.37) B 1 より南へ 69 ~ 84 m の地点で自然河川跡を検出した。調査時は堆積状況から単一の自然河川であると考えていたが、最下層の 17・18 層を除去中、遺構の中央西寄りで基盤層が島状に高くなる地点を確認した。この島状の高まりとその周辺から先述の S K 2、S D 5・8などを検出したため、17・18 層の堆積段階では島状の高まり付近が陸地として機能していたことが推測される。従って S R 1 は当初二股に分岐して流れしており、その後の堆積作用により幅広の河川に集約されたものと考えられる。重複し、連續する河川であるが、以下では前者を S R 1 B、後者を S R 1 A として報告する。なお、B 1 より南へ 79 m の地点から、同様に南へ 86 m の地点までの範囲が、後世の井戸の掘削及び井戸の廃絶に伴う現代の搅乱を受けていた。この地点で断ち割り調査を行ったところ、井戸より多量の水が湧き出で、調査の続行が困難となつたため、遺構を平面的に精査することができなかつた。従つて本書で報告する S R 1 A の範囲は調査後に断面図より判断し、復元したものである。

S R 1 A は概ね南西 - 北東方向に伸び、幅は最大で 13 m を測る。S R 1 B の堆積後に重複して機能した自然河川であるが、S R 1 B に比べて幅が広くなり、堆積時に先述の島状の高まり及び S K 2、S D 5・8などを埋没していることから、S R 1 B の埋没と S R 1 A の堆積開始時の間で流量の増加が生じていたものと考えられる。

S R 1 B は S R 1 A の下層で検出した河川跡である。B 1 より南へ 70 m の地点から、同様に南へ 77 m の地点までの範囲で確認した。調査区東側から西側へ向かって二股に分岐し、それぞれが南西 - 北東方向に直線的に伸び、両端は調査区外へ続く。埋土を見ると、第 2 遺構面であ

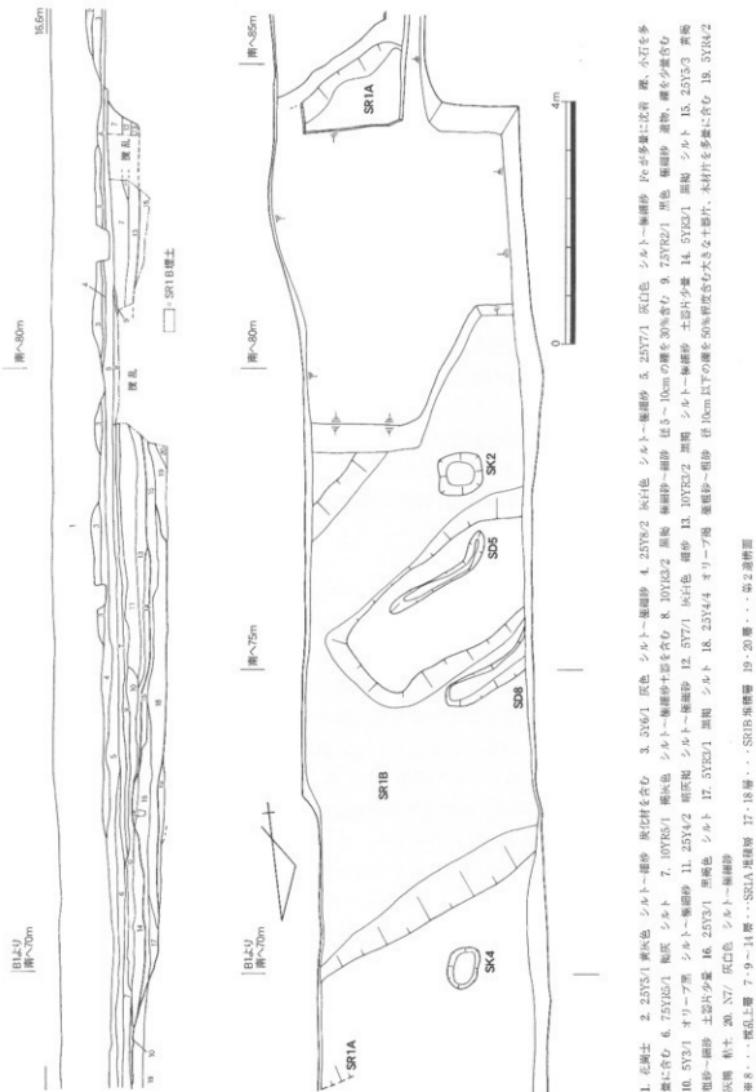


Fig.37 C調査区SR1A・1B平・断面図(縮尺1/80)

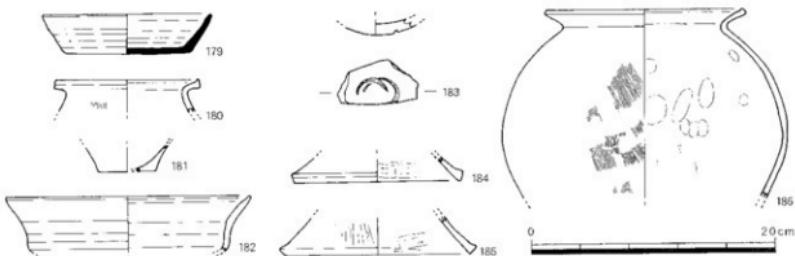


Fig.38 C調査区 S R 1 上層出土遺物 (縮尺1/4)

るにぶい黄褐色シルト層を基盤とし、オリーブ褐色礫混泥細粒砂・細粒砂、黒褐色シルトが互層となり川底に堆積していた。川底からは長辺が10cmを超える比較的大きな土器片や木材片を疊に混じって多数検出した。

遺物であるが、調査当初二つの河川の存在を認識して遺物を取り上げることが出来なかつたため、SR 1 AとSR 1 Bの遺物を明確に区分して報告することができない。ここでは調査時にSR 1 上層、SR 1 下層、層位不明としてとりあげた記録に従い、遺物の報告を行いたい。層位と遺構とは明確な対応関係はないが、概ねSR 1 上層出土遺物は7・9~14層、SR 1 下層出土遺物は17・18層に対応する可能性が高いものと考えられる。

S R 1 上層出土遺物 (Fig.38) 179は須恵器の壺である。口径13.8cm、器高3.2cmを測る。回転ナデで調整され、底部切り離し技法はヘラオコシである。180は弥生土器壺の口縁部である。181は弥生土器壺の底部である。182は高壺の口縁部である。大型で長いL字縁部がゆるやかに外反する。183は高壺の壺底部であると考えられる。底面の2条の線刻は脚部との接合部を示すものであろう。184・185は高壺の脚部である。186は土師器壺である。口頭部がくの字に屈曲し、短い口縁部が直線的に伸びる。体部は球形に近い形状を呈す。

S R 1 下層出土遺物 (Fig.39・40) 187~193は弥生土器広口壺である。188・189・191~193は口縁端部に1~2条の凹線をめぐらせる。190は形状から壺の口縁部の可能性も考えられる。193は端部が肥厚して下方に突出し、広い端面を作り出す。194~196は弥生土器長頸壺である。194は肩部に明瞭な段を有するが、195には認められない。196は頸部外面に弱い凹線が1条めぐる。197~205は弥生土器壺である。197は器厚が厚く、太く直立する頸部に短い口縁部がつく。198~202は薄く直線的な口縁部が強く外向する。口縁端部の肥厚はほとんど認められない。206~215は底部である。210・211・213は器壁が厚く、丸底に近い形状を呈す。216~222は弥生土器高壺である。216~219は口縁端部があまり肥厚せず、端面にナデによる明瞭な段を有する。218・219は内面に水平ヘラミガキが及ぶ。220は壺部である。内外面ともに分割ヘラミガキが施される。221は脚部である。壺部を接合した際の粘土の補充痕が観察できる。222は脚端部である。端部には痕跡的な凹線がみられる。

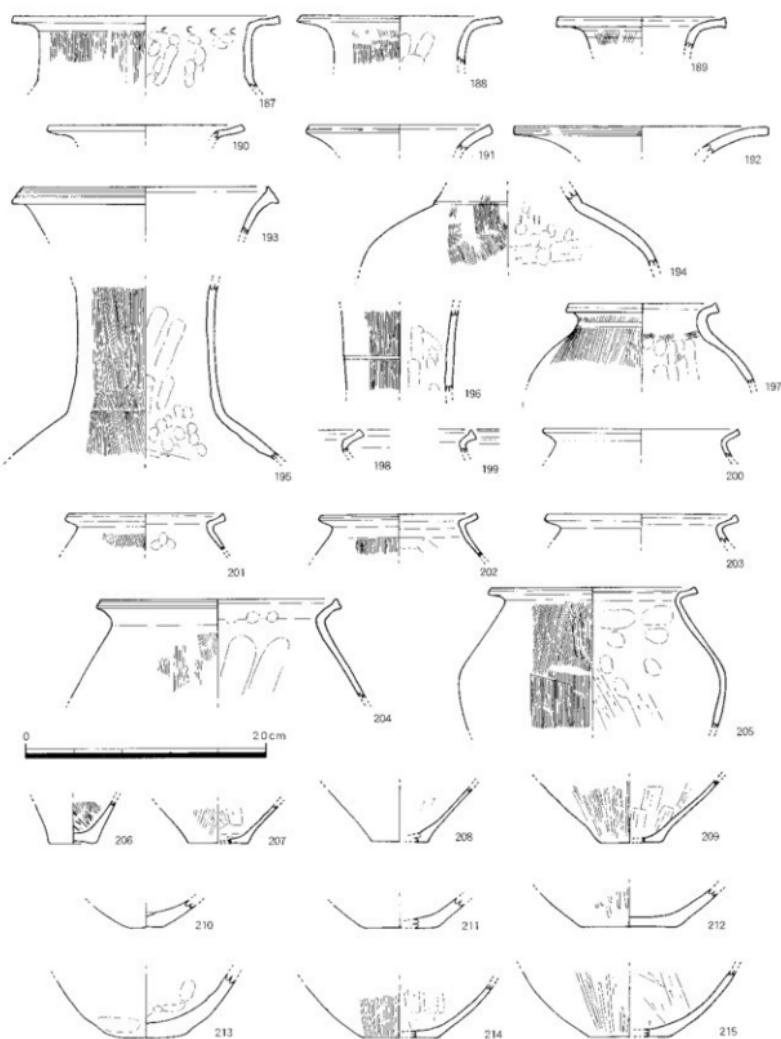


Fig.39 C調査区SR1下層出土遺物①(縮尺1/4)

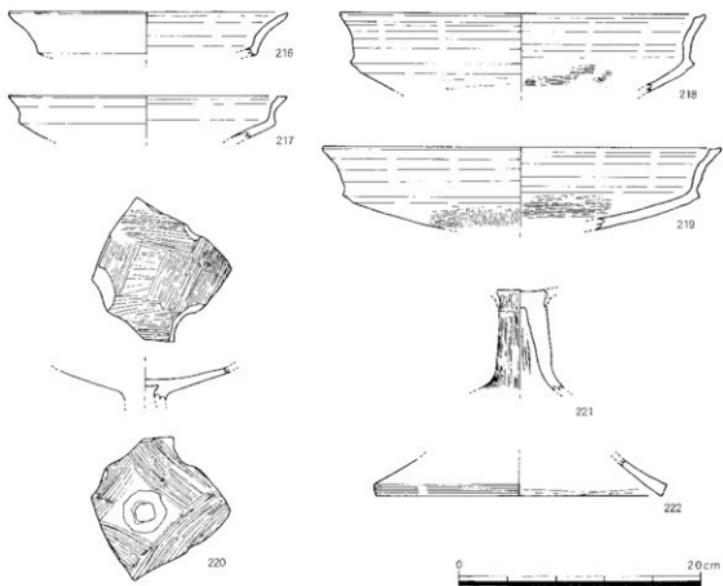


Fig.40 C調査区SR 1下層出土遺物②(縮尺1/4)

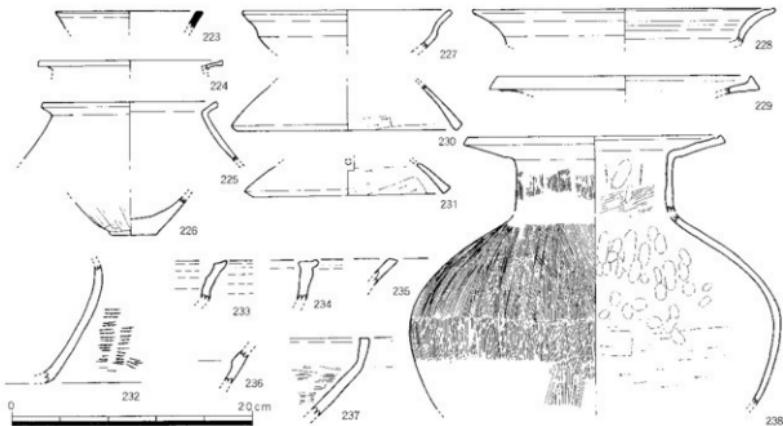


Fig.41 C調査区SR 1出土層位不明遺物(縮尺1/4)

層位不明遺物 (Fig.41) 223は須恵器である。楕の口縁部の可能性が考えられる。224・225は弥生土器壺の口縁部である。225は口頭部がくの字に開く。226は底部である。228は弥生土器高杯である。大型で口縁部が強く外反する。229は弥生土器壺の口縁部と考えられる。230・231は高杯の脚部である。ゆるやかに外反し内面にはヘラケズリが見られる。232は壺・甕の体部である。外面にタタキ痕が認められる。233は弥生土器高杯の口縁部である。234は鉢の口縁部であると考えられる。235・236は器種不明である。土師質に焼成されている。237は弥生土器鉢である。口縁部が直立し、明瞭な端面を作り出されている。238は弥生土器広口壺である。頭部が直立し、口縁部が平行に強く屈曲する。体部は胴の張った形状で、内面下半までヘラケズリが及ぶ。

出土土器の型式から、S R 1 下層の堆積は弥生時代後期後半に始まり、その内で終わるものと考えられる。S R 1 上層は223から上限が古代に下る可能性が考えられるが、1点のみの出土であるため、混入の可能性が高い。中心となる時期は弥生時代後期後半である。S R 1 Aおよび1Bが極めて短期間に埋没したことが伺われる。

(4) ピット

S P 1 (Fig.32) B 1より南へ66mの地点で検出した平面円形のピットである。直径は0.2m、深さは0.2mを測る。埋土は灰白色シルトからなり、径10cm程度の礫を多量に含む。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

(5) 小結

本調査区でも住居跡や水田跡など、居住の痕跡を確認することはできなかったが、溝や土坑に加え幅の広い自然河川跡を検出した。遺物の出土した遺構が限られるため、詳細な時期比定は困難であるが、自然河川跡及び溝は他の調査区と同様、おおむね南北-北東方向にのびており、自然河川に沿った地形利用が伺える。特にS D 7では溝に沿って多数の足跡を検出した。これは直接的に当時の人々の生体的行動を示すものであり、自然地形に合わせた土地利用と人々の活動を伺うことができる。また、S R 1 出土土器より、弥生時代後期後半には本調査区周辺に土器の供給源となる集落域が営まれていたことが推測できる。それ以降の遺構・遺物がほとんど検出されていないため、S R 1 の埋没と共に本調査区周辺は居住域として利用されなくなった可能性が考えられる。

第IV章 自然科学分析

第1節 高松市太田下・須川遺跡出土土器に付着した赤色顔料の蛍光X線分析

徳島県立博物館 魚島純一

香川県高松市所在の太田下・須川遺跡から出土した土器に付着した赤色顔料の同定を目的とした蛍光X線分析を行ったのでその結果を報告する。

1. 試料

太田下・須川遺跡出土 土器片 17点

分析した土器片 17 点は、いずれも、内面、外面、あるいは内外面に赤色顔料の付着が確認できるもの、または赤色顔料が付着していると思われるものである。器種は、高杯、器台、壺、甕、鉢、把手付広片口皿などさまざまである。

2. 方法

蛍光X線分析装置を使って非破壊定性分析を行い、試料に含まれる元素の種類を調べ、用いられた赤色顔料を推測することとした。

分析には徳島県立博物館に設置されたテクノス製エネルギー分散型蛍光X線分析装置 TREX630L を用いた。

測定の条件はつぎのとおり。

X 線 管	: Mo	X 線管電圧	: 50kV
X 線管電流	: 0.2m A	検出器	: Si (Li)
分析範囲	: 直径 2mm	測定時間	: 100 秒
測定雰囲気	: 大気		

3. 結果と考察

遺物番号 31, 45, 100, 119, 154, 155, 239, 240 および 243 からは Hg (水銀) が検出された。これらの土器片に付着した赤色顔料は辰砂 (水銀朱, HgS) であると考えられる。いずれも、内面に赤色顔料の付着があるので、肉眼でもはっきりとその存在が確認できる状態である。遺物番号 31 および 243 の分析結果を Fig.42・43 に示す。遺物番号 45, 100, 119, 154, 155, 239 および 240 もほぼ同様の結果を示した。

一方、その他の試料においては、Hg (水銀) が検出されなかった。付着した赤色顔料は辰砂以外の赤色顔料、おそらく鉄 (Fe) を主成分とするベンガラであると考えられる。遺物番号 139 の分析結果を Fig.44 に示す。遺物番号 139 以外の 10, 90, 121, 132, 135, 142 も同様の結果を示した。

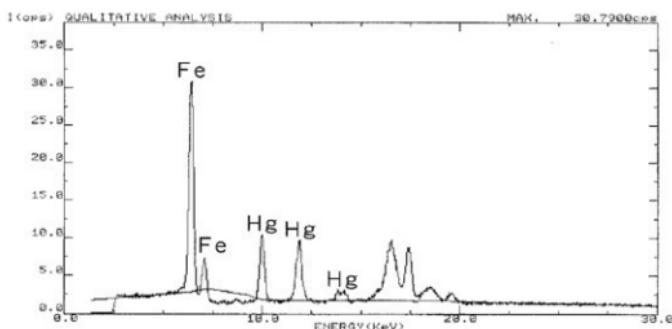


Fig.42 蛍光X線分析結果の一例（遺物番号31）

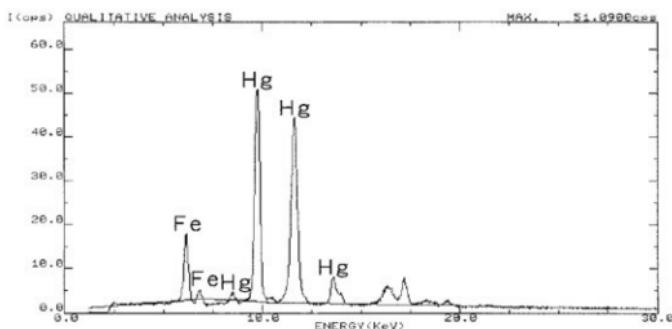


Fig.43 蛍光X線分析結果の一例（遺物番号243）

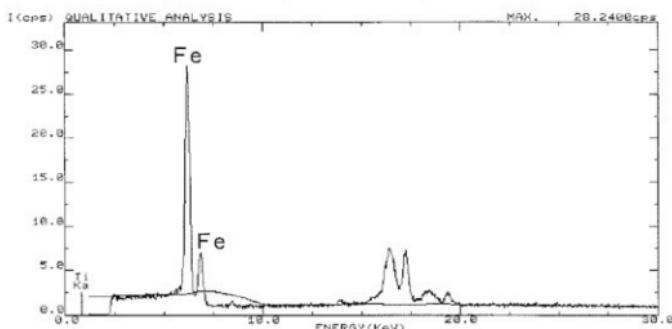


Fig.44 蛍光X線分析結果の一例（遺物番号139）

第2節 太田下・須川遺跡における植物珪酸体（プラントオバール）分析及び微細物分析

パリノ・サー・ヴェイ株式会社

馬場健司・松元美由紀

はじめに

今回の分析調査では、C調査区における土地利用状況に関する情報を得ることを目的として、調査区の堆積断面より採取された堆積物について、植物珪酸体分析を実施する。また、A調査区の弥生時代後期前葉の井戸S E 2から出土した完形土器内の内容物に関する情報を得ることを目的として、土器内堆積物について水洗選別法による微細物分析を実施する。以下に調査目的別に結果について報告する。

1 C調査区の植物珪酸体分析

1-1. 試料

調査地点が位置するC調査区(Fig31)の堆積層の累重状況を模式柱状図としてFig45に示す。調査地点の堆積層は、発掘調査時の所見によると、5層より下位堆積物が弥生時代後期～古墳時代中期の遺構検出面とされる。

植物珪酸体用試料は、3層・4層・5層・6層から採取された4点である。3層(試料1)は砂質シルトからなり、近・現代の床土と考えられる。4層(試料2)は褐色灰色シルトからなり、古墳時代中期以降の堆積土とされる。5層(試料3)は黒褐色を呈する腐植質シルトからなる。5層からは弥生時代後期～古墳時代中期の遺構が多数検出されている。5層の直上には場所によって氾濫堆積物と判断される細粒砂～極細粒砂を挟む。6層(試料4)は側方緩化するシルト～極細砂からなる。

1-2. 方法

分析試料の乾燥重量を秤量後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由來した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。

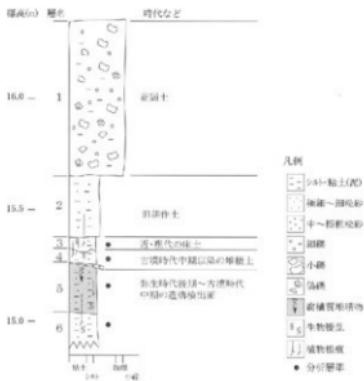


Fig.45 調査地点の堆積層の類重状況

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレバラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレバラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め(100単位にする)る。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位の変化から古植生や栽培植物について検討するために、植物珪酸体含量を図示する。

1-3. 結果

結果をTab.4, Fig.46に示す。各試料からは植物珪酸体が産出するものの、全般に保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

植物珪酸体含量は、層位的に変化し、最下位の6層(試料4)で88,500個/gの含量を示し、5層(試料3)で増加し、101,200個/gを示すようになる。4層(試料2)になると、62,400個/gに減少し、3層ではさらに減少し、48,200個/gになる。

産出種類の構成は、全層準を通じて、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やスヌ

Tab.4 植物珪酸体含量

種類	地区・試料番号				
	C調査区	1	2	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属		2,300	2,000	1,600	-
タケ亜科ネザサ節		4,500	5,600	5,700	10,700
タケ亜科		14,000	19,700	34,300	35,500
ヨシ属		1,200	2,300	2,400	600
ウシクサ族コブナグサ属		200	100	-	100
ウシクサ族スキ属		200	500	500	600
イチゴツナギ科		200	700	400	100
不明キビ型		2,400	3,200	5,800	2,100
不明ヒゲシバ型		800	3,800	5,700	2,200
不明ダンチク型		1,600	3,500	3,100	2,600
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属		1,200	2,300	2,000	-
タケ亜科ネザサ節		7,000	7,500	16,200	10,200
タケ亜科		6,800	5,000	12,100	17,000
ヨシ属		700	800	2,400	300
ウシクサ族		400	200	1,500	600
不明		4,900	5,100	7,300	6,000
合計					
イネ科葉部短細胞珪酸体		27,400	41,400	59,500	54,400
イネ科葉身機動細胞珪酸体		20,900	21,000	41,800	34,100
総計		48,200	62,400	101,200	88,500

数値は含量密度(個/g)を示す。含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

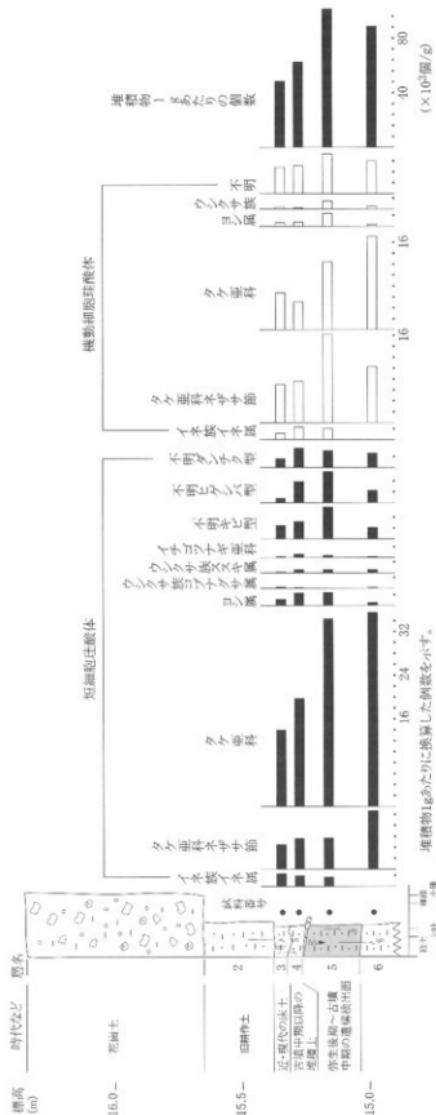


Fig. 46 植物核核酸含量の層位分布

キ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亞科が産出し、5層（試料3）より上位で栽培植物のイネ属が連続して産出するようになる。

各種類の層位の変化は、6層（試料4）ではネザサ節を含むタケ亞科が多産し、その他の種類は僅かに産出する程度である。

5層（試料3）になると、依然としてネザサ節を含むタケ亞科が多産するものの、栽培種のイネ属が産出するようになり、大型の抽水植物であるヨシ属の珪酸体が増加するなどの変化が認められる。本層準における栽培種のイネ属の含量密度は、短細胞珪酸体1,600個/g、機動細胞珪酸体2,000個/gである。

4層では、ネザサ節を含むタケ亞科が減少し、5層で増加したヨシ属も減少するが、栽培種のイネ属は漸増する。イネ属の含量密度は、短細胞珪酸体2,000個/g、機動細胞珪酸体2,300個/gを示すようになる。

3層（試料1）では、ネザサ節を含むタケ亞科が減少する。栽培種のイネ属は短細胞珪酸体が2,300個/g、機動細胞珪酸体が1,200個/gとなる。

1-4 植物珪酸体の産状について

弥生時代後期以前に形成された6層は、側方級化する細粒砂～シルトからなる層相から、河川の氾濫堆積物と推定される。本層準からはネザサ節を含むタケ亞科が高密度で産出したが、これらは河川の氾濫堆積物とともに運搬堆積したものと判断される。したがって、本層準の植物珪酸体組成は、調査地点の後背の広い範囲の植生を反映しているものと判断される。ネザサ節などのタケ亞科の仲間は、自然堤防や明るい二次林の林床などの開けて乾いた場所に生育する種類が多い。また、ネザサ節は温暖な地域に多いため、寒冷な地域に多いクマザサ属とともに、気候の指標となっている（杉山,1999等）。当時の調査地点の後背地にはネザサ節などが生育する領域が存在したことが窺える。なお、タケ亞科の植物珪酸体は、他のイネ科植物の珪酸体に比較して風化に強く、また生産量も多いことから（杉山・藤原,1986など）、実際には植物珪酸体群集で印象づけられるほどタケ亞科は多く分布していなかったと考えられる。

弥生時代後期～古墳時代中期の遺構が検出されている5層は、黒褐色を呈する、擾乱された腐植質シルトからなり、調査地点の堆積環境が大きく変化し、土壤発達する時期を挟む後背湿地のような堆積環境へ変化したことが推定される。5層の植物珪酸体の産状をみると、含量密度が6層より増加している。この変化は、堆積環境の静穏化に伴い、堆積物中の植物珪酸体の蓄積量が増加したことを示している。各種類では、依然としてネザサ節を含むタケ亞科が多産している。これは調査地点近辺でネザサ節などのタケ亞科植物が分布を拡げたことを示している可能性もあるが、上記した6層の産状を踏まえると、土壤の母材となっている氾濫堆積物に元々取り込まれていたものに由来するものが多く含まれているものと判断される。これに対して、本層準で増加する栽培種のイネ属や大型の抽水植物のヨシ属は、調査地点近辺で分布を広げた種類であった可能性が高い。

稲作が行われた水田跡の土壤では、イネ属の機動細胞珪酸体が5,000個/g程度検出されるこ

とが多く、安定した水田稲作が行われたことを示す目安となっている(杉山,2000)。また、現在の耕作土の分析事例では、イネ属短細胞珪酸体が約13.5万個/g、機動細胞珪酸体が約2.4万個/gを示している(辻本ほか,2003)。今回の5層の含量密度は、この目安となる含量より少ない結果となっている。ただし、考古遺跡の植物珪酸体分析事例では、畦畔が検出されている遺構において、イネ属珪酸体がほとんど検出されなかった事例(パリノ・サーヴェイ,2001・2002)や、水田による稲作が行われたと判断される層準を覆う自然堆積層や隣接する遺構埋土からイネ属珪酸体が大量に検出された事例(パリノ・サーヴェイ,1996・辻ほか,2004)なども存在する。また、植物珪酸体は、pH値の高い場所や、乾湿を繰り返す場所で風化しやすく(江口,1994,1996)、種類によって溶解性に違いがあることも確認されている(近藤・佐瀬,1986)。これらの事例から、分析結果として得られるイネ属珪酸体の含量は、様々な要因が関係した結果を示していることになる。植物珪酸体などの微化石の多くは、生育場所から何らかの営力を受けて別の場所へ運搬され、遺跡を構成する堆積物や土壤中にマトリクスとして堆積したものであり、堆積後には、様々な統成作用を受ける。そのため、微化石分析の解釈にあたっては、タフォノミーを考慮する必要がある(辻,2000)。

今回の5層は、上記したように土壤発達する時期を挟むする後背湿地のような堆積環境であったと推定されることから、乾湿の繰り返すような場所であったことが推定される。産出した植物珪酸体の保存状態が悪かったのは、このような風化作用に起因するものと判断される。5層のイネ属の含量密度もこのような風化作用を受けた結果であり、初成の堆積構造が著しく擾乱されている層相を踏まえると、5層形成期には調査区ないしその近辺で稲作が行われた時期を挟むしていることが推定される。

古墳時代中期以降に形成された4層は、層相から氾濫堆積物が流入する氾濫原の堆積環境で形成された可能性が高く、堆積後に耕作土として利用されていることが発掘調査により確認されている。このような堆積環境から、4層中の植物珪酸体も風化作用の影響を受けていることが推定される。本層準における含量密度の著しい減少は、この風化作用の影響による可能性もあるが、その変化が急激であることから、調査区後背地域におけるイネ科植生の減少を反映している可能性が高い。また、栽培植物のイネ属の含量密度は2,300個/gであったが、風化作用の影響や層相を考慮すると、調査地点において稲作が行われていた可能性は充分考えられる。

近・現代に形成された3層は、人為的攪拌が及んだ床土の可能性がある堆積物である。本層準では植物珪酸体含量は、さらに減少しており、周辺の環境変化が示唆される。また、栽培植物のイネ属の産出と、本層が床上の可能性があることと調和的な結果といえる。

2 井戸出土土器内堆積物の微細物分析

2-1 試料

微細物分析は、A調査区の井戸遺構SE2埋土から出土した土器内堆積物5点について実施する。堆積物を採取した土器は、壺3点（遺物番号82・91・93）、壺2点（遺物番号61・64）である。遺物の時期は、弥生時代後期前葉の比較的短期間の間に収まると考えられている。これらの土器は、井戸遺構SE2埋土中の2層（Fig.13）より出土した多量の完形に近い状態の土器の一部であり、意図的な焼成後穿孔が見られることや2層最下位から装飾を持つ器台が出土していることから、水辺の祭祀に関連する遺構と考えられている。

2-2 方法

試料200ccを水に没し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の残渣を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や炭化材（主に径4mm以上）、昆虫、土器などを抽出する。

抽出した種実を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等の図鑑との比較から種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。分析後は、種類毎に瓶に入れ、70%エタノール溶液で液浸し返却する。

2-3 結果

各試料200ccで分析を行ったが、種実等の微細遺物の産出量が著しく少なかったため、試料800ccを追加して分析を行った。その結果をTab.5に示す。産出した植物遺体は、草本11分類群（オモダカ科、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、カナムグラ？、ギシギシ属、エノキグサ、チドメグサ属、タカサゴロウ、メナモミ属、キク科）56個、不明2個、計58個の種実と、炭化材30個（最大径6mm）、昆虫13個（最大径3mm）、土器片18個（最大径6.4cm）が産出した。遺物番号61の壺からは、土器片が1個検出されただけで、種実や炭化材などの植物片は全く確認されなかった。このように調査を行った5点の土器内堆積物から産出した種実遺体は草本からなり、木本類は全く確認されなかった。種実類の遺存状態は比較的良好であり、イネ科の胚乳とギシギシ属の果実は炭化していた。以下に、同定された種実の形態的特徴等を記す。

・オモダカ科 (Alismataceae)

種子が検出された。淡～黒褐色、長さ1.2～1.5mm、幅1mm程度の倒U字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は薄く膜状で柔らかい。表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・イネ科 (Gramineae)

胚乳が確認された。炭化しており黒色。長さ12mm、径0.6mm程度の楕円体で背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。表面はやや平滑。なお、分析中に破損した。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、長さ2～2.3mm、径1.8mm程度の片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り、基部は切形で刺針状の花被片が伸びる飼体がみられる。背面正中線上は鈍稜。果皮表

Tab.5 微細物分析結果

分類群	部位	状態	地区・遺物番号・器種				
			A地区 SE2				
			91 表	61 表	93 表	64 表	82 表
草本							
オモダカ科	種子	完形	2	-	-	-	-
イネ科	胚乳	完形・炭化	-	-	-	1	-
ホタルイ属	果実	完形	-	-	2	2	-
		破片	-	-	-	2	-
カヤツリグサ科	果実	完形	-	-	4	3	2
		破片	2	-	-	1	-
カナムグラ?	種子	破片	-	-	-	4	-
ギシギシ属	果実	完形・炭化	-	-	1	-	-
エノキグサ	種子	完形	-	-	-	2	-
		破片	1	-	2	-	1
チドメグサ属	果実	完形	-	-	10	6	2
タカサゴプロウ	果実	完形	-	-	1	1	-
メナモミ属	果実	破片	-	-	3	-	-
キク科	果実	破片	-	-	1	-	-
不明種実			-	-	2	-	-
炭化材					4(4.5mm)	26(6mm)	
昆虫			4(3mm)			7(3mm)	2(3mm)
土器	破片	4(6.4cm)	1(1.4cm)	2(2.4cm)	4(2.4cm)	7(4.5cm)	
	分析量	1000cc	1000cc	1000cc	1000cc	1000cc	
		1730.4g	1687.8g	1610.2g	1625.1g	1819.5g	

括弧内は、最大値を示す。

面は光沢があり、不規則な波状横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科(Cyperaceae)

果実が検出された。ホタルイ属以外の形態上差異のある複数種を一括した。淡・黒褐色、レンズ状または三稜状倒卵体。径 0.5 ~ 1.3mm 程度。頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形。果皮表面は平滑・微細な網目模様がある。

・カナムグラ (*Humulus japonicus Sieb. et Zucc.*)? クワ科カラハナソウ属

種子と思われる破片が検出された。灰褐色、完形ならば径 4mm、厚さ 1mm 程度の側面観は円形、上面観は両凸レンズ形で頂部はやや尖り、縦方向に一周する稜と基部に淡黄褐色、径 1mm 程度のハート形の脐点がある。種皮表面は粗面で断面は柵状。破片は径 3mm 程度。

・ギシギシ属 (*Rumex*) タデ科

果実が検出された。炭化しており黒色。長さ 2mm、径 1.5mm 程度の三稜状広卵体。三稜は鋭く明瞭で、両端は急に尖る。果皮表面はやや平滑。

・エノキグサ (*Acalypha australis L.*) トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色、長さ 1.5mm、径 1 ~ 1.2mm 程度の倒卵体。基部はやや尖り、Y 字状の稜がある。種皮は薄く硬く、表面には細粒状凹点が密布する。

・チドメグサ属 (*Hydrocotyle*) セリ科

果実が検出された。淡・灰褐色、径 0.8mm 程度のやや偏平な半月形。一端には太い柄があり、合生面は平坦。果皮は厚く、やや弾力がある。表面には 1 本の明瞭な円弧状の稜がある。

・タカサブロウ (*Eclipta prostrata* (L.) L.) キク科タカサブロウ属

果実が検出された。灰・茶褐色、長さ 2.5 ~ 2.7mm、径 1 ~ 1.5mm 程度のやや偏平な三角状倒卵体。両端は切形、果皮は海綿状で、両面には瘤状突起が分布する。両縁に翼があり、水に浮きやすい。

・メナモミ属 (*Siegesbeckia*) キク科

果実の破片が検出された。灰黒褐色、完形ならば長さ 2.8mm、径 1.5mm 程度の狭三角状菱形体で腹面方向へ湾曲する。頂部には円形の臍がある。果皮表面には浅い縦溝と微細な網目がある。網目の塊歯は短く突出し、全体に微細な突起がある。破片は果皮表面の縦溝に沿って割れており、長さ 2mm、幅 0.8mm 程度。

・キク科 (Compositae)

果実の破片が検出された。タカサブロウ、メナモミ属以外の種を一括した。淡灰褐色、長さ 3mm、径 0.5mm 程度の線状長楕円体。頂部は切形で円形の臍がある。破片は頂部から伸びる冠毛を欠損する。果皮表面には微細な網目模様が縦列する。

・不明種実 (Unknown)

遺物番号 93 の B 類甕から検出された 2 個は、淡灰褐色、長さ 0.7mm、径 0.5mm 程度の倒卵体。基部は嘴状に尖る。背面は丸みを帯び、腹面の正中線は鈍稜をなす。表面は粗面。

2-4 土器内から産出した植物遺体について

弥生時代後期の井戸遺構 A 調査区 SE 2 塙土中から出土した 5 点の土器内の堆積物は、植物遺体などの微細物の量に多少の差異があるものの、いずれの試料も概して産出数が少なかった。産出した種実遺体の遺存状態は、比較的良好であったことから、風化などの統成作用の影響により分解消失している可能性は低く、元々堆積物中に取り込まれている量が少ないと判断される。この原因として、堆積速度が速かったことが示唆される。発掘調査時の所見では、堆積状況から、遺構の埋没が短期間であったことが推定されており、今回の結果は同調的な結果といえる。なお、産出量の差異については、土器内への堆積物充填に関わるタフォノミーの違いに起因している可能性があるが詳細は不明である。

産出した種実の分類群構成をみると、オモダカ科、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、カナムグラ？、ギシギシ属、エノキグサ、チドメグサ属、タカサブロウ、メナモミ属、キク科といった草本類からなり、木本類は全く産出しなかった。このうち、オモダカ科やホタルイ属は、抽水植物（根が水に固着し、植物体の一部が水面を突き抜けて空気中に出る植物）～湿生植物の種を含む分類群である。タカサブロウも湿生植物であり、田畠や畦、水路壁などに生育する、いわゆる水田雑草の一種である。カナムグラは一年生のツル植物であり、野原や路傍、河原などの荒地

に生育している。エノキグサは一年生草本であり、乾燥する荒れ地から肥沃な場所まで生育地が広く、畑や路傍などで普通に認められる種である。チドメグサ属は多年草であり、路傍ややや湿った野原などに生育するチドメグサなどの種を含む。メナモミ属は、日本にはコメナモミ・メナモミが自生し、いずれも一年生草本であり、山野の荒れ地や道ばたに生育する。ギシギシ属は多年生草本であり、スイバやギシギシなど、あぜ道や路傍などに生育する種を含む。このほかのイネ科・キク科は、様々な環境に生育する種を含む。

このように各分類群の生態性をみると、産出した種実遺体の多くが、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が多いことが窺える。このことから、これら種実は井戸遺構周辺に分布していた草本植生に由来するもので、遺構が堆積する過程で周囲から堆積物とともに混入したものと考えられる。また、オモダカ科・ホタルイ属・タカサゴロウといった抽水植物～湿生植物などが確認されることから、井戸周辺に水湿地の存在も推定される。発掘調査時の所見では、井戸埋土第2層最下部から装飾を持つ器台の出土より、水辺の祭祀に関連する遺構と考えられていることとも矛盾しない。

以上、井戸遺構SE 2埋土第2層中・上位より産出した植物遺体は、種類構成からみて、いざれも周辺植生を反映するものであり、人為的に壺や壺の中に埋納したと思われる種実(栽培植物等)はみられなかった。唯一ギシギシ属やイネ科種実は、火熱を受けた痕跡があるが、産出量が少ないことから、意図的に入れたのではなく、炭化材片と同様に当時の生活残渣などが取り込まれたと考える方が自然であろう。また、産出量が著しく少なかったことから、短期間に埋没している可能性が考えられる。

引用文献

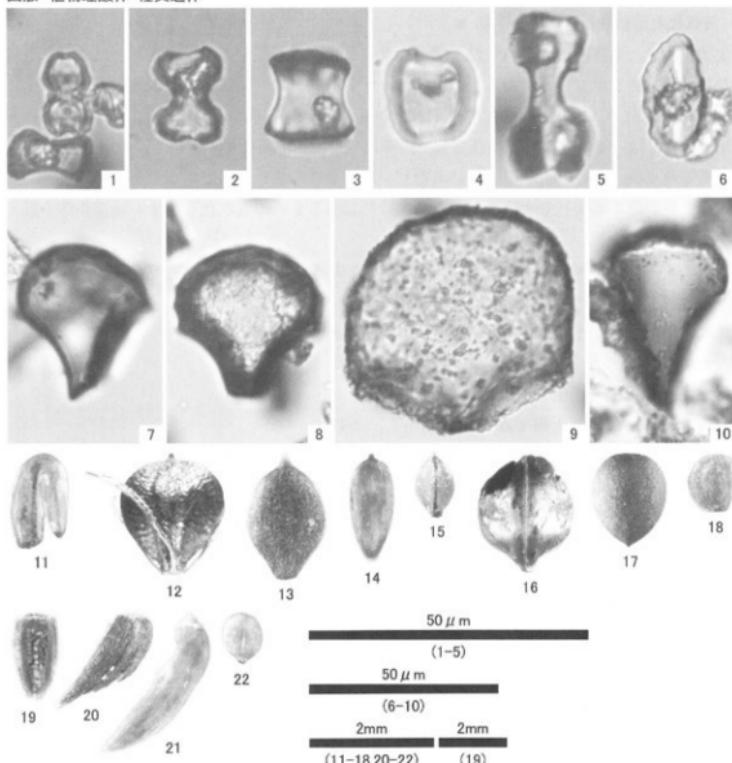
- 江口誠一,1994,沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小湊川河口域を例にして、植生誌研究,219-27.
- 江口誠一,1996,沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値、ペトロジスト,40,81-84.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑、石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑、東北大学出版会,642p.
- 近藤 錬二,1988,十二遺跡土壤の植物珪酸体分析、銚子屋遺跡群十二遺跡-長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書-,御代田町教育委員会,377-383.
- 近藤 錬二,2004,植物ケイ酸体研究、ペトロジスト,48,46-64.
- 近藤 錬二・佐瀬 隆,1986,植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究,25,31-64.
- パリノ・サーヴェイ,1996,珪藻化石・植物化石・樹種による古環境復元、「北島遺跡の耕作地と古環境-夜叉川南部流域植付ポンプ場上木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書-」,(財)東大阪市文化財協会,71-130.
- パリノ・サーヴェイ,2001,鬼里平塚遺跡の自然科学分析、「鬼里平塚遺跡 主要地方道前橋・長藤線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団,343-353.
- パリノ・サーヴェイ,2002,横手南川・横手湯田遺跡の自然科学分析、「横手南川遺跡・横手湯田遺跡北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 第1分冊(本文編)」,(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

第2節 太田下・須川遺跡における植物珪酸体（プラントオパール）分析及び微細物分析

図.133-155.

- 杉山 真二・藤原 宏志,1986,機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として
－,考古学と自然科学,19,69-84.
- 杉山 真二,1999,植物珪酸体分析からみた最終氷期以降の九州南部における照葉樹林発達史,第四紀研
究,38,109-123.
- 杉山 真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール),辻 誠一郎(編著)考古学と自然科学3 考古学と植物学,
同成社,189-213.
- 辻 康男・辻本裕也・田中義文・馬場健司・松元美由紀,2004,付章 前田遺跡の自然科学分析「前田遺跡(第20地点)
-発掘調査概要報告書-弥生前期水田跡の構造と水利動態-」,芦屋市教育委員会,1-40.
- 辻 誠一郎,2000,第二章 植物と植物遺体,「考古学と自然科学3 考古学と植物学」,辻誠一郎編著,同成社,23-41.

図版 植物珪酸体・種実遺体



1. イネ属短細胞珪酸体(C区:2)
2. イネ属短細胞珪酸体(C区:3)
3. ネザサ筋短細胞珪酸体(C区:4)
4. ヨシ属短細胞珪酸体(C区:3)
5. ススキ属短細胞珪酸体(C区:3)
6. イチゴツナギ亞科短細胞珪酸体(C区:2)
7. イネ属機動細胞珪酸体(C区:2)
8. イネ属機動細胞珪酸体(C区:3)
9. ヨシ属機動細胞珪酸体(C区:3)
10. ウシクサ族機動細胞珪酸体(C区:3)
11. オモダカ科 種子(A地区 SE2 91 壱)
12. ホタルイ属 果実(A地区 SE2 64 壱)
13. カヤツリグサ科 果実(A地区 SE2 93 壱)
14. カヤツリグサ科 果実(A地区 SE2 93 壱)
15. カヤツリグサ科 果実(A地区 SE2 93 壱)
16. ギンギン属 果実(A地区 SE2 93 壱)
17. エノキグサ 種子(A地区 SE2 64 壱)
18. チドメグサ 果実(A地区 SE2 93 壱)
19. タカサゴブロウ 果実(A地区 SE2 64 壱)
20. メナモミ属 果実(A地区 SE2 93 壱)
21. キク科 果実(A地区 SE2 93 壱)
22. 不明種(A地区 SE2 93 壱)

第3節 調査地点の液状化について

香川大学工学部 山中稔

1. 液状化と液状化跡

液状化とは、地震時に地盤の土粒子構造を乱され、間隙水圧が上昇することにより、地盤が液体のような挙動を示すことである。液状化しやすい地盤とは一般的に、粒径が揃った砂質土であること、緩く堆積していること、そして地下水位が高いことが挙げられる。このような地盤条件が揃った地形としては、海岸部の砂州や埋立地、内陸部では河川氾濫原や旧河川上が該当する。

当調査地点は、旧香川川の氾濫原にあたり、河川争奪の激しかった場所である。すなわち、礫質土や砂質土が緩く堆積しやすいことから、内陸部にあるものの液状化しやすい地盤条件を揃えていることが推察できる。

このような地盤条件の地点において、遺跡調査実施中に液状化発生の痕跡である噴脈が検出された。写真に、掘削断面で検出された噴脈を示す。掘削断面の土層区分は、上位から表層部の盛土、シルト質の粘性土、液状化を発生したと見られる砂礫質土である。地震時に砂礫質土層で液状化が発生し、この液状化によって生じた高い水圧とともに砂礫が上位の粘性土層を貫入していることが分かる。この粘性土層からは、弥生時代の土器が検出されていることから、この噴脈を生じさせた地震は、弥生時代以降の発生であると言える。

2. 噴脈内の噴礫の粒度特性

Fig.47に、噴脈内の砂礫土と、噴脈の貫入粘性土層の粒度分布を示す。噴脈内の砂礫土の最大粒径は75mm、平均粒径は17mmと大きく、粗礫分が卓越する粒径を有する。これまで、液状化噴砂の粒度分布の研究は試料採取の容易さから多くなされているが、噴脈内の粒度を調査した研究はそれほど多くない。1995年兵庫県南部地震における液状化地点のトレーニング調査が神戸市灘区で実施され噴脈構成土の粒度分布が詳細に調査された¹⁾。この結果と比較して、当該地で発見された噴礫は最大粒径及び平均粒径共に大きい。すなわち、粒径の大きさから判断する限りでは、挿れの大きな地震の発生により当調査地点で砂礫層において液状化が発生したことが伺える。

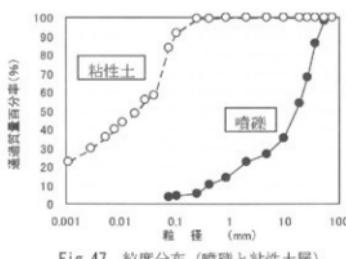


Fig. 47 粒度分布 (噴礫と粘性土層)

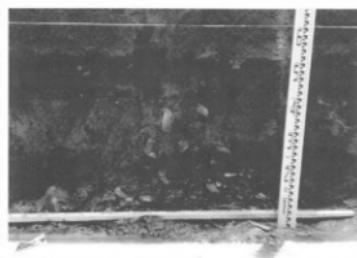


写真 液状化発生跡

Tab. 6 粒度分布 (粒径区分における質量比)

区分	粒径 (mm)	質量比 (%)	
		噴礫	粘性土
粗礫分	19～	46.3	0.0
中礫分	4.75～19	27.0	0.0
細礫分	2～4.75	4.1	0.0
粗砂分	0.85～2	8.5	0.1
中砂分	0.25～0.85	8.8	0.6
細砂分	0.075～0.25	1.4	15.8
シルト分	0.005～0.075	3.8	48.5
粘土分	～0.005	0.1	35.0

3. ポーリングデータによる地質構造

四国地盤情報データベース（四国地盤情報活用協議会）を用いて、調査地を中心とした南北方向の地質断面図を作成した。Fig48 の A - A' 断面におけるポーリング柱状図を Fig.49 に示す。

Fig.49 より、表層部には埋土もしくは粘性土層が薄く堆積し、その下位に N 値が 20 ~ 40 の緩い砂礫層が分布している。調査地点における地表から 2 m 程度トレーンチ掘削での観察結果でも、概ねこの土層が確認できている。また、この地質構造からも、調査地点が扇状地形上にあることが分かる。

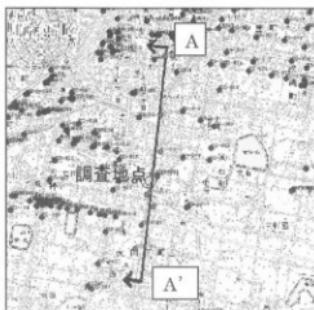


Fig. 48 地質断面線 (A-A'断面)

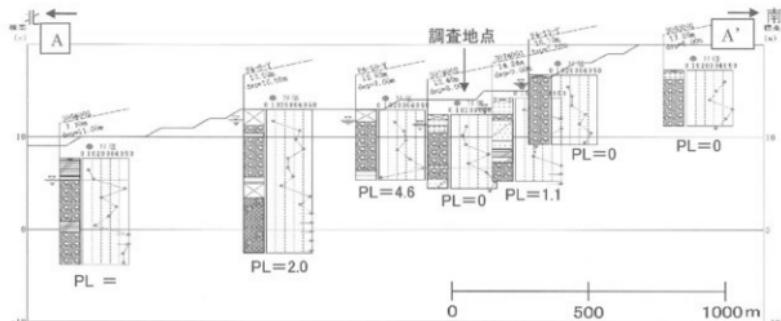


Fig. 49 地質断面図と液状化危険度 PL 値

4. 液状化判定

ポーリングデータを用いて道路橋示方書・同解説 V 耐震設計（平成 14 年 3 月）による PL 値法に基づき液状化危険度判定を行った。液状化判定における想定地震は、南海地震のような「発生頻度が低いプレート境界に生じる大規模な地震動」タイプ（海溝型）とした。

Fig.49 の各柱状図の下部に液状化危険度 PL 値を示している。この PL 値より調査地を含む断面上の液状化危険度ランク (Tab. 7) は C もしくは D であり液状化危険度は低いと判定される。

以上のように噴脈構成土の粒径が大きいこと、また海溝型地震での PL 値が低いことから、本調査地で発見された噴脈が発生した地震は、海溝型地震以外の内陸直下型地震によると推察される。

参考文献: 1) 沼田淳紀、森伸一郎、陶野郁雄、遠藤邦彦: 液状化で生じた砂脈と噴砂に関する一考察、土木学会論文集、No.638/ III-49, pp.311-324, 1999.12.

Tab. 7 PL 値による液状化危険度ランク

PL 値	ランク	危険度判定
$15 < PL$	A	液状化危険度は極めて高い
$5 < PL \leq 15$	B	液状化危険度は高い
$0 < PL \leq 5$	C	液状化危険度は低い
$PL = 0$	D	液状化危険度はかなり低い

第V章 まとめ

第1節 遺構の変遷について

本節では今回の調査結果に加え、香川県教育委員会による既往の発掘調査および周辺の工事立会・試掘調査の成果を踏まえて遺構の変遷について検討する。各調査の概要については第I章第2節を参照されたい。既往の調査では主に遺跡の東西方方向について調査されている。この範囲での遺構の変遷はその発掘調査報告書（北山・森下編 1995）に詳述されているため、ここでは触れない。今回の調査では遺跡の南北方向の広がりを推定する資料が得られたため、この部分を中心記述を行う。なお、地点の記述については今回の調査区と香川県教育委員会の調査区（北山・森下編 1995）との交点を仮に中心とし、方位と距離を表す。

弥生時代 (Fig.51) 中心から北へ約 160 m の地点で後期前葉の土器が出土した (Fig.50) 大溝は、直線的に延長すると西へ 160 m の地点に位置する幅広の溝につながる。この溝からは弥生時代前期末葉の土器も出土していることから、大溝の開削時期が前期に遡る可能性が考えられる。ただし、本遺跡で中心となる時期は後期前半である。遺構は、住居跡と溝が中央と西約 120 m の地点で確認されている。また北へ 120 m の地点で後期前葉の井戸 (A 調査区 S E 2)、北へ 90 m の地点で竪穴住居も検出されている。A 調査区以北の試掘では遺構が認められなかつたため、A 調査区北半が集落の北限にあたる可能性が考えられる。南側では居住に関する遺構は検出しなかつたが、南へ 60 m の河川 (C 調査区 S R 1) より弥生時代後期後半の土器が多量に出土しており、周辺に供給源である集落の存在を推定できる。また時期は不明瞭だが、堆積状況から C 調査区 S D 7 と付近の足跡群も弥生時代後期に併行すると考えられる。このように、弥生時代後期の集落は西側を居住域の中心として南北 300 m 程度の範囲に広がっていたと考えられる。



Fig.50 大溝出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

古墳時代 (Fig.52) 古墳時代の集落域は東へ 110 m の地点を中心に認められ、弥生時代の集落域から 300 m ほど東へ移動している。竪穴住居や掘立柱建物は若干の時期差を持ちながらほぼ同時期に存在していたと考えられており、その時期は概ね古墳時代中期から後期にあたる。北へ 50 m の地点の B 調査区 S D 4 を直線的に延長すると、住居群の西端にあたることから、居住域を開く溝の可能性も考えられる。南側では遺構が検出されなかつた。

古代 (北山・森下編 1995) では条里に沿う溝などが確認されるが、今回の調査では C 調査区 S R 1 より古代の須恵器が 1 点出土したのみで、明確な遺構は認められなかつた。

中世以降 (北山・森下編 1995) では掘立柱建物などが確認されるが、今回の調査では明確な遺構は検出されなかつた。

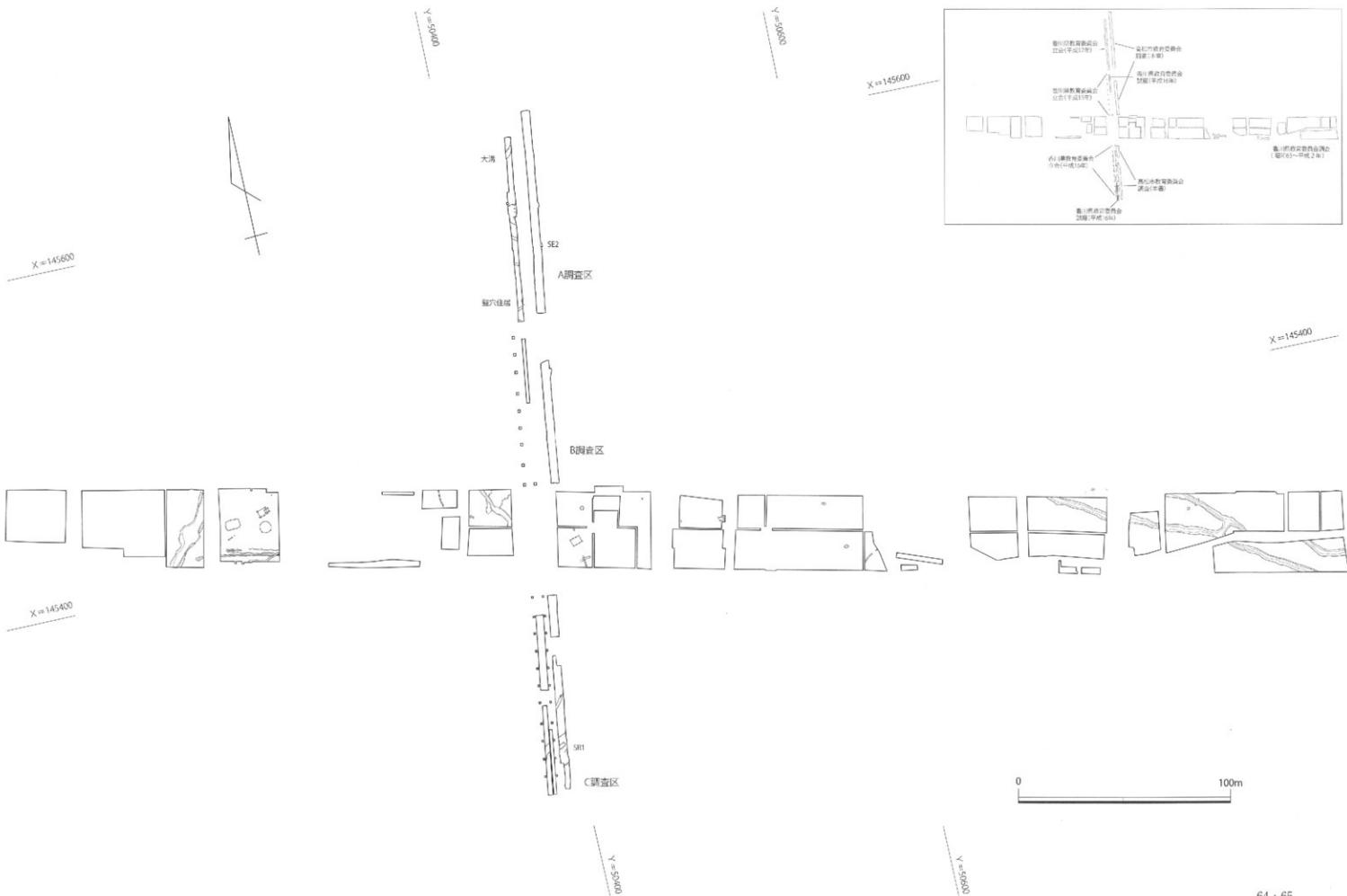


Fig. 51 太田下・須川遺跡遺構配置図（弥生時代後期）（縮尺 1/1600）

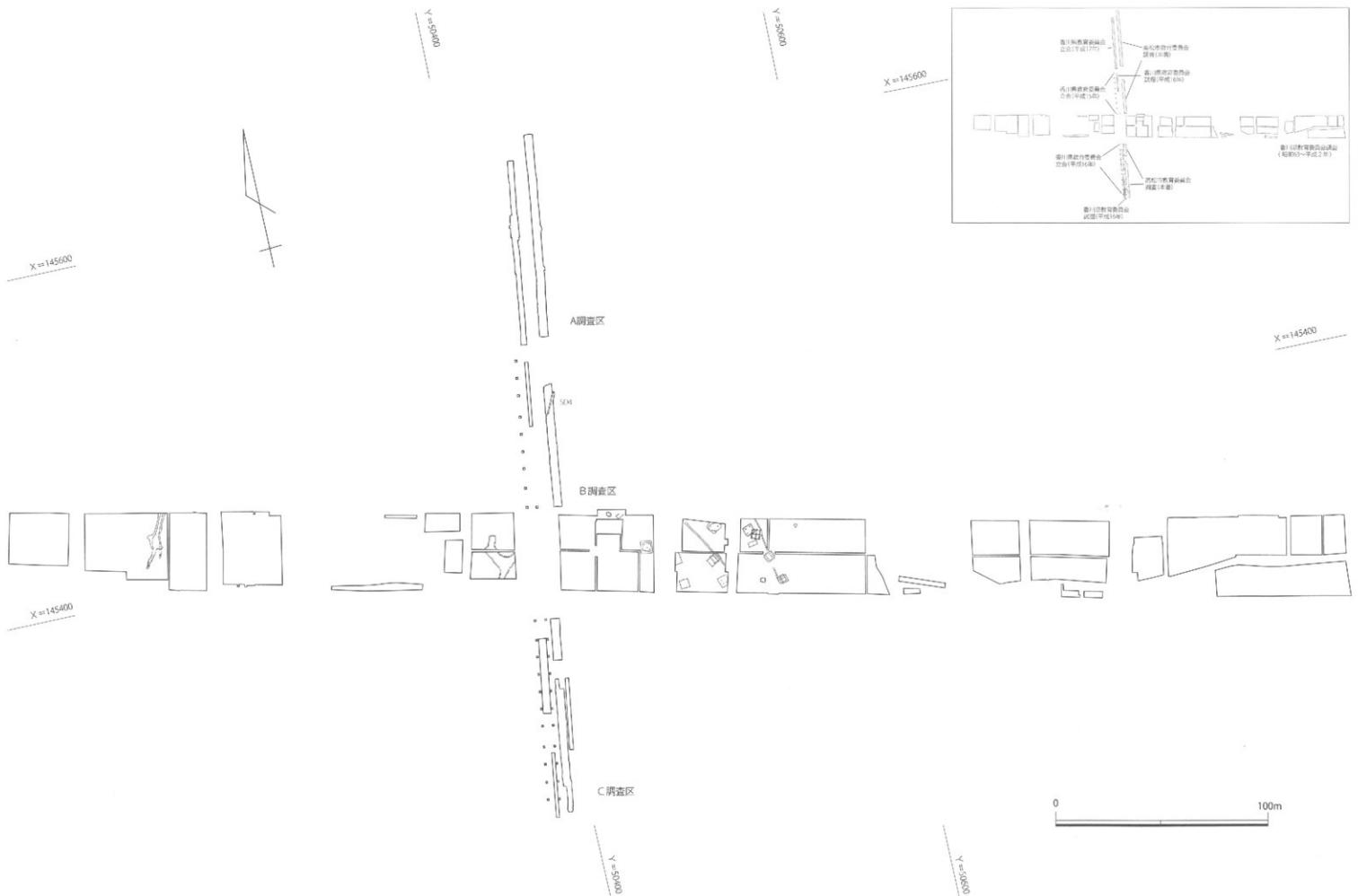


Fig. 52 太田下・須川遺跡遺構配置図（古墳時代中期～後期）（縮尺 1/1600）

第2節 A調査区井戸S E 2について

1. 出土土器の編年的位置づけと今後の課題

本文中でも述べたが、A調査区S E 2からは多量の弥生土器が出土した。堆積状況から良好な一括性を有す資料であると評価できる。また、土器中に堆積した土壤の微細物分析を行った結果、植物遺体の産出量が極めて少ない状況から、井戸が極めて短期間に埋没した可能性が示唆されたこと（本書第IV章第2節）もこの資料の一括性を傍証するものである。また、出土土器の9割以上が「角閃石細粒を稠密に含む特徴的な素地粘土を採用する」「香東川下流域産」（大久保2003）とされる土器である。太田下・須川遺跡周辺は香東川下流域土器の製作拠点のひとつにあたる。このような状況から、高松平野における弥生時代後期の土器編年を考える上で重要な資料になると考えられるため、ここではまず先行研究に基づき、当土器群の編年的位置づけについて考えてみたい。

高松平野を含む香川県域の弥生時代後期土器の編年については、他地域に先行して良好な資料に恵まれた丸亀平野の資料を用いて検討が進み、特徴的な胎土を有する香東川下流域土器もその中で搬入品として検討された⁽¹⁾（大久保1990）。その後、香川県域全域の資料を対象とした検討（真鍋2001）や、中期から後期初頭の凹線文型を対象にした編年作業（信里2005）の中で高松平野の資料も検討された。片桐孝浩は高松平野北東部の資料をもとに、後期土器の編年を検討した（片桐2006）。乗松真也は高松平野の資料の中でも特に香東川下流域産以外の土器に着目し、壺の型式変化を主な手がかりに編年を行った（乗松2006）。

これらの研究を踏まえて本造構出土資料を概観したい。まず器種組成であるが、大久保による隣接する上天神遺跡の分類を援用する（大久保1995）と、壺で大小2形態・6種、壺は広口壺・直口壺・短頸壺・無頸壺・細頸壺の5基本形態がそれぞれ見られ、細分すると10種が認められる。高坏では2種、器台1種、鉢は大小2形態5種がそれぞれ認められる。造構が完掘できず、全ての遺物を回収できたわけではないが、器種組成の多様さは認められるであろう。紙幅の制限から詳述はできないが、それぞれの器種を概観すると、壺では口縁端部が弱く上下に拡張され、端面に弱い凹線を施すものが半数程度を占め、一部沈線状のものや凹線を持たない資料（Fig.18 - 81・82など）も認められる。また、口縁端部がほとんど拡張せず、直線的に伸びるもの（Fig.19 - 90・92など）や上方に強く屈曲する、中期的な特徴を残す一群（Fig.20 - 94～96）も存在する。口頭部の屈曲は「く」の字状を呈するものと、やや直立し頭部状の部位をもつものが認められる。内面調整はヘラケズリが頭部付近までおよぶものと体部中位で終わるものがある。壺では多様な器種とそれぞれに細分形態が認められる。高坏をみると、口縁端部は水平に肥厚し、罐面に凹線を有する資料が大半を占める。また、第2層上位出土資料であり混入の可能性も考えられるが、後につながる形態である端部が肥厚せず緩やかに外反する資料も見られる（Fig.15 - 33）。大型鉢では口縁部がやや内傾し加飾を施さないものが主体である。口縁部が外傾し、端面を丸く收める小型鉢も同程度認められる（Fig.21 - 13・15）。

これらの型式的特徴から、本資料の所属時期は後期前葉に概ね比定され、中でも壺や高坏・鉢の口縁部形状から、後期初頭の基準資料とされる上天神遺跡SK04・SD08よりも若干後出する

ものと考えられる。

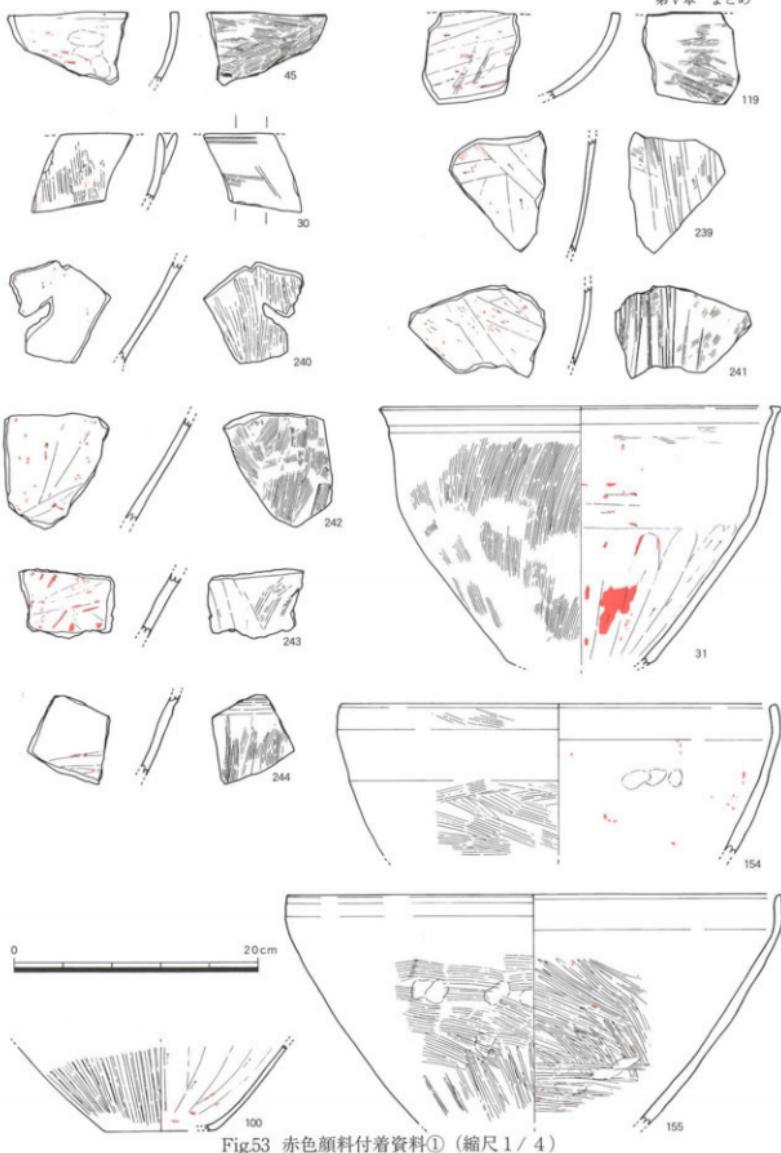
ただし、高松平野における弥生時代後期土器の編年については、いくつか解決すべき課題が残っている。当該期の香東川下流域産土器の編年は、現状では主に搬出先の資料を用いた編年であり、生産地である高松平野の資料との間で若干の時期差が生じる可能性が考えられる。また、弥生時代後期の高松平野では香東川下流域産土器と、香東川下流域産以外の土器⁽²⁾が認められる。これらは同時期に同一遺跡・遺構内で併存しておりながらも製作技法や胎土・色調・調整など、様々な異同要素が認められる。本遺構でも香東川下流域産土器と白色系の土器が共存している。香東川下流域産以外の土器の編年については分析があるものの（乗松 2006）、良好な一括資料の不足から、製作地である高松平野における香東川下流域産土器については未だ十分な検討が及んでおらず、また、香東川下流域産以外の土器との併行関係も不明瞭である。高松平野における弥生時代後期の土器編年には香東川下流域産土器の編年の確立と、香東川下流域産以外の土器との併行関係の検討が必要である。

香東川下流域産土器は特徴的な胎土から識別が容易なため、高松平野内でも製作地と搬出先という関係が明瞭に確認できる。また、遠隔地へ流通する例も知られており、当該期の土器の併行関係や地域間の交流を考える上で、生産地である高松平野の土器編年は非常に重要な意味を持つであろう。筆者の力量不足により本稿で検討は行えなかつたが、本遺構資料がこうした問題を考える上で良好な一括資料であることは確かである。昨今の資料の増加を踏まえた上で、上記の問題の解決が望まれる。

2. 土器に付着した赤色顔料について (Fig.53・54)

A調査区 S E 2 から出土した土器には多数の赤色顔料付着個体が認められた。肉眼観察でその可能性の伺える資料だけでも 30 点あまりを数える。Fig.53・54 には肉眼観察で赤色顔料の付着が認められた資料の一部を掲載した。器種の明らかなもので内訳を見ると壺 6 点、壺 4 点、鉢 4 点、高坏 6 点、広片口皿 2 点、器台 1 点である。顔料が剥落し、付着部が極めて判りづらい資料が大半であることを考慮すると、本来はより多くの個体に付着していた可能性が高い。これらのうち残存状況の良好な資料と、器形から赤色顔料付着の可能性が考えられた資料の蛍光 X 線分析を徳島県立博物館 魚島純一氏に依頼した（第Ⅳ章第 1 節）。

分析結果のみ紹介すると、高坏（121・132・135・139）・器台（142）に付着した赤色顔料はベンガラであり、鉢（31・154・155）・広片口皿（45・119）の内面に付着した赤色顔料が水銀朱であることが明らかとなった。本遺構例においては赤色顔料の種類と器種とに相関関係が認められ、意図的な使い分けがなされていた可能性が考えられる。また、ベンガラは高坏や器台を中心に認められる。隣接する上天神遺跡では高坏や器台にベンガラが塗布される資料が多く認められ、装飾を目的としたものであると考えられている。一方、水銀朱は鉢や広片口皿などの内面から主に検出されている。これらの器種は水銀朱の精製あるいは貯蔵に関係すると考えられている。香川県教育委員会による既往の調査でも本遺跡から水銀朱の付着した土器が発見されており（北山・森下編 1995），隣接する上天神遺跡からも水銀朱の付着した土器が多数検出されている（大久保・



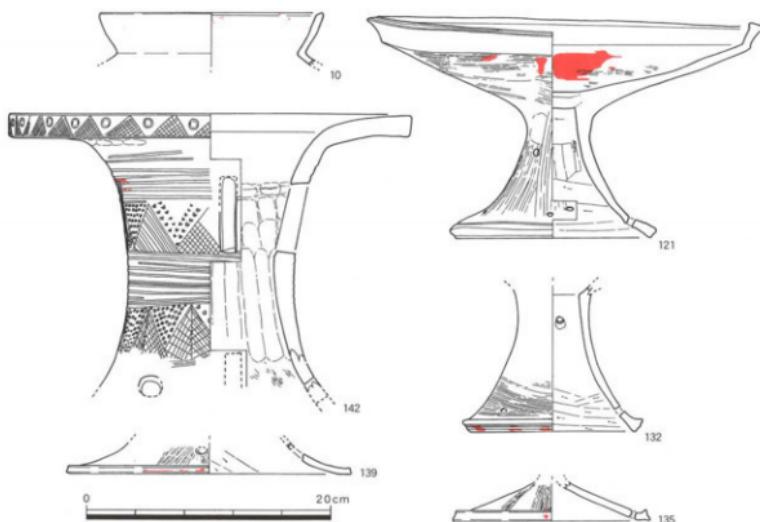


Fig.54 赤色顔料付着資料② (縮尺 1 / 4)

森ほか編 1995)。これらの水銀朱は徳島県若杉山遺跡周辺で採取・精製されたものと考えられ。高松平野が水銀朱の一大消費地であったことがわかる。本遺跡出土の水銀朱付着鉢の付着部位を観察してみると (Fig53), 体部中位から上半にかけての範囲に朱の付着した個体が複数認められる。朱付着個体の多くが口径 30 ~ 40cm を測る大型の鉢であるため、これらに付着の認められる部位まで水銀朱が充填されたと仮定すると、極めて多量の水銀朱の存在が推定できる。水銀朱の付着部位の上限が内容物の上限であると仮定し、内容量の試算を行ってみる。底部付近まで残存している 31 をみると、赤色顔料付着の最上部位までの容積はおよそ 1120cm^3 である。水銀朱 (HgS) の比重が 8.09 g/cm^3 とする (地学団体研究会ほか 1996) と、約 9 kg もの水銀朱が内容されていた可能性が指摘できる。もちろんこれは最大量を示すものであり、精製・貯蔵時の土器の用いられ方などにより変化することは明らかである⁽³⁾が、こうした大型の鉢が複数存在することからも、当遺跡に多量の水銀朱が持ち込まれていたことがわかる。

ただし、井戸埋土中から水銀朱そのものを確認することはできなかった。堆積環境で水銀朱がどのような変化をするのか不明であるが、流失や化学変化により失われたのでなければ、土器中に水銀朱そのものを大量に充填して廃棄された形跡は認められない。水銀朱の付着した土器が井戸祭祀に際して意図的に用いられたのであれば、内容物である水銀朱を目的として用いられたのではなく、水銀朱を生産・貯蔵する容器自体を用いたことが推測される。

3. 把手付広片口付皿について (Fig.55)

A調査区S E 2から、小片であるが把手付広片口皿と考えられる資料が出土した。隣接する上天神遺跡出土資料を参考に（大久保・森ほか編 1995：第2分冊 p. 150）復元を行ったのがFig.55である。調整および胎土・色調から少なくとも2個体の存在が確認できる。平面形は弥生土器の甕を縦に半裁したような倒卵形に、把手の付く形状に復元した。ただし、把手部は出土していないため、把手の無い型式のものであった可能性も考えられる。

(118・120) 片口端部および側縁端部は工具で鋭利に切断されており、直線的な端面をもつ。内外面共にタテ方向へのラミガキが精緻に施され、特に片口部内面は調整の単位が認められないほど平滑にヘラミガキ調整が行われる。

(45・119) こちらも側縁端部は鋭利な工具で削り出される。外面には細いハケ調整が施され、内面にはケズリおよびヘラミガキが認められる。

ともに片口端部に鋭利な工具痕がみられることから、本器種は甕などを縦に半裁して製作された可能性が高いものと思われる。また、外面は比較的磨耗が激しいが、内面の残りは良好である。破片が小さく、全容は分からぬが、外面に水銀朱の精製に関連すると考えられる、煤の付着や赤変といった被熱の痕跡（市毛 1998）は認められない。上天神遺跡出土把手付広片口皿は水銀朱の付着が顕著に認められることから、水銀朱の貯蔵・精製に関連する器種であると推定されている（大久保・森ほか 1995）。本遺跡出土資料では45・119から水銀朱が検出され、上記の推定を裏付ける結果となった（本書第IV章第1節）。

4. 井戸における祭祀について

S E 2では井戸の中から多数の弥生土器が出土した。遺物出土層中位以下からは完形・略完形の土器が多数検出されており、出土状況から井戸にまつわる何らかの祭祀が行われたものと考えられる。本項ではまず本遺構における祭祀の要素を整理し、報告する。また、香川県内における弥生時代の井戸を集成し、本例の位置づけに関して若干の比較検討を行いたい。

出土遺物から祭祀的であると考えられる要素には、以下の点が挙げられる。

- a. 完形ないし略完形の土器 (PL.17～21)。
- b. 壺・甕体部の焼成後穿孔
- c. 赤色顔料付着土器 内面に水銀朱の付着した鉢や、水銀朱の貯蔵・精製用と考えられる把手付広片口皿が見られる。また、器台・高坏の外面にはベンガラの塗布が見られる。
- d. 最下層の器台と壺 器台は搬入品の可能性が考えられる資料で、鋸歯文を中心とした複雑な文様を施す。壺は器台の下で縦に半裁されたような状況で検出した (PL.3下段)。また、接合作業の結果、Fig.13-2層上位・中位出土の破片と接合関係が認められた。甕の段階で偶然破損した可能性も否定できないが、破損状態と出土状況が特異であるため、意図的な破砕および甕棄が行われた可能性も考えられる。類例の増加を待ち判断したい。
- e. 器種組成 (Fig.56) 隣接する上天神遺跡の分類を援用し、器種組成を算出した⁽⁴⁾。壺と壺がそれぞれ4割程度を占め、鉢・高坏がそれぞれ1割程度を占める。壺の比率がやや高いと思わ

第2節 A調査区井戸S E 2について

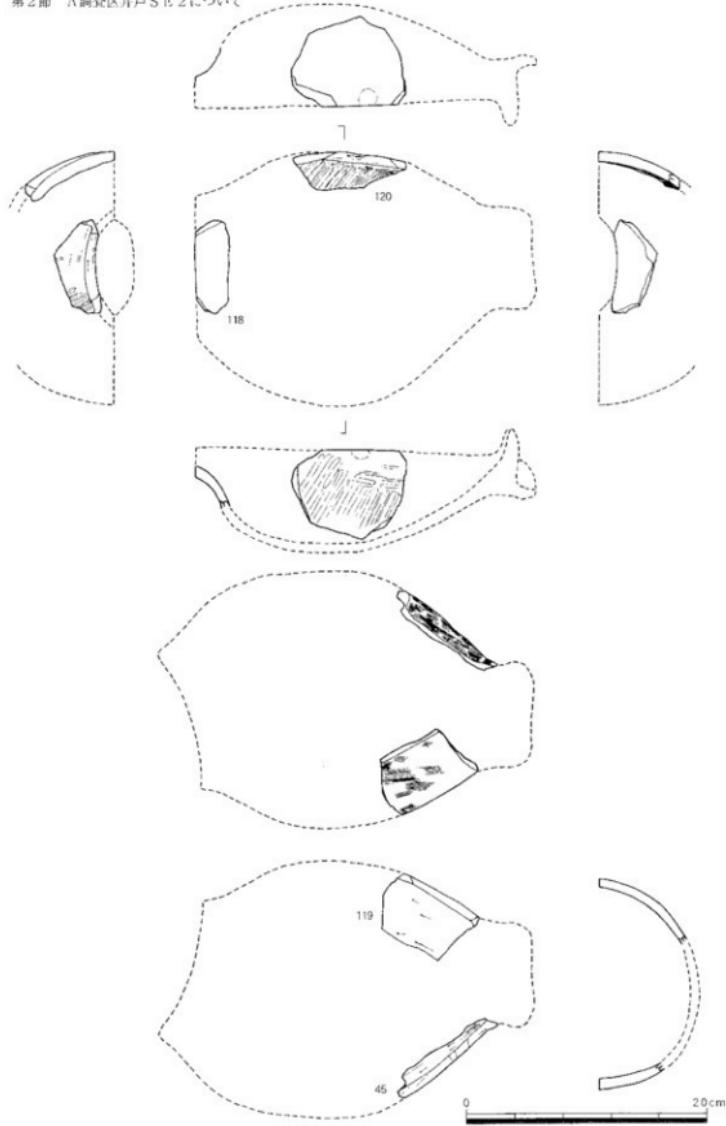


Fig.55 取手付廣方口皿推定復元図 (縮尺 = 1 / 4)

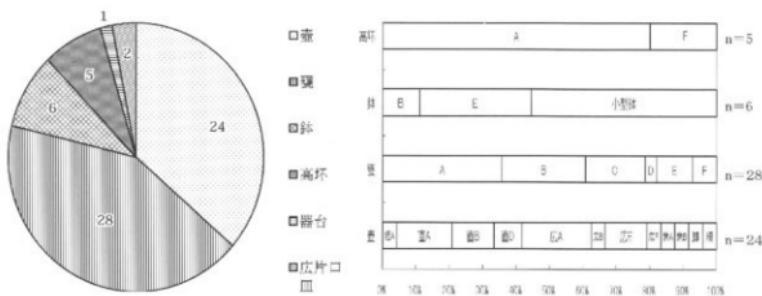


Fig.56 A調査区SE2出土土器器種組成

れ、器台や把手付広片口皿など、特異な器種が一定量認められることが特徴として挙げられる。一方、堆積状況で特筆すべきことは、

f. 堆積層 下層部分は調査時に十分な検証が行えなかったが、堆積層が少なく、1層ずつが厚い。こうした堆積状況から人為的な埋没の可能性が考えられる。また、最下層 (Fig.13 - 3層) と中層 (Fig.13 - 2層) はほぼ同質の土であり、間層を挟まないため、堆積に時間差はほとんど無く、極めて短期間で埋没したものと考えられる。こうした見解は微細物分析の結果によっても傍証されている（第IV章第2節）。

g. 遺物の出土位置 最下層である Fig.13 - 3層からは全く遺物が出土せず、Fig.13 - 2層より完形を含む多量の土器が出土した。こうした状況から、出土した遺物は井戸の廃絶に際して投棄されたものと考えられる。

h. 円碟の混入 中層である Fig.13 - 2層からは径5~10cm程度の円碟が多数検出された。井戸底に浄水を目的として碟を敷く例が認められるが、本例では土器群と混在しており、完形の土器の内部からも多数検出されることから、浄水を目的とした碟敷とは考えがたい。井戸の廃絶の際、土器と共に意図的に投棄されたものと考えられる。

統いて、研究史の概略をまとめ、集成作業の結果を述べる。香川県域の弥生時代の井戸に関する研究は少ない。佐藤竜馬は、弥生時代の水利遺構である出水状遺構を検討し、弥生時代後期に灌漑に伴う遺構として掘削されたこと、出土遺物中に祭祀的な遺物が認められることを指摘した（佐藤 1993）。清水渉は平池南遺跡の井戸出土遺物と井戸祭祀との関連を検討した（清水 1995）。近藤玲は四国の弥生時代から古墳時代にかけての井戸を検討する中で香川県の井戸についても論及しており、旧練兵場遺跡や上天神遺跡例を挙げ、後期に金属器など、専門的な手工業生産の展開に伴い出現すると位置づけた（近藤 2008）。

集成作業を行うにあたり問題なのは、井戸の認定条件についてである。すでにいくつかの具体的な条件が提示されている（堀 1999・2008）が、ここで挙げられた条件を各報告書で確認するこ

Tab. 8 香川県内弥生時代井戸集成表

遺跡名	遺構名	所在地	立地標高(m)・時期	規模 (縦×横×深さ)	構造	出土遺物	出典・備考
1 北内 NIS-SE01	丸龜市道後町 丸龜市道後歌町	谷・36.8	中期中葉	1.2×0.8	無柱り・垂・壁		1
2 北内 NIS-SE02	丸龜市道後町 丸龜市道後白鳥	谷・36.7	中期中葉	1.2×0.6	無柱り・垂・壁	井戸石斧	2
3 仮塗	■区段2・3・4井戸SE02 ■区段2・3・5・6井戸SE01下層	丸龜市道後町 丸龜市道後白鳥	階状地・11.4 階状地・12.8	1.6×0.8	無柱り・垂・壁・井戸石斧		1 砂岩礫の板下・完形土器
4 汎用 SX11	■区段2・3・5・6井戸SE01下層	丸龜市道後町 丸龜市道後白鳥	階状地・12.6	中期中葉	1.2×0.7	無柱り・垂・壁・石斧・石刀・石器	2
5 既塗	SIS01	■区段2・3・5・6井戸SE01下層	階状地・10.8	中期後葉	5.9×1.1	無柱り・垂・壁・石器	3
6 墓塗		高松市上天神町・三条町 高松市上天神町・三条町	階状地・15.3	後期後葉	1.5×1.0	無柱り・垂・壁・石器	2
7 上天神	4区SK04	高松市上天神町・三条町	階状地・15.8	後期後葉	1.0×0.4	無柱り・垂・壁・石器・台付・竹口皿	4
8 上天神	4区SK05	高松市上天神町・三条町	階状地・15.8	後期後葉	1.9×0.9	無柱り・垂・壁・石器・台付	4 実付粘土器
9 上天神 10 井戸A・B・C・D・E・F・G・H・I・J・K・L	4区SK06 SK03 A調査区SK52	高松市上天神町・三条町 高松市大田 高松市大田	階状地・15.8 階状地・14.3 階状地・13.5	後期後葉	1.7×0.9	無柱り・垂・壁・方口皿	4
11 大井戸下・発川	Se-e01	高松市大林 高松市大林	階状地・13.5	後期後葉	1.0×2	無柱り・垂・壁・高所	5 本器 来付粘土器 完形土器・体創穿孔
12 宝池跡地		高松市大林 人龜市金倉町	階状地・17.4	後期後葉半	1.2×1.1	無柱り・垂・壁・高所・林	6 刷平を施ける
13 宝池跡 SK215		人龜市金倉町	階状地・?	後期後葉	1.12×0.5	無柱り・垂・壁・高所	
14 宝池南 SK220		人龜市金倉町	階状地・?	後期前半	1.8×1.2	無柱り・垂・壁・高所・石鏡	7
15 朝日東・中村 C&SE01	高松市前田	階状地・18.6	後期前半から	0.6×1.1	無柱り・垂・壁・台付・竹口皿	7 完部で完形器・鹿に木の皮を被り始める	
16 天満・宮西 SE02	高松市松坂町 高松市林	階状地・5.6 階状地・14.4	後期前半・中葉	3.6×1.1	無柱り・垂・壁・竹口皿	8 完形土器 体創穿孔	
17 宝池跡地	SK012	高松市林	階状地・14.4	後期前半・中葉	1.1×0.7	無柱り・垂・壁	9 付近の溝から水糞糞糞土器
18 宝池跡地	SK011	高松市林	階状地・14.5	後期前半	1.2×0.6	無柱り・垂・壁	10 糞糞
19 宝池跡地	SK034	高松市林	階状地・14.2	後期前半	1.3×0.5	無柱り・垂・壁・高所・竹口皿	10 出水状遺跡
20 小山・南谷 SE501	高松市新田町	階状地・30.9	後期後葉	1.1×0.9	無柱り・垂・壁・高所・竹口皿	10 出水状遺跡	
21 小山・南谷 SE502	高松市新田町	階状地・23.4	後期後葉	2.0×0.2	無柱り・垂・壁・粘土器	11 出水状遺跡	
22 旧跡美濃 SK06	高瀬寺古 高瀬寺古	鬼當地・22.8	後期後半	1.5×0.2	無柱り・垂・壁・粘土器	11 付近で牛頭・頭骨・骨版・器・鐵・鐵冷通機	
23 墓塗	1区SE02	丸龜市道後町 丸龜市道後町	階状地・18.6	後期後半	2.0×1.6	無柱り・垂・壁・竹口皿	12 体部穿孔の完形土器
24 川面 SIS03	■区段2・3・4 SE01	仲多度郡まんのう町 仲多度郡まんのう町	階状地・45.5	後期後葉半	2.0×0.8	無柱り・垂・壁・高所・竹口皿	2 朝向前面で出土・完形土器
25 町闇 SE02		仲多度郡まんのう町 仲多度郡まんのう町	階状地・45.5	後期後葉半	2.6×0.6	無柱り・垂・壁・石鏡	13 出水状遺跡
26 町闇 SE02		仲多度郡まんのう町 仲多度郡まんのう町	階状地・45.5	後期後葉半	2.9×1.1	無柱り・垂・壁	14
27 除間 SEV01	さぬき市大内町	鬼當地・11.3	後期後半	2.3×0.6	無柱り・垂・壁・高所	14	
28 除間 SE01	さぬき市大内町	鬼當地・12.2	後期後葉	2.3×0.8	無柱り・垂・壁・竹口皿	15 有頭間で出土・完形土器	
29 除間・一又 SE01	高松市川内町	鬼當地・9.4	後期後葉	2.4×0.7	無柱り・垂・壁・竹口皿	16 完形土器 体創穿孔・出土土器に未付着	
30 除間・宮西 SE01	高松市川内町	鬼當地・4.7	後期後葉	2.5×0.8	無柱り・垂・壁・小丸壺・高所	16 完形土器 体創穿孔	
31 除間・松林 SE01	高松市多肥下町	鬼當地・17.0	後期後葉・五箇前頭前頭	1.8×0.5	無柱り・垂・壁	17 土壘にペガラ	
32 除間・松林 SE02	高松市多肥下町	鬼當地・20	後期後葉	7.0×0.6	無柱り・垂・壁・小壺	18 土壘にペガラ	
33 除間・シンド	SE02	高松市佐佐木町	鬼當地・9.6	弥生時代	1.8×0.6	無柱り・石器・垂・壁	19

※時期決定は各個手書きによる

とができない場合も多い。従って本稿では各報告書中で井戸と記載された資料を中心に集成した。また、土坑や不明遺構とされた遺構のうち、井戸の可能性があると明記されたものについても可能な限り併せて掲載した。後者については遺漏も多かろうと思うが、ご指摘していただき、集成が充実すれば幸いである。今回の集成作業の結果、香川県で弥生時代に属する井戸は13遺跡21例が確認された⁽⁵⁾ (Tab. 8)。また、報告書中で井戸の可能性があると記載されたものを含めると19遺跡33例を数える。紙幅の関係から、香川県における井戸の変遷と掘削の契機などについては別稿を用意することとし、以下では本遺構例との比較検討を行うこととする。

完形土器の廃棄は中期中葉の成重遺跡から見られ、終末期まで比較的多くの例が認められる。体部に意図的な焼成後穿孔を行なう例は本例のはか、前田東・中村遺跡、川津一ノ又遺跡、旧練兵場遺跡などで見られる。これらは他地域でも広く認められる現象であり、井戸の廃絶に際した儀礼の一つとして広範囲で共有されていたものと考えられる。

注目される事象として、赤色顔料、特に水銀朱付着土器の出土が挙げられる。本例をはじめとして、上天神遺跡、川津一ノ又遺跡で水銀朱付着土器が検出されているほか、天満宮西遺跡では井戸周辺の溝より朱の付着した土器が見られ、旧練兵場遺跡では井戸周辺の住居から水銀朱精製用具と考えられている把手付広口皿が出土している。近藤が井戸との関連を想定した手工業生産の中でも、水銀朱との関連性が高かった可能性が考えられる。

ただし、井戸の用途は手工業生産に限定されず、日常生活における水の需要を満たすためにも用いられたと考えられる。他地域に比べて井戸の少ない四国地域では、井戸の掘削に特殊な契機が想定できる可能性も考えられるが、手工業生産を主たる目的として井戸が掘削されたと判断するのは、現状の資料からは困難である。類例の増加を待ち判断したい。また、本遺跡例を見ても、水銀朱そのものが井戸の祭祀に用いられた形跡は今のところ認められておらず、あくまでも水銀朱の精製・貯蔵に関連する土器が井戸に廃棄されているという状況が認められるのみであることには注意が必要である。

第2層下位出土器台の存在も特殊な例であり、注目される。最下部からの完形に近い器台の出土は、現在のところ香川県内では類例が認められない。器台の用途については「用途の少なくとも1つが水にかかる祭祀であった」(宇垣2000)とする見解が提示されており、本遺構出土の器台も井戸の祭祀に選択的に用いられたことが考えられる。周辺地域の状況を見ると、吉備地域では井戸底から完形の器台が出土する例がある程度認められることが指摘されている(河合2008)。井戸の廃棄に伴う儀礼に関して、吉備地域と1つの規範が共有された可能性も考えられる。本遺構出土の器台が胎土・色調・文様などから織入品であると考えられる点も示唆的である。

以上、香川県域の資料との比較から本遺構の位置づけを概観した。弥生時代の四国では井戸が掘削されることは少なく、検出数も少ないことが知られており、香川県も例外ではない。しかし中期中葉以降、確実に井戸は掘削されており、一部では特殊な手工業生産との関連が想定される例もあるなど、集団にとっての井戸の重要性は決して低くなかったものと考えられる。今後は集落の中での配置や住居との関連、さらには井戸掘削の契機などの問題について、検討を重ねる必要があるだろう。

註

- (1) 下川津遺跡出土の香東川下流域産土器のうち、後期中葉から古墳時代初頭の土器について「下川津B類」と呼称された。また、森下友子はこの種の胎土を「胎土1類」と呼称し、岩清水山西南麓を粘土の採取地と推測した（森下1995）。
- (2) 「香東川下流域産とは明瞭に区別できる灰白色～黄橙色の胎土を有し、つくりがやや粗雑な土器群」とされる白色系の土器（乘松編2004）などがある。本遺構からもこうした資料は認められる。
- (3) 31をはじめとして、大型鉢は残存状況が最大で1/8程度と悪く、完形品が多数検出された壺や盃とは対照的である（PL. 4-2）。水銀朱の精製に関連するとされる把手付広片口皿は壺を縦に半裁したような形状を見せることが知られる。遺構の完掘ができておらず、本来は完形に近い形状に復元できる可能性も否定できないが、大型鉢の残存部の形状は皿としての使用も可能な形状であり、破碎されたもの、水銀朱の精製容器として転用された可能性も考えられる。こうした場合には、今回行った試算よりも水銀朱の容量は少なく見積もられるだろう。また、把手付広片口皿を用いた水銀朱の精製の際、加水し、加熱することで不純物を取り除く手法が想定されている（巾毛1998）。内面水銀朱付着位置がこうした行為の結果であるとすれば、内面朱付着部位から導いた水銀朱の容量よりも、加えた水の嵩だけ本来の容量は少なかったことが想定される。
- (4) 器種組成の算出にあたっては、口縁部残存個体全てを対象にし、（大久保1995）を参考に器種分類を行い、口径と残存率をもとに組成比を算出した。この際、各細分類で口径を2cmごとに分けて残存率の合算を行った。また、100%未満の端数は繰り上げて1個体にカウントした。ただし、本遺構は調査時に遺物全てを取り上げることができたわけではないため、本来の組成比を厳密に反映した数字ではない。
- (5) 香川県教育委員会の森下英治氏のご教示によると、旧練兵場遺跡に弥生時代後期初頭に属する井戸がもう1基存在することである。報告書の刊行を待ち、集成に追加したい。

（Tab. 8 香川県弥生時代井戸集成参考文献）

1. 山元素子編 2008『住吉遺跡 渡池跡 北内遺跡 池下遺跡』一般国道32号築歌バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 香川県教育委員会ほか
2. 森格也ほか編 2004『成重遺跡 I 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第47冊 香川県教育委員会ほか
3. 森格也・長井博志編 2005『成重遺跡 II 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第54冊 香川県教育委員会ほか
4. 大久保徹也・森格也編 1995『上天神遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6冊 香川県教育委員会ほか
5. 小川賢編 2004『津内・東井坪遺跡、中森遺跡、林浴遺跡、林下所遺跡、林下所・木太今村上所遺跡、
- 林下所、六条乾遺跡、六条上川西遺跡、六条西村遺跡』四国横断自動車道関連特別用地対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松市教育委員会
6. 廣瀬當雄・西岡達哉編 1996『空港跡地遺跡 I 空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 香川県教育委員会ほか
7. 藏本晋司編 1995『平池南遺跡』陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 香川県教育委員会ほか
8. 森格也・古野徳久編 1995『前田東・中村遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告第3冊 香川県教育委員会ほか
9. 川畠聰編 2002『天満・宮西遺跡～集落・水田編～』太田第2地区画整理事業に伴う埋蔵文化財

- 発掘調査報告第6冊 高松市教育委員会
10. 乗松真也編 2004『空港跡地遺跡』Ⅶ 空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第8冊 香川県教育委員会ほか
 11. 片桐孝浩編 2006『小山・南谷遺跡』Ⅱ 県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 香川県教育委員会
 12. 森下英治編 2003『国立善通寺病院改修事業に伴う旧練兵場遺跡発掘調査概報』1 平成13年度・14年度上半期の発掘調査成果概要報告（財）香川県埋蔵文化財調査センター
 13. 山元元素編 2004『川岡遺跡』県道円座香南線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 香川県埋蔵文化財センター
 14. 宮崎晋治編 2007『羽門遺跡』一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
- 第2冊 香川県埋蔵文化財センター
15. 片桐孝浩編 2002『原間遺跡』Ⅰ 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第39冊 香川県教育委員会ほか
 16. 古野徳久編 1998『川津一ノ又遺跡』Ⅱ 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊（財）香川県埋蔵文化財センター
 17. 川畑聰編 2002『四原遺跡』太田第2地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 高松市教育委員会
 18. 山本英之・中西克也編 1997『日暮・松林遺跡』都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松市教育委員会
 19. 山本英之・中西克也編 1999『キモンドー遺跡』太田第2土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松市教育委員会

〈主要参考文献〉

- 市毛勲 1998『新版 朱の考古学』雄山閣出版
- 宇垣匡雅 2000『鋸歯文をもつ土器－吉備の農耕儀礼と葬送儀礼』『考古学研究』第47卷第2号 考古学研究会
- 梅木謙一 2004『四国の弥生中期中葉～後期前葉の土器』『弥生中期土器の併行関係』第53回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会
- 大久保徹也 1990『下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前期の土器について』『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』香川県教育委員会ほか
- 大久保徹也 1995『上天神遺跡における弥生後期土器の構成』『上天神遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6冊 香川県教育委員会ほか
- 大久保徹也 1998『弥生時代の内尚朱付土器』『考古学ジャーナル』No.438 特集■考古資料としての赤色顔料
- 大久保徹也 2003『高松平野香東川下流域窪土器の生産と流通』『初期古墳と大和の考古学』学生社
- 岡山真知子 1998『弥生時代の水銀朱の生産と流通』『考古学ジャーナル』No.438 特集■考古資料としての赤色顔料
- 片桐孝浩 2006『弥生時代後期初頭～中葉の土器』『小山・南谷遺跡』Ⅱ 県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 香川県教育委員会ほか
- 鍾方正樹 2003『井戸の考古学』ものが語る歴史シリーズ⑧ 同成社
- 佐藤竜馬 1992『出土状態について』『空港跡地遺跡発掘調査概報』平成4年度（財）香川県埋蔵文化財調査センター

第2節 A調査区井戸S E 2について

- 河合忍 2008 「岡山県における弥生から古墳時代前期の井戸」『井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として～』第57回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会ほか
- 北山健一郎・森下友子編 1995 『太田下・須川遺跡』 高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 香川県教育委員会ほか
- 清水渉 1996 「弥生時代の井戸出土遺物について」『平池南遺跡』 陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 香川県教育委員会ほか
- 地学団体研究会・新版地学事典編集委員会編 1996 『新版地学事典』 半凡社
- 信里芳紀 2004 「讃岐地方における弥生中期の土器編年・凹線文期を中心にして・」『弥生中期上器の併行関係』 第53回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会
- 信里芳紀 2005 「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年・凹線文期を中心にして・」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』 I 香川県埋蔵文化財センター
- 信里芳紀 2006 「太田下・須川遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』 平成17年度 香川県教育委員会
- 乗松真也編 2004 『空港跡地遺跡』 VI 空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第8冊 香川県教育委員会ほか
- 乗松真也 2006 「高松平野における弥生時代後期の土器編年」『調査研究報告』 第2号 香川県歴史博物館
- 古野徳久 2002 「コトデン高架建設」『埋蔵文化財試掘調査報告』 XV 香川県内遺跡発掘調査 香川県教育委員会
- 堀大介 1999 「手工業生産に伴う井戸について」『考古学に学ぶ—遺構と遺物ー』 同志社大学考古学シリーズ VI
- 堀大介 2008 「井戸の経緯と諸問題」『井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として～』第57回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会ほか
- 松原聰 2003 『フィールドベスト図鑑』15 日本の鉢物 学習研究社
- 真鍋昌宏 2000 「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年』四国編 木耳社
- 森下友子 1995 「胎土1類土器について」『太田下・須川遺跡』 高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 香川県教育委員会ほか

Tab. 9 太田下・須川遺跡出土遺物鑑定表

本連続の()は、既存の語を示す。

編 番	地質 名	地質 分類	層位 (m)	岩種	堆積(岩相)		外層		中層		底 層		地 質 特 性	
					1段	2段	3段	4段	5段	6段	7段	8段		
24	AIG-S22	冲积 堆积	-	冲积	砂层	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	
25	AGS-S21	冲积 堆积	(3.7)	冲积	砂层	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	
26	AGS-S22	冲积 堆积	-	冲积	砂层	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	
27	AGS-S22	冲积 堆积	-	冲积	砂层	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	
28	AGS-S22	冲积 堆积	-	冲积	砂层	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	
29	AGS-S22	冲积 堆积	-	冲积	砂层	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	
30	AGS-S23	冲积 堆积	-	冲积	砂层	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	
31	AGS-S22	冲积 堆积	32.8	冲积	砂层	(C1-C2)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
32	AGS-S22	冲积 堆积	32.5	冲积	砂层	-	(4.9)	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
33	AGS-S22	冲积 堆积	32.4	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
34	AGS-S22	冲积 堆积	32.3	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
35	AGS-S22	冲积 堆积	32.3	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
36	AGS-S22	冲积 堆积	32.2	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
37	AGS-S22	冲积 堆积	32.1	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
38	AGS-S22	冲积 堆积	32.0	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
39	AGS-S22	冲积 堆积	31.9	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
40	AGS-S22	冲积 堆积	31.8	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
41	AGS-S22	冲积 堆积	31.7	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
42	AGS-S22	冲积 堆积	31.6	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
43	AGS-S22	冲积 堆积	31.5	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
44	AGS-S22	冲积 堆积	31.4	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
45	AGS-S22	冲积 堆积	31.3	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
46	AGS-S22	冲积 堆积	31.2	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积
47	AGS-S22	冲积 堆积	31.1	冲积	砂层	(2.6)	-	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积	冲积

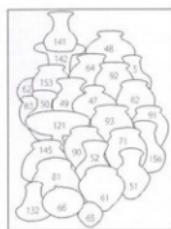
漢文	翻訳	用例	外観		文様・脚注		出典	備考
			口径	高さ	外形	内面		
70 ASR-SR2 小生 矢	15.6 (2.5) -	口コロナ部は、→2寸余 口径の内側に、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V072.3	無
71 ASR-SR2 小生 矢	15.6 (16.4) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
72 ASR-SR2 小生 矢	12.7 (2.7) 5.6	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V072.3	無
73 ASR-SR2 小生 矢	11.8 (12.5) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
74 ASR-SR2 小生 矢	10.0 (1.0) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
75 ASR-SR2 小生 矢	13.8 (3.2) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
76 ASR-SR2 小生 矢	15.0 (6.2) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
77 ASR-SR2 小生 矢	15.0 (6.2) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
78 ASR-SR2 小生 矢	13.0 (2.7) 5.6	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
79 ASR-SR2 小生 矢	16.0 (3.0) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
80 ASR-SR2 小生 矢	15.6 (4.2) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
81 ASR-SR2 小生 矢	13.3 (14.8) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
82 ASR-SR2 小生 矢	14.0 (27.1) 7.0	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
83 ASR-SR2 小生 矢	13.9 (18.9) 4.7	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
84 ASR-SR2 小生 矢	14.3 (1.2) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
85 ASR-SR2 小生 矢	13.6 (3.0) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
86 ASR-SR2 小生 矢	15.6 (6.6) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
87 ASR-SR2 小生 矢	15.0 (9.8) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
88 ASR-SR2 小生 矢	19.6 (4.7) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
89 ASR-SR2 小生 矢	15.6 (12.0) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
90 ASR-SR2 小生 矢	12.7 (22.2) 5.4	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
91 ASR-SR2 小生 矢	12.8 (22.2) 5.7	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
92 ASR-SR2 小生 矢	16.0 (28.1) 8.3	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
93 ASR-SR2 小生 矢	13.0 (26.5) 6.1	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無
94 ASR-SR2 小生 矢	13.6 (17.7) -	口付部は、矢印の方向へ、矢印	外縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	内縁 縫い模様	10V05.3	無

推定 測定 部位 名	測定 部位 名	種類	面積 cm ²	透徹 度%	外観	表面 状態	内部 状態	底面 状態	底面 透徹 度%	底面 透徹 度%	底面 透徹 度%		
交差・断面													
外生 十脚	外生 十脚	海扇	36.4	13.9	外生 十脚	口呼吸孔・呼吸筋・口呼吸管・呼吸筋 孔の上部に2つずつ、側方に1つずつ、側面に側筋 筋孔がある。側面2つは側筋筋孔と側筋筋孔の間に 側筋筋孔がある。	7.57Hx4.7	亂	2-3mmの下部が白色で、上方が 黒褐色。側筋筋孔の間には側筋筋孔と側筋筋孔の間 には側筋筋孔がある。	具	有	無	
122 AK/SE2	外生 十脚	海扇	20.4	(2.8)	11脚	外生 十脚	11脚の側筋筋孔の間には側筋筋孔がある。	7.57Hx4.7	亂	1mm以上の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
123 AK/SE2	外生 十脚	海扇	22.0	(3.1)	11脚	外生 十脚	11脚の側筋筋孔の間には側筋筋孔がある。	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
124 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(3.8)	11脚	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
125 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(3.0)	11脚	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
126 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(10.2)	11脚	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
127 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(10.2)	11脚	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
128 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(7.8)	11脚	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
129 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(7.2)	11脚	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
130 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(5.0)	11脚	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
131 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(3.0)	11脚	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
132 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(12.0)	13.4	外生 十脚	1-7脚は側筋筋孔と側筋筋孔の間に 側筋筋孔がある。8脚以上は側筋筋孔と側筋筋孔の間に 側筋筋孔がある。	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
133 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(6.6)	14.6	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
134 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(4.2)	15.6	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
135 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(3.2)	16.0	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
136 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(6.7)	16.8	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
137 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(3.2)	22.9	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
138 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(0.5)	19.2	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
139 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(2.6)	23.2	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
-40 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(2.2)	18.0	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
141 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(3.8)	20.8	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無
142 AK/SE2	外生 十脚	海扇	-	(2.5)	22.6	外生 十脚	外生 十脚	7.57Hx4.7	亂	1mm以下の厚さの、底石の凹凸 による凹凸がある。	具	有	無

測定箇所	測定名	被験者	年齢	性別	法値(cm)	外因	内因	色調		物性		参考
								外因	内因	感覚	物理	
脛下部 脛上部	学生 土居	成年 ♂	14.0 (5.7)	-	浅赤	11赤 60H	11赤 60H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
143 AKR S12	学生 土居	成年 ♂	16.0 (5.9)	-	淡赤	13赤 45H	13赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
144 AKR S12	学生 土居	成年 ♂	16.0 (5.9)	-	淡赤 淡赤	13赤 45H	13赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
145 AKR S12	学生 土居	成年 ♂	13.1 (12.6)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
146 AKR S12	学生 土居	成年 ♂	20.4 (15.5)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
147 AKR S12	学生 土居	成年 ♂	12.0 (12.8)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
148 AKR S12	学生 土居	成年 ♂	14.8 (5.7)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
149 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	16.0 (6.2)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
150 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	21.2 (5.8)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
151 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	14.6 (4.3)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
152 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	16.6 (5.3)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
153 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	14.8 (5.2)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
154 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	25.0 (12.5)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
155 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	40.6 (10.6)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
156 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	11.2 (9.5)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
157 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	12.8 (5.2)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
158 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	15.0 (2.8)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
159 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	18.8 (13.9)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
160 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	17.0 (4.3)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
161 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	22.6 (1.6)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
162 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	23.7 (1.5)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
163 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	24.0 (1.5)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
164 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	12.5 (5.6)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
165 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	28.1 (3.6)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
166 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	26.2 (2.5)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
167 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	10.6 (5.0)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感
168 AKR S12	学生 土居	成年 ♀	18.6 (5.0)	-	淡赤 淡赤	11赤 45H	11赤 45H	赤	赤	温感 温感	温感 温感	温感 温感

地名	位置	構造	岩質	風化(%)	風化(%)	次元・品質		外観	内観	色調	粒度	塊度	地盤区分	備考	
						表面	内部								
新井合	二面路	深所	白雲	弱風化	風化	アーチ	断続	赤褐色	赤褐色	赤褐色	細粒	大	Ⅲ	良	無
169. 015. S04	二面路	深所	白雲	弱風化	風化	18.4	6.0	-	-	赤褐色	細粒	大	Ⅲ	良	無
170. 016. S04	一面路	5.0m	12.9	(3.4)	25.0	25.0	25.0	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
171. 016. S04	一面路	6.0m	14.4	6.0	風化	風化	風化	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
172. 016. S04	土面路	高所	-	(3.9)	9.5	6.0	風化	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
173. 016. S04	一面路	5.0m	-	(2.4)	25.0	25.0	25.0	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
174. 016. S04	一面路	高所	13.0	9.4	9.4	アーチ	断続	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
175. 016. S04	一面路	5.0m	14.9	-	8.6	風化	風化	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
176. 016. S04	土面路	5.0m	9.4	16.1	-	アーチ	断続	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
177. 016. S04	土面路	10.0m	15.0	(1.0)	-	7.0	風化	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
178. 016. S04	一面路	5.0m	1.5	2.0	2.0	アーチ	断続	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
179. 016. S04	一面路	5.0m	13.8	3.2	10.0	アーチ	断続	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
180. 016. S04	一面路	5.0m	11.6	(2.7)	-	アーチ	断続	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
181. 016. S04	一面路	5.0m	-	(2.1)	4.7	風化	風化	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
182. 016. S04	一面路	5.0m	20.0	(3.0)	-	アーチ	断続	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
183. 016. S04	一面路	5.0m	-	(2.0)	10.0	風化	風化	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
184. 016. S04	一面路	5.0m	-	(2.0)	10.0	アーチ	断続	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
185. 016. S04	一面路	5.0m	-	(2.0)	15.0	アーチ	断続	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
186. 016. S04	一面路	5.0m	-	(2.0)	16.0	アーチ	断続	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
187. 016. S04	一面路	5.0m	1.5	22.0	8.9	アーチ	断続	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
188. 016. S04	一面路	5.0m	16.4	16.4	16.4	風化	風化	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
189. 016. S04	一面路	5.0m	13.8	13.8	13.8	風化	風化	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
190. 016. S04	一面路	5.0m	16.0	16.0	16.0	アーチ	断続	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
191. 016. S04	一面路	5.0m	14.6	14.6	14.6	アーチ	断続	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
192. 016. S04	一面路	5.0m	21.0	(2.3)	19.6	風化	風化	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
193. 016. S04	一面路	5.0m	20.4	(3.0)	-	アーチ	断続	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無
194. 016. S04	一面路	5.0m	-	(6.5)	-	アーチ	断続	風化	風化	風化	細粒	中	Ⅲ	良	無

地名・基盤	測量名	層序	層構	心部(?)		外殻	内面	色調	外観	細部	細部	細部	細部
				外殻	内面								
新潟市中央区 寺尾	SRI-1	厚生	薄板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
221 GKR-SRI-1	厚生	-	(2.3)	-	(2.3)	-	-	-	7.5YR6/2	7.5YR6/2	有	有	有
222 GKR-SRI-1	厚生	-	(2.3)	-	(2.3)	-	-	-	7.5YR6/3	7.5YR6/3	有	有	有
223 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
224 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
225 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
226 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
227 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
228 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
229 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
230 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
231 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
232 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
233 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
234 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
235 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
236 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
237 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
238 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
239 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
240 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
241 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
242 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
243 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
244 GKR-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有
51 ALG-SRI-1	厚生	土被	厚板	「鳥」	薄肉	薄肉	薄肉	淡灰	薄肉	有	有	有	有



A調査区 SE 2 出土土器集合



1. A 調査区 SE 2 土器出土状況（第2検出面）



2. A 調査区 SE 2 土器出土状況（第3検出面）



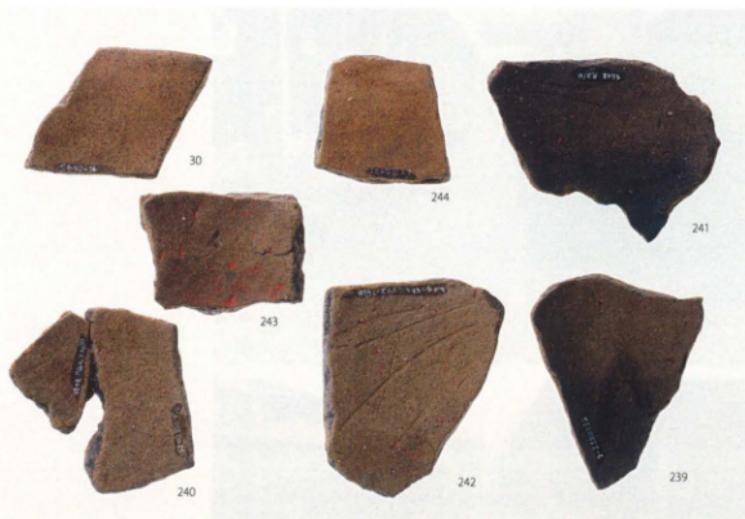
A 調査区 SE 2 器台・壺出土状況（第 4 検出面）



1. A 調査区 SE 2 出土水銀朱付着把手付広片口皿



2. A 調査区 SE 2 出土水銀朱付着鉢



1. A 調査区 SE 2 出土赤色顔料付着土器



2. A 調査区 SE 2 出土赤色顔料付着底部



1. A 調査区調査前状況
(北から)



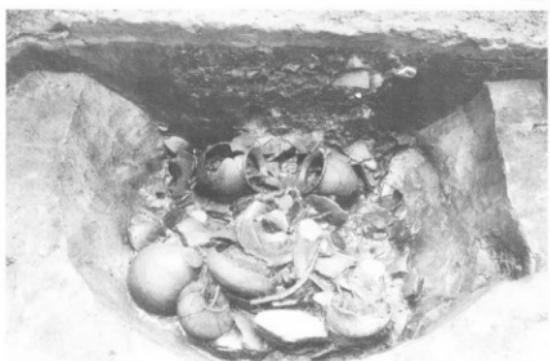
2. A 調査区北部遺構
検出状況 (南から)



3. A 調査区中央部遺
構検出状況 (南から)



1. A 調査区 SE 2
遺物出土状況①



2. A 調査区 SE 2
遺物出土状況②



3. A 調査区 SE 2
遺物出土状況③



1. A 調査区 SE 2
遺物出土状況④



2. A 調査区 SE 2
遺物出土状況⑤



3. A 調査区 SE 2 断面
(西から)



1. A 調査区中央遺構（南から）



2. A 調査区
噴礫・SR 1 検出
状況（南から）



3. A 調査区噴礫断面



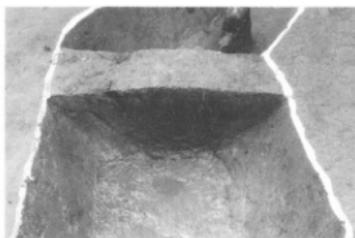
1. A 調査区 SD 1 (西から)



2. A 調査区 SD 3 (北から)



3. A 調査区 SD 3 (東から)



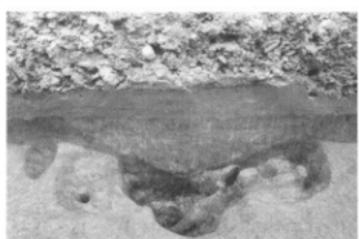
4. A 調査区 SD 3 断面



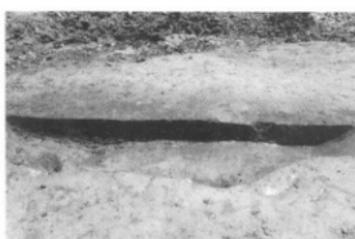
5. A 調査区 SE 1 (西から)



6. A 調査区 SE 1 断面



7. A 調査区 SK 5・6 (東から)



8. A 調査区 SK 9 断面



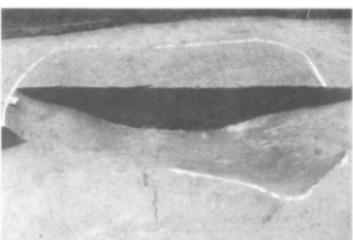
1. A 調査区南部遺構（南から）



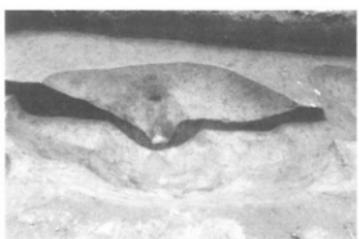
2. A 調査区南部下層確認状況（南から）



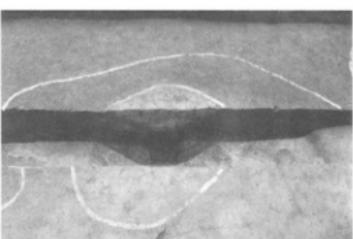
3. A 調査区 SK10・11（南から）



4. A 調査区 SK11 断面



5. A 調査区 SK10（西から）



6. A 調査区 SK10 断面



7. A 調査区中央東壁土層（北から）



8. A 調査区南端部東壁土層（南から）



1. B 調査区調査前
状況（南から）



2. B 調査区北部遺構
(北から)



3. B 調査区 SD 4
(北から)



1. B 調査区 SD 4 遺物出土状況①



2. B 調査区 SD 4 遺物出土状況②



3. B 調査区 SD 4 遺物出土状況③



4. B 調査区 SD 4 遺物出土状況④



5. B 調査区 SD 4 遺物出土状況⑤



6. B 調査区 SD 4 遺物出土状況⑥



7. B 調査区 SD 4 遺物出土状況⑦



8. B 調査区 SD 4 遺物出土状況⑧



1. B 調査区 SD 4 断面



3. B 調査区南部東壁土層②



2. B 調査区南部東壁土層①



4. B 調査区南部遺構（北から）



1. C 調査区北部遺構検出状況（南から）



2. C 調査区北部断面調査状況（南から）



3. C 調査区中央遺構検出状況（南から）



4. C 調査区中央遺構（南から）



5. C 調査区下層確認状況（南から）



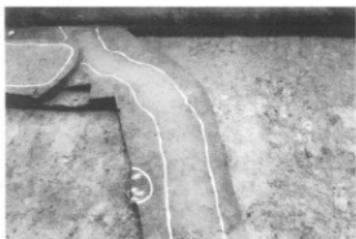
6. C 調査区 SD 2 断面



7. C 調査区 SD 1 断面



8. C 調査区中央東壁土層



1. C 調査区 SD 6 検出状況（西から）



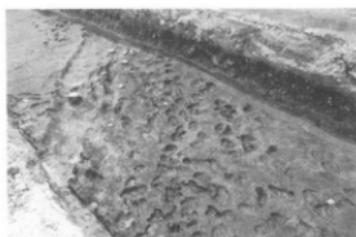
2. C 調査区 SD 6 · SK 3 (西から)



3. C 調査区 SD 7・足跡検出状況 (南西から)



4. C 調査区 SD 7・足跡 (南西から)



5. C 調査区 SD 7・足跡 (北東から)



6. C 調査区 SD 7・足跡断面



7. C 調査区 SR 1 (北から)



8. C 調査区 SR 1 (東壁) 断面



142



141



121



49



66



65

A 調査区 SE 2 出土土器①



47



61



64



50



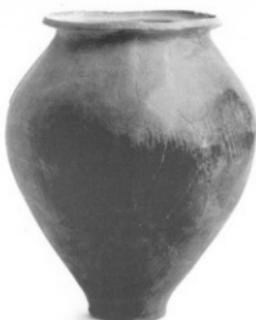
52



51



153



71



93



90



91



83

A 調査区 SE 2 出土土器③



82



92



145



48



132



62

A 調査区 SE 2 出土土器④



154



156



154



156



155



155



156

A 調査区 SE 2 出土土器⑤・石器

PL. 22



176



175



174



170



167



172



179

B 調査区 SD4・C 調査区 SR 1 出土土器

報告書抄録

高松市埋蔵文化財調査報告第124集

国道11号高松東道路関連整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

太田下・須川遺跡

平成21年3月31日

編 集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発 行 高松市教育委員会
印 刷 有限会社 中央ファイリング